

國立臺灣大學日本語文學系

碩士論文



Graduate Institute of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis

夏目漱石と張文環の文芸思想の接点——
近代化社会の父権制度・資本主義をめぐって

The link of literary thoughts between Soseki Natsume and
Wenhuan Chang
-on the patriarchy and capitalism of modernizing society

吳勤文

Ching-Wen Wu

指導教授：范淑文 博士

Advisor: Shu-Wen Fan, Ph.D.

中華民國 104 年 1 月

January, 2015



謝辭

高三時在升學考試的壓力下讀了《心》。故事的張力、人心的寫實和我對「明治的精神」的無知，帶给了我一個喘息的空間。如果沒有那份喘息，也不會有這篇論文的產生。

感謝在政大日文系學習日文的過程中特別幫助我的吉田妙子老師，也感謝大學期間獲得交換學生的機會得以在宇都宮大學接觸近現代文學賞析的課程。

在台大日文所，指導教授范淑文老師輕鬆活潑的課堂，讓不擅與人交際的我得以學習與他人做文學交流；老師特別重視人際關係連結的研究視點，不管是在我的人生或是研究上都有很大的啟發。感謝御茶水女子大學提供的發表機會和范老師的照顧，而在尋找論文研究方向時，老師也在忙碌之中指點我換過兩次題目，每次的指點都幫助我突破研究和論文寫作上的盲點，提供了許多的建議和修正。在我遭受挫折的時候老師也鼓勵我繼續前進，這一路走來有許多畢生難忘的回憶，非常感謝老師的指導和幫助。

特別感謝我的三位口試委員，范淑文老師、黃錦容老師、黃翠娥老師。范淑文老師特別指點了我在漱石研究方面以及論文整體結構上的問題，黃錦容老師在提案及口試時針對近代化的概念對我的論文提出了很有益的批判，黃翠娥老師在百忙之中一字一句細心閱讀我的論文，並在文本比較和論文主題的統一性上提供了許多寶貴的意見。而在口試後修改論文的期間，為了探討論文的核心議題，我在整體架構上做了很大的更動，並導入了其他的研究方法，在此將負起全部的責任提出這篇論文。

日常學習方面，感謝陳明姿老師、太田登老師、米山禎一老師、林慧君老師、朱秋而老師、徐興慶老師、辻本雅史老師、謝豐地正枝老師、林立萍老師、曹景惠老師、洪瑟君老師、黃郁涵老師，於課堂上的啟發、鼓勵及生活上的關心。感謝日文系系辦在課務上的諸多協助，以及擔任日文課程助教時，彭誼芝老師、李欣倫老師、許惠晴老師、張鈞竹老師對論文進度和生活上的關心。感謝有機會透過課程或研討會和川合康三老師、平岡敏夫老師討論漱石文學，並感謝林姿瑩學姐介紹我幫忙垂水千惠老師翻譯論文以及平時的照顧。感謝各位學長姐、同學、學弟妹在課業、日常生活上的提攜幫助和關心，並感謝侯紀安同學、徐廷瑋同學、曾婧芳同學一直以來的支持鼓勵和陪伴。感謝好友洪思綺老師熱心幫我修正英文摘要，以及好友景涵、昱丹、珮瑜、筱筑的陪伴。

最後，感謝我的父母和兄弟，因為有他們的援助和關懷，我才能在豐富的學習生活之中完成這篇論文。願這篇論文是到訪漱石墓前未放上的那朵百合花。

要旨



日本明治時代の近代化経験は、植民地時代の台湾に取り入れられていた。国民国家統合に伴った近代化の中で、明治社会と台湾植民地社会は、日本帝国の国家資本主義と家族国家観から影響を受けていた。

そういう社会体制のもとで、明治時代の「文明批評家」の夏目漱石は、作品において資本主義と父権体制の問題を提起している一方、近代化の明治社会を観察した結果、「国家」の概念と対置する「個人主義」の考えに辿り着いた。一方、「植民地作家」の張文環は、日本帝国に対抗する反植民意識を抱きながら、作品の中で近代化の中の台湾植民地社会の資本主義と父権体制の問題を描き出している。その上で、両作家とも長塚節の『土』と島崎藤村の文学に対して関心を持っている。

本研究は、文学社会学の方法に基づいて、漱石と張文環の文芸思想の本質を探究し、両作家の共通な文芸的関心を通してその近代化批判と文芸思想の接点を提示する。漱石に関しては、『草枕』と日清戦争後の社会小説の繋がり、『三四郎』で探究される「新しき西洋」と「古き日本」の概念、『それから』における代助の姦通心理とその近代化批判の関連、『こゝろ』の探求する明治社会の思想問題と「明治の精神」の関連性に注目する。そして、張文環に関しては、「父の要求」の提起している「階級と親子間の問題」、「過重」に描き出されている文明憧憬と立身出世の幻滅とそれに関わる「父の喪失」の現実への発見、『山茶花』における台湾植民地社会の生活現実の描写、「鬪雞」における自然主義風のリアリズムと近代化社会の問題への描出に注目する。その上で、長塚節の『土』と島崎藤村の文学に対する漱石と張文環の共通な文芸的関心を論じ、両作家の文芸思想の本質に繋げていく。

本研究は、漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の本質と接点を提示することによって、明治社会と台湾植民地社会に影響を与えた国民国家統合とそれに伴った近代化に対する批判的な時代思潮の一端を示すことを研究目的とする。

キーワード：近代化批判、資本主義、父権体制、国民国家統合、文芸思想



摘要

日本明治時期的近代化經驗為台灣殖民地時期的近代化所採用。在國民國家統合所伴隨而來的近代化當中，明治社會與台灣殖民地社會受到日本帝國的國家資本主義與家族國家觀的影響。

在這樣社會體制下，明治時期的「文明評論家」夏目漱石，一方面在其作品中提及資本主義與父權體制的問題，一方面導向了相對於「國家」概念的「個人主義」思維，作為觀察近代化的明治社會的結果。而「殖民地作家」張文環懷抱著反抗日本帝國的反殖民意識，於其作品中刻劃了台灣殖民地社會中的資本主義與父權體制的問題。此外，這兩位作家皆對長塚節的《土》與島崎藤村的文學抱持著關心。

本研究將基於文學社會學的方法，探究漱石與張文環的文藝思想的本質，並透過文藝上之共同關心提示兩位作家在近代化批判與文藝思想上的交集。漱石方面，將關注《草枕》與甲午戰爭後日本國內盛行的社會小說的關聯、《三四郎》所探討的「嶄新西洋」與「老舊日本」的概念、《之後》所描繪的代助的通姦心理與其近代化批判的關聯、《心》所探究的明治社會的思想問題與「明治的精神」的關聯性。張文環方面，將矚目於〈父親的要求〉所提起的「階級與親子間之間的問題」、〈過重〉所描繪出的文明憧憬和光耀門楣冀求的幻滅及「喪失父親」的現實、《山茶花》所描繪的台灣殖民地社會之生活現實、〈闖雞〉的自然主義風格之寫實主義與對近代化社會問題的刻畫。此外，將論及漱石與張文環對長塚節的《土》與島崎藤村的文學所抱持的共同的關心，與其文藝思想的本質做連結。

本研究的目的，乃透過提示漱石與張文環的近代化批判及文藝思想的本質與交集，明示對影響明治社會與台灣殖民地社會之國民國家統合與其伴隨而來的近代化具批判性的時代思潮的一個面向。

關鍵字：近代化批判、資本主義、父權體制、國民國家統合、文藝思想

Abstract



Modernizing experiences of Meiji society were adopted to Taiwan colonial society. Under the progress of modernization accompanied by integration of Nation-state, Meiji society and Taiwan colonial society are both influenced by state capitalism and the notion of Family state, which were carried forward by Japanese Empire.

Under that type of social system, “Modernization Critic”, Soseki Ntsume at Meiji period raised questions about capitalism and patriarchy in his literary works, and also, as the outcome of his observation on modernizing society, he arrived at a notion of “Individualism” which is contrast to the notion of “Nation”. And “Colonial Writer”, Wenhuan Chang at Taiwan colonial period, having the thought of counter-colonization against Japanese Empire, depicted the problems of capitalism and patriarchy in modernizing Taiwan colonial society. In addition, both of the two writers paid great attentions on Takashi Nakatuka’s “*Tsuchi*” and Touson Shimazaki’s literature.

This study is based on the method of sociology of literature, analyzing the essence of Soseki Ntsume’s and Wenhuan Chang’s literary thoughts, and to point out the link of the two writers’ criticisms on modernization and literary thoughts through their common concerns in literature. About Soseki Ntsume, this study will concentrate on the relation between “*Kusamakura*” and social novel formed after First Sino-Japanese War, the concept of “New Western” and “Old Japan” explored in “*Sanshiro*”, the connection between Daisuke’s criticisms on modernization and his mentality to commit adultery in “*Sorekara*”, as well as the connection of social thought in Meiji period and “Spirit of Meiji” explored in “*Kokoro*”. As for Wenhuan Chang, this study will focus on the “problems between class and parent-child conflict” expressed in “*Chichi no Youkyu*”, disenchantment of cult of modernity and careerism for being conscious of the fact of father deprivation described in “*Kajyu*”, life reality in Taiwan colonial society depicted in “*Sanzaka*”, and realism with Naturalism tendency and expressions about the problems of modernizing society in “*Yiamge*”. After those issues, this study will analyze Soseki Ntsume’s and Wenhuan Chang’s common concerns on Nakatuka’s “*Tsuchi*” and Touson Shimazaki’s literature, and relate the discussions to the essence of their literary thoughts.

The purpose of this study is to portray an aspect of *Zeitgeist* resisting integration of Nation-state and the accompanied progress of modernization, which influenced Meiji society and Taiwan colonial society, by presenting the essence and link of Soseki’s and Wenhuan Chang’s criticisms on modernization and literary thoughts.

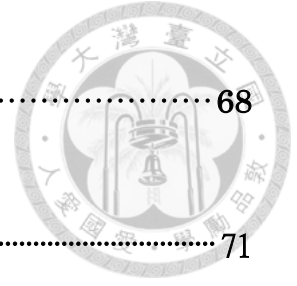
Keyword: criticisms on modernization, capitalism, patriarchy, integration of
Nation-state, literary thoughts






目録

謝辭.....	i
要旨.....	ii
摘要.....	iii
Abstract.....	iv
第一章 序論.....	1
一、 研究動機	1
二、 先行研究	4
三、 問題意識、研究方法、目的、範囲	17
四、 構成	21
第二章 夏目漱石の近代化批判と文芸思想.....	25
第一節 『草枕』—国民国家統合とそれに伴った近代化への批判の始まり	25
一、 日清戦争後の社会小説の動向との繋がり	25
二、「憐れ」による近代化問題への超越	30
第二節 『三四郎』—近代化と国民国家統合への批判	38
一、 近代人の戯画で示している近代化批判	38
二、「新しき西洋」と「古き日本」の問題	43
第三節 『それから』—国家近代化から離反する近代人	47
一、 代助の姦通心理に見られる資本主義と父権体制への反抗	47
二、 国民国家統合に対する反動の暗示	53
第四節 『こゝろ』—国民国家統合に反抗する「明治の精神」	55
一、 議論の分かれてきた『こゝろ』の思想性	55
二、 資本主義と父権体制への批判に繋がる『こゝろ』の手記と遺書.....	58
三、 「明治の精神」の真義と「個人主義」の国粹主義批判との繋がり	64



第五節 結び	68
第三章 張文環の近代化批判と文芸思想	71
第一節 「父の要求」—反植民意識の中の国民国家統合批判	71
一、 国民国家統合に従属した父権体制への認識	71
二、 植民地における資本主義と父権体制の問題への批判	76
第二節 「過重」—地方主義文学によって反映される国民国家統合の問題	79
一、 地方主義文学という背景	79
二、 国民国家統合に置かれていた植民地知識人の重荷	82
第三節 『山茶花』—国民国家統合に影響されている植民地社会	85
一、 台湾植民地における資本主義・父権体制問題	85
二、 国民国家統合に抵抗する田舎恋着と脱ロマン性	89
第四節 「閻雞」—資本主義と父権体制への反抗に隠されている国民国家批判	95
一、 資本主義と父権体制の環境への反抗	95
二、 国民国家批判に繋がる自然主義風のリアリズム	98
第五節 結び	102
第四章 夏目漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の接点	105
第一節 国家資本主義への批判で繋がる『土』への関心	105
第二節 父権体制と国民国家統合への批判で繋がる藤村文学への関心	112
第三節 結び	119
第五章 結論	121
参考文献	126

第一章 序論



1871年（明治4年）岩倉外使節団巡回の結果、明治政府は国力の弱さと条約改正の困難への認識として、殖産興業と軍事力の強化を優先にする内治優先論と、制度的西欧化の漸進論をとるに至り、三権分立・地租改正・学制・徴兵令・秩祿処分・司法改革などの政策を推進し、財政の中央集権化による鉄道や郵便などの交通・通信システム、銀行の発展、近代学校の建設を進めた。1895年日清戦争の結果として、明治政府は台湾を領有し、南進戦略と経済発展の基地を図るために、制度、物質建設を指標とする明治近代化の経験を台湾植民地に取り入れていた。その史実に基づいて、周婉窈は台湾植民地時代の近代化建設を明治社会の近代化建設と対照し、台湾植民地社会の近代化を「小規模の明治維新」¹と呼んでいる。陳芳明は台湾文学史の脈絡を整理するに当たって、台湾植民地の近代化と明治の文明開化の関連性²に言及している。人間の生活の感情を伝える文学そのものが、明治社会と台湾植民地社会の共通な近代化経験のもとで、どのような繋がりを形成しているかが興味深い。

一、 研究動機

明治社会と台湾植民地社会の近代化は、物質文明の建設のほかに、社会体制と思想上の顕著な影響関係が以下のように観察できる。

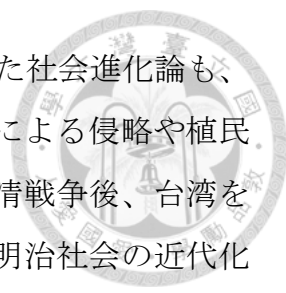
明治社会は、対外独立の緊迫に面して、儒教道徳と封建思想を掲げる徳川幕府の体制を打破する維新風潮が起こっていた。欧化主義のもとで、資本自由主義が流入し、自由主義国家を唱えるイギリスのスペンサアの社会進化論が歪められ、「完全な生活とは実用を主とした幸福な生活」、「自己保存、種族保存が第一」³という幸福論的思想が、加藤弘之・穂積陳重による社会進化論の紹介で流行していた。啓蒙思想家の福沢諭吉の唱えていた実学主義と功利思想⁴もそうい

¹周婉窈「殖民地化與近代化」『台灣歷史圖說』聯經，2009，P144-146

²陳芳明『殖民地摩登：現代性與台灣史觀』麥田，2011，P31-32

³吉田精一『明治大正文学史』桜楓社，1986，P11

⁴福沢諭吉の『学問のすすめ』（1874年より刊行）は実学の重要性と功利思想を唱導し、『西



う生存競争観に基づいていた。そして、明治社会に流行していた社会進化論も、やがて国家資本主義と功利主義の発展とともに、帝国主義国による侵略や植民地化を正当化するイギリスの植民政策の論理に同調した。日清戦争後、台湾を領有してから、植民地の管理に悩んでいた明治の為政者は、明治社会の近代化経験を台湾植民地に取り入れるようにした。初任民政官の後藤新平は、生物学原理を取り、政策としてルカスの英国植民政策学を参考にしていた⁵。後藤は、台湾植民地の旧習迷信の取り払い、科学、医療と「衛生」の建設などの物質文明の建設によって、植民地政府の統制を絶対的な権限に祭り上げ、台湾を日本の南進の基地と国家資本主義の延長にしたことに成功した。その上で、民権思想を抑圧するために、義務教育反対の教育無方針主義⁶を実施し、政治と社会科学の科目の排除の上で、国語と科学、工業、農業と衛生を重視する実学教育⁷を推進した。

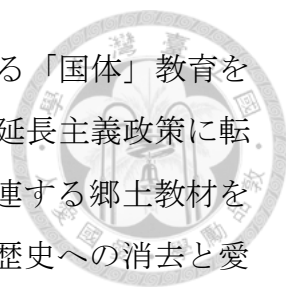
その一方で、明治社会では、欧化政策と明治政府の条約修正に不満した保守派側は、政教社の成立、『日本人』の発刊、皇学館の設置を通して、国粹主義を提唱して政変を行った。色川大吉の指摘によると、明治政府は明治十年代より報徳社を後援して、荒村復興のための自己規律の通俗道徳をすいあげ、資本主義による急速な家崩壊と都市移住で起り得る社会運動を防ぐために、「国家」の概念で通俗道徳の概念を再解釈し、「家族」道徳に新しい意味をつけ、忠君愛国の超目標を与えた。そして、明治十年代の自由民権運動を弾圧したのち、明治22年（1889）に天皇集権体制を強固する『明治憲法』を制定し、学校令を改め、

洋事情』（1866年より刊行）、『文明論之概略』（1875年に刊行）で西洋の啓蒙思潮と政治制度を紹介し、主知主義、資本自由主義を唱えている。

⁵野村明宏「植民地における近代的統治に関する社会学—後藤新平の台湾統治をめぐって」『京都社会学年報』第七号，1999，P1-24

⁶李會園『日據時期臺灣師範教育制度』（南天，1997，P22-26）によると、公学校の義務教育が正式的に六年制の初等教育として実施されたのは、日露戦争勝利の1904年2月以後である。

⁷周婉窈「實學教育、郷土愛與國家認同」（『臺灣史研究』第四期第二卷，1997，P22-30）は、国語教育の実施の内実について、台湾公学校と各時期の教科書を考察し、第三期教科書に科学、工業、農業と衛生など実学の紹介が多いという現象を指摘した。また、野村明宏「植民地における近代的統治に関する社会学—後藤新平の台湾統治をめぐって」（『京都社会学年報』第七号，1999，P1-24）も、1900年における国語学校における実業部、電信科、鉄道科、農業科の増設と、1928年における医学重視の台北帝国大学の設立を、実学教育の偏重と指摘している。



『教育勅語』（明治 23 年、1900）を發布し、国定教科書による「国体」教育を実施した⁸。台湾植民地社会でも、大戦に向かう中後期で内地延長主義政策に転換され、民権運動が厳しく弾圧され、日本神話と天皇制に関連する郷土教材を大量に採用した国語教育の推進が図られていた。殖民以前の歴史への消去と愛国愛郷の精神の形成を図っていた台湾公学校の第三期教科書（1923-1937、児童進学率の高い時期）の内容⁹と、1941 年の「大東亜戦争」への「志願兵」の徴兵における天皇統制の正当性を強める家族国家観の強調から見られるように、資本主義のもたらした個人主義の発展を防ぐために、台湾植民地の社会体制の発展も国粹主義を展開した明治社会の近代化の矛盾な経験を踏まえていた。

西川長夫は、近代国民国家の形成の前提を「文明化」と指摘し、フランス国民国家形成の典型への観察を通して、近代国民国家の構成について、（1）経済統合（資本主義形成）、（2）国民の統治—支配にかかわる諸機関（憲法、軍隊など）、（3）イデオロギー装置（家族のイメージ、近代学校）、（4）国民的なシンボル（国歌、国語、儀式、神話）、（5）イデオロギーとしての「市民（国民）宗教」という五つで要素で提示する上で、「欧化主義と国粹主義が交互に現れる」¹⁰という近代化に伴ってくる現象を指摘した。日本帝国の支配、生存競争観に基づく功利主義観のもとで、「文明化」を前提とし、資本主義の発展、軍隊、近代学校、家族国家観の形成、実学教育と天孫神話の提唱などから見られるように、明治社会と台湾植民地社会は近代国民国家の構成の要素を備えている上で、社会思想としては欧化主義と国粹主義が競合している。

その中で、明治時代の「文明批評家」の夏目漱石は、明治社会の近代化を批判し、「国家」の概念と対置する「個人主義」を提起した一方、漱石と共通な文芸的関心があると提起されてきた「植民地作家」の張文環は、1930 年代台湾文壇の反植民と近代化批判の風潮の中で、反植民意識を抱き、近代化の問題を描

⁸色川大吉『明治の文化』岩波書店、1970、P301-335

⁹周婉窈「實學教育、郷土愛與國家認同」（『臺灣史研究』第四期第二卷、1997、P38-45）は、「公學校國語課本不乏對日本歷史（神話）或人物的描寫。例如卷五第一課〈天之岩屋〉、卷五第十九課〈除蟒蛇〉（素戔鳴尊除八岐大蛇的故事）、卷六第八課〈征伐熊襲〉、卷六第十三課〈仁德天皇〉、卷八第十六課〈幼年時代的伊藤公〉……」と指摘している。

¹⁰西川長夫「日本型国民国家の形成—比較史的観点から—」西川長夫・松宮秀治『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、1999.02、P10-19

き出している。近代化問題に着眼する二人の作家は、果たしてどのように国民国家統合とそれに伴った近代化の問題を作品と文芸的関心に反映しているかが興味深い。



二、 先行研究

先行研究について、まず近年行われてきた漱石と張文環の比較研究を検討してから、研究動機に沿って漱石研究と張文環研究においてまだ提起されていない研究の方向を提示していきたいと考えられる。

(一) 夏目漱石と張文環の比較研究への検討

李郁蕙「「未亡人」の家—日本語文学と漱石の『こゝろ』」は、漱石の『こゝろ』と張文環の「父の要求」を「父権回復」¹¹傾向で繋げ、明治天皇に忠心な父から離れる青年の「私」のことを描き出した『こゝろ』と、「未亡人の家」から離れる被植民者の青年の陳有義のことを描き出した「父の要求」の内容を、「子＝「個」」、「家」を土台とする天皇制・家父長制国家が崩壊へ傾く過程」、「植民地支配に乗り出した時代が破綻に向う」象徴として捉えている¹²。しかし、その論説は、『こゝろ』における「明治の精神」と殉死の意義に対する説明が不十分なまま、象徴義で家族国家観を反対する作品として直結してしまった。また、「父の要求」における陳有義の帰郷後に郷里に向けた視線の意味と父との関係という作品の核心なところも討論していない。家父長制国家の問題から両作家の作品の接点を論じるには、作家の全体の思想の本質をつかまえてから論じたほうがいいではないかと考えられる。

¹¹李の論述では勝又浩「明治文学と父の消去、父の復権」(『国語と国文学』1988. 08)『夏目漱石反転するテキスト』有精堂, 1990. 04, P108)を参照している。勝又浩は、四迷の『浮雲』、鷗外の『舞姫』、漱石『三四郎』における父権崩壊と立身出世主義から新父権再建の失敗を見、漱石の『それから』、志賀直哉『児を盗む』、『暗夜行路』に至る父子対立と新父権の建立を日本近代文学の鉅脈として提示している。

¹²李郁蕙「「未亡人」の家—日本語文学と漱石の『こゝろ』」『日本研究』31集, 2005. 10, P143-158

曾秋桂「試圖與日本近代文學接軌，反思國族論述下的張文環文學活動」は、張文環の創作と日本近代文学、特に漱石との場面描写の相似性を中心に考察し、それと日本文学への摂取を張文環の反殖民意識に繋げるように捉えている¹³が、具体的な内容を明示していない。一方、長塚節の『土』に対する漱石の推奨と張文環の愛読について、「英雄所見略同」（賢人は皆同じように考えるものだ）とした提起は、漱石と張文環の共通な文芸的関心を指摘している。ただ、『土』への関心が両作家の文芸思想の本質をどのように反映しているか、詳論が必要だと考えられる。

蕭幸君「〈知〉の覇権へのまなざし—漱石『虞美人草』と張文環『芸姐の家』を中心に—」では、「漱石、張文環が〈知〉の覇権へ向けた目差しは、近代の浪にさらされた知識人の自覚であり、自己への批判である」、「女性・恋愛・結婚の背後には日本における西洋、そして台湾における日本という〈他者〉が身を潜めて」¹⁴いるというように、『虞美人草』と『芸姐の家』の接点を捉えている。封建道徳に圧迫される女性の自由恋愛意志を西洋の「知」の覇権としたその捉え方自体に問題がある。その上で、漱石の『虞美人草』は「文明批判小説」¹⁵である一方、「父系によって母系を断罪した小説」¹⁶、道義意識によって女性の主体意識を抹殺した作品¹⁷でもあるが、『虞美人草』を社会主義運動に伴うフェミニズムの世界動向と植民地内の女性地位改造運動を時代背景として台湾の養女制度を批判していた¹⁸張文環の「芸姐の家」と比較するには、理由の説明が必要だと考えられる。比較の作品対象の選択だけでなく、漱石と張文環における近

¹³曾秋桂「試圖與日本近代文學接軌，反思國族論述下的張文環文學活動」『台灣文學學報』第十二期，2008. 06, P5-26

¹⁴蕭幸君「〈知〉の覇権へのまなざし—漱石『虞美人草』と張文環『芸姐の家』を中心に—」『越境する漱石文学』思文閣，2011. 03, P57-116

¹⁵平岡敏夫「『虞美人草』論」（『漱石序説』1976）『漱石作品論集成第三卷 虞美人草・野分』桜楓社，1991. 07, P98-106

¹⁶大久保典夫「『虞美人草』論ノオト」（『作品論夏目漱石』1976）『漱石作品論集成第三卷 虞美人草・野分』桜楓社，1991. 07, P98-106

¹⁷磯田光一「『虞美人草』の文脈」（『ユリイカ』9巻12号1977）『漱石作品論集成第三卷 虞美人草・野分』桜楓社，1991. 07, P107-109）は、「藤尾の自殺には、濃厚な「近代」の影がある」、「道義」は現実に立脚しつつ、なお個人の恣意性を抑制することによって成立する社会の掟の原型である」と指摘した。

¹⁸張文薫『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』（2005, P86-98）では、「芸姐の家」を論じるに当たって、養女制度に対する張文環の批判を、「老娼撲滅論」、「救はれぬ人々」などの評論に関連付けて論証している。

代化批判の比較も、日本対西洋よりももっと広い視点で行ったほうが良いと考えられる。

以上、比較研究を検討してきたところ、国民国家統合とそれに伴った近代化の視点で漱石と張文環を比較する研究が、まだなされていないと観察できる。では、個別研究においてはどうか、次項で検討していきたいと考えられる。

(二)、漱石研究と近代化社会に対する漱石の批判

生卒年がほぼ明治時代と重なった夏目漱石（1867～1916）は、明治維新の改革で没落した江戸の旧名主の家に生まれ、近代新式学校¹⁹で教育を受け、英文科を志望して公費留学で渡英し、文学者になる道を歩み、明治社会の近代化問題を批判することで、「文明批評家」として評価されてきた。

近代化社会に対する漱石の批判は、金銭至上と実利主義観を諷刺する『吾輩は猫である』（明治 38. 1～8「ホトトギス」）、「黄白万能主義を信奉するの弊」²⁰を打倒しようとする白井道也を造形した『野分』（明治 40. 1『ホトトギス』）、実利主義の叔父を造形した『こゝろ』（大正 3. 4. 20～8. 11 同）によって、まず金銭批判と実利主義批判の一面として認識されてきた。その上で、平岡敏夫「『虞美人草』論」が、『虞美人草』（明治 40. 6～10「朝日新聞」）を物質と徳義との対置を表現した「文明批評小説」²¹と指摘し、大久保典夫「『虞美人草』論ノオト」が、さらに「利害（「文明」）が「道義」（過去）に敗れる物語なので、そこに漱

¹⁹漱石は、東京新設立の戸田小学校に入学（明治 7 年）、市が谷学校の下等小学校に転校（明治 9 年）した。東京府第一中学校正則科に入学した（明治 12 年）が、英語がないために退学し、漢学塾二松学舎に入学（明治 14 年）、のち退学（明治 15 年）して成立学舎に入学（明治 16 年）した。英語を学びながら大学予備門予科（明治 19 年に第一高等中学校と改められた）に入学、それから高校は、第一高等中学校本科第一部に進学（明治 21 年）し、英文科を専攻していた時、同級生の米山保三郎に文学の道を薦められ、英文科を志望し、文学者になる道を歩みだした。それで、大学は帝国大学英文学科に入学（明治 23 年）した。（石井和夫「漱石伝記事典」（三好行雄編『夏目漱石事典』（二版）学燈社、1992、P10-32）を参照。）

²⁰夏目漱石『野分』新潮文庫、2007、P93

²¹平岡敏夫「『虞美人草』論」（『漱石序説』1976）『漱石作品論集成第三巻 虞美人草・野分』桜楓社、1991. 07、P98-106

石の「文明」批判がある」²²と『虞美人草』の実利主義批判の意図を明示したことで、漱石の実利主義批判と近代化批判の繋がりが認識されてきた。

中村光夫「文明開化の性格」では、漱石の「現代日本の開化」（明治44年和歌山での講演）に提起されている「外発的」開化の不安の根本を、「近代社会の成立による人間の欲望の拡充、それに伴ふ功利主義、といふよりむしろ功利的な人生観の普遍化、道徳の人間主義化または弛緩」²³と分析し、西洋化と功利主義と対置する漱石の近代化批判を提起した。それと関連して、熊坂敦子「反近代・日本の漱石」は、『草枕』（明治39.9～40.1「新小説」）における俳句と写生文の要素と、自然没入、漢詩趣味や古典趣味を指摘し、『草枕』を「理想郷」を追求する作品として捉えた上で、イギリス留学で西欧に対して挫折感を抱き、「利己や自閉に陥って「外発的」であった脆弱さ」に気付いて、「非功利的な、脱俗世界への郷愁」²⁴を発展したと、漱石の文芸意識を捉えた。平川祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘—』も、『草枕』を「反文明」、「反西洋としての東洋」を表現する俳句的小説²⁵として捉え、その他の作品も西洋との対置の流れにおいて論じた。また、越智治雄「漱石と文明」は、『夢十夜』（明治41.7～8 東京・大阪「朝日新聞」）の第七夜における乗船の不安を、西洋に向う不安、「皮相上滑りの開化」の裏に「生存競争から生ずる不安や努力」²⁶と捉えた。それらの先行研究を通して、漱石の近代化批判は西洋との対置が深く印象付けられてきたと観察できる。

一方、吉田孝次郎「漱石三部作の世界」は、『三四郎』（明治41.9～12「朝日新聞」）に描かれている九段の燈明台と偕行社の共存現象を、「新旧文化の無秩序状態」²⁷だと指摘し、越智治雄の前掲論文も、『三四郎』と『それから』（明治42.6.27～10.14「朝日新聞」）に描かれている都市化現象に関して、物質文明の

²²大久保典夫『『虞美人草』論ノオト』（『作品論夏目漱石』1976）『漱石作品論集成第三巻 虞美人草・野分』桜楓社，1991. 07, P98-106

²³中村光夫「文明開化の性格」（『文学界』1944）『日本文学研究資料叢書Ⅰ 夏目漱石』有精堂，1990, P60

²⁴熊坂敦子「反近代・日本の漱石」『解釈と鑑賞』40（2）1975. 02, P25-32

²⁵平川祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘—』（第2刷）講談社，1993, P342

²⁶越智治雄「漱石と文明（一）」『解釈と教材の研究』17（13）1972. 10, P182-188、「漱石と文明（二）」『解釈と教材の研究』17（14），1972. 11, P172-178

²⁷吉田孝次郎「漱石三部作の世界」（『文学』1945）『漱石作品論集成第五巻 三四郎』桜楓社，1995, P17

発展の圧迫感と新旧交錯の矛盾²⁸を提起することによって、物質文明を中心に発展する明治の近代化に対する漱石の批判のまなざしを示した。その上で、高橋和己「知識人の苦悩」は、近代人における実利追求の偽善性及び、作中に提起された大逆事件、大倉組と日糖事件に見られる「日本資本主義の矛盾の激化」²⁹を指摘し、代助の造形を「国家的規模においては一応成功した近代を内部批判」するインテリと捉えた。桑田和夫「『道草』論」は、『道草』（大正 4. 6. 3～9. 14 同）に描かれている人生問題について、「健三の周囲の人々、半封建的な土壌から抜けきれず、近代資本主義の苛酷な金利、功利主義にからめとられていく姿をも照射しているのである」³⁰と論じ、資本主義のもたらした実利主義の問題を提起した。明治社会における資本主義の発展という視点で漱石の作品を解説する稀な作品論である。

飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』は、さらに『明暗』（大正 5. 5. 26～12. 14 同）における植民地落ちの小林の造形を、「見栄と意地のかつとうが前面に浮きでているこの『明暗』を、下から照らすもの」³¹と捉え、漱石の反ブルジョワジー意識を指摘した。資本主義への批判、反ブルジョアジー意識との関連として、漱石は大正 3 年 11 月 25 日に学習院で行った講演の「私の個人主義」で、ブルジョア階級の学生たちに金力の濫用を戒めた。その一方で、漱石は国家主義を個人主義の下位に位置した。仙北谷晃一の指摘によると、漱石の「個人主義」の精神は、近代個人主義の利己性と区別し、他人に盲従しない「自己本位」の精神、摯実の心、党派を作らない孤独、国家主義と相容れない私的個人性、イズムに囚われぬ自由精神という五つの特質³²をもっている。加藤二郎は、＜自然＞と＜法＞の視点から漱石と国家の関係を見、「私の個人主義」とそれに関連する『こゝろ』などの作品の意義を論じるにあたって、「欧州戦争 宗教、社会主

²⁸越智治雄「漱石と文明（一）」『解釈と教材の研究』17(13)1972. 10, P182-188、「漱石と文明（二）」『解釈と教材の研究』17(14), 1972. 11, P172-178

²⁹高橋和己「知識人の苦悩」（『高橋和己全集』13巻 1978. 05 河出書房）『漱石作品論集成第六巻 それから』1995. 04, P49-62

³⁰桑田和夫「『道草』論」（『作品』2号 1974. 05）『漱石作品論集成第十一巻 道草』桜楓社, 1991. 06, P182

³¹飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』1970, P188

³²仙北谷晃一「漱石の個人主義」三好行雄編『講座夏目漱石 第5巻（漱石の知的空間）』有斐閣, 2004. 09, P268-295

義、経済、人道、皆国家主義に勝つ能はず」という漱石の大正四年十二月の断片を引用して、近代の戦争が「主権者としての「国家」の「力」に基づいた「個人」の「自由」の滅却への忌避という形で展開された」³³と、「国家」の概念と対置する漱石の「個人主義」を捉えた。

資本主義への批判と反ブルジョアジーの意識で、国家と対置する漱石の「個人主義」が形成したのか、あるいは国家に対する漱石自身の批判が内在しているのか。それに関して、特に気になるところは、父権体制と道德問題に関する漱石の探究である。飛鳥井雅道の前掲著書は、代助の造形と彼の直面した近代化社会の問題を明治三十年代の社会小説の動向に置き、ブルジョワジー父権社会における父子対立³⁴の問題を提示している。瀬沼茂樹『『彼岸過迄』』は、旧習に拘る母に不信感を抱く須永の悲劇を描いた『彼岸過迄』（明治 45. 1. 1～4. 29）について、「明治末年の資本主義の生活機構や封建的家族制」³⁵という須永をとりまく時代状況を提起した。また、片岡良一『『行人』と『こゝろ』の実験』は、明治の慣習的結婚の中で妻の愛を求める家父長の一郎の悲劇を描いた『行人』（大正 1. 12. 6～2. 11. 17 同）について、旧家族制度と旧い道德という形式に対する作中人物の懷疑によって「明治の家の暗さ」³⁶を指摘し、そして片岡の説を受け継いだ瀬沼茂樹、駒尺喜美も『行人』に関して明治の形式的慣習的結婚の悲劇³⁷を提起した。文明と道義が対置するように捉えてきた『虞美人草』の先行研究と、遠藤祐「漱石の反自然主義をめぐって—『虞美人草』の周辺—」が、『虞美人草』を「初期漱石文学を集大成する作」、「漱石は生命論的人間観が道義の媒介なしに反自然主義と結びつくことを、なお悟らずに構想を立てたのである」³⁸と指摘した影響で、漱石は道義的作家として捉えられてきた傾向が強い。

³³加藤二郎「<自然>と<法>—漱石と国家—」『夏目漱石反転するテキスト』有精堂 1990, P250

³⁴飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』晶文社, 1970, P46

³⁵瀬沼茂樹『『彼岸過迄』』『夏目漱石』東京大学出版会, 1987, P224-225

³⁶片岡良一「『行人』と『こゝろ』の実験」（『片岡良一著作集』9, 1980. 02）『漱石作品論集成第九巻 行人』櫻楓社, 1991, P29-31

³⁷瀬沼茂樹『『行人』』（『夏目漱石』1962. 03）『漱石作品論集成第九巻 行人』櫻楓社, 1991, P35、駒尺喜美「『行人』論—到着点と出発点と—」（『漱石 その自己本位と連帯と』1970. 05）『漱石作品論集成第九巻 行人』櫻楓社, 1991, P97

³⁸遠藤祐「漱石の反自然主義をめぐって—『虞美人草』の周辺—」（『日本近代文学』3集 1965. 11）『漱石作品論集成第三巻 虞美人草・野分』櫻楓社, 1991. 07, P19-34

しかし、山田晃「夏目漱石における倫理観補論」が、「道義を外在的な尺度を以てはかる立場を捨て、内在的な原理に即した検討へと轉身した」³⁹、「長い封建的治世の中で固定化し、形骸化した倫理的徳目については完全に醒めた認識を持っていた」⁴⁰と、『虞美人草』の甲野の道義意識から『それから』の代助における天意の選択に転換した漱石の倫理観を指摘したように、漱石の見詰めていた道德問題は、決して『虞美人草』の道義意識で包括すべきものではないということが分かる。漱石の近代化批判の思想の中には、文明と道德の関係への探究として、どのくらい明治国家の家父長体制を含んでいるかが興味深い。

以上、先行研究の指摘を総合してみると、漱石の近代化批判は日本と西洋の対置や文明と道德の対置という簡単な図式で捉えられるものではないということが分かる。明治社会における資本主義の発展とそれに伴った実利主義、物質文明に対する漱石の観察や批判が、どのように父権体制に触れて文明と道德の関係を探求する側面、さらに「国家」の概念と対置する独自の「個人主義」に辿り着いた思想上の展開に繋がっていくかが、探求すべき課題だと考えられる。


(三)、張文環研究と近代化社会に対する張文環の批判

張文環（1909～1978）は、嘉義梅山の山の奥の旧地主家庭に生まれ、東京留学の前に近代公学校教育⁴¹を受けていた。張文薫の考察によると、張文環は島内に比べて言論の取り締まりのやや自由だった東京に留学し、1932年3月に結成し「コップ」(KOPF 日本プロレタリア文化連盟)の子組織として帝政批判の急進的傾向を持つ「東京台湾文化サークル」に参加した。「コップ」が厳しく弾圧さ

³⁹山田晃「夏目漱石における倫理観私見」『駒澤大學文學部研究紀要』24号、駒澤大學文學部、1966-03、P87

⁴⁰山田晃「夏目漱石における倫理観補論」『駒澤大學文學部研究紀要』25号、駒澤大學文學部、1967-03、P106

⁴¹張文環の最初の教育は伝統の漢文書塾で四書を読んでいた（1917～1920）。のち町の梅仔坑公学校に入学し（1921～1926）、日本語を通して新式の教育を受けた。そして卒業後、台湾島内の政治統制に比べてより自由だった東京へ赴き岡山中学校に入学（1927）していた頃、文学に興味形成した。のち、東洋大学文科に入学（1931）し、1936年に共産党の浅野次郎との交友で連帯罪をきせられて三ヶ月間の入獄を経験するまで、反帝の社会活動と文学活動を行っていた。（柳書琴編の作家年表（陳萬益編『張文環全集第八卷』中縣文化、2002、P123-128）を参照。）



れたのち、1932年9月に反帝デモに参加したメンバーの逮捕でサークルも検挙された。「 Copp」の消滅と治安維持法の弾圧のもとで、サークルは1933年6月に左翼運動の最高指導者の佐野学と鍋山貞親による共産党脱退、天皇制肯定の転向声明から打撃を受け、1934年2月22日に解体した⁴²。その中で、1933年より張文環は一部の同人たちとプロレタリア運動の合法派路線を取り、帝政批判の色彩を消去させた同人誌『フォルモサ』を創刊した。しかしそれは僅か二年続いて停刊した。のち、1936年転向風潮の最盛期を経て、1937年の年満州事変、二次大戦の勃発と日本主義の台頭の中で、張文環は1938年に台湾に戻り、文学創作を継続した。1941年6月に皇民奉公会台北支部に参加⁴³した一方、エキゾチシズムを主張し対米戦争後「文章報国」を掲げた西川満の『文芸台湾』に対抗するために、『文芸台湾』を脱退して啓文社を組織し、台湾文芸連盟の同人たちを網羅し、リアリズムの手法で台湾人の現実生活への描写を理念とした文芸誌『台湾文学』を創刊した。しかし、「大東亜戦争」を迎える文芸統制のもとで、『台湾文学』は廃刊を余儀なくされ、張文環を含める同人たちは文芸による戦争協力に動員されるようになった。

張文環は大戦期において「風俗作家」⁴⁴と呼ばれていたが、葉石濤が「論張文環的《在地上爬的人》」において張文環を「植民地作家」⁴⁵と論じてから、張文環研究は、張文環のプロレタリア運動への参与と、反植民意識と階級意識の問題が重視されてきた。ただ、反植民意識と階級意識に関連して、日本帝国のもたらした近代化と植民地の人間の関係に関する指摘も少なくない。游勝冠『殖民主義與文化抗爭・日據時期臺灣解殖文學』は、張文環の処女作「落蕾」（1933.7.15『フォルモサ』創刊号）について、義山の植民階級への悩みと家庭

⁴²張文薫『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』東京大学大学院人文社会系研究科，2005，P11-15

⁴³柳書琴編張文環年表、陳萬益編『張文環全集第八卷』中縣文化，2002

⁴⁴張文薫『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』（東京大学大学院人文社会系研究科，2005，P2）によると、張文環を最初に「風俗作家」と称したのは、龍瑛宗の「南方の作家たち」（『文芸台湾』3-6）であり、のち藤野雄士『夜猿』その他・雑談（『台湾文学』2-2）、中村哲・竹村猛・松居桃楼「文学鼎談」（『台湾文学』2-3）、黃得時「輓近の台湾文学運動史」（『台湾文学』2-4）、竹村猛「作家とその素質」（『台湾文学』2-4）も、「風俗作家」で大戦期における張文環を評価していた。

⁴⁵葉石濤「論張文環的《在地上爬的人》」（『民衆日報』1978）柳書琴、張文薫編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館，2011，P129-137

に支配される秀英の結婚問題を、植民地における資本主義と社会階級の問題⁴⁶と指摘した。張文薰『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フオルモサ』世代の台湾文学—』は、「青年知識人の抱く立身出世、近代文明に対する憧憬と挫折」という視点で、「父の要求」（1935. 9. 24『台湾文藝』2巻10号）に描かれている植民者側の女性に対する被植民者の知識人の恋を、「近代文明への追求」、「現代化への憧憬」⁴⁷と捉えた。陳萬益「一個殖民地少年的啟蒙之旅—析論張文環小説〈重荷〉」は、近代学校に対する子どもの憧れと幻滅を描いた「過重」（1935. 12. 28『台湾新文學』創刊号）の表現意図を、立身出世への憧憬に相対する「無父的被殖民者の生存現實」⁴⁸（父をなくした被殖民者の生存の現実）への凝視と指摘した。陳建忠「一個殖民地作家的自畫像 論張文環小説中的成長主題」は、さらに「過重」における植民地教育の立身出世主義、コロニアルモダニティ⁴⁹の存在を指摘した。柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』は、『山茶花』（1940. 1. 23～5. 24「台湾新民報」）の世界への把握として、生活に精一杯な農民、立身出世を目指して帝国へ向う知識人の青年、婚姻と恋愛で「男性／都會／權利」の中心に寄せていく女性によって構成された狭隘な出世観の社会⁵⁰と提示した。施淑「簡析〈辣薤罐〉」は、『山茶花』と同時期に発表された「辣薤の壺」（1940. 4. 1『台湾藝術』2号）から、皇民化の施策を強いられた殖民社会の中で己なりの民俗文化に生きる下層民衆、その狭隘な世界観に見られる実利主義⁵¹を見出した。そのように、先行研究は張文環の描いている植民地の人間が日本帝国のもたらした近代化に従属する位置にあると示していることが分かる。

それによって、張文薰は前掲博士論文で、『山茶花』の「昔のまま」の故郷の

⁴⁶游勝冠『殖民主義與文化抗爭・日據時期臺灣解殖文學』群學，2012. 04，P474-477、501-505

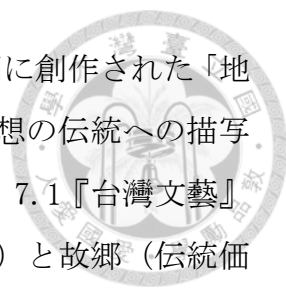
⁴⁷張文薰『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フオルモサ』世代の台湾文学—』東京大学大学院人文社会系研究科，2005，P42-48

⁴⁸陳萬益「一個殖民地少年的啟蒙之旅—析論張文環小説〈重荷〉」（『中央日報』19版1996）柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編06 張文環』國立臺灣文學館2011，P175-178

⁴⁹陳建忠「一個殖民地作家的自畫像 論張文環小説中的成長主題」（『日據時期臺灣作家論：現代性・本土性・殖民性』2004. 08）柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編06 張文環』國立臺灣文學館2011，P185

⁵⁰柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』聯經，2009，P361-385

⁵¹施淑「簡析〈辣薤罐〉」（『中國現代短篇小說選析』第2巻，1984）柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編06 張文環』國立臺灣文學館，2011，P115-116



イメージを張文環の伝統回帰の傾向とし、それを太平洋戦争期に創作された「地方生活」(1941. 10. 19『台湾文学』二巻四号)における儒家思想の伝統への描写と結びつけた上で、大戦末期に創作された「土の匂ひ」(1944. 7. 1『台湾文藝』一卷三号)を「「故郷」を作り始める物語」、「都市(近代文明)と故郷(伝統価値)との間に彷徨っていた過去への整理」⁵²と見なした。さらに、「派遣作家としての張文環—「雲の中」に語られたもの」という一文で、戦前期の最後の小説「雲の中」(1944. 11. 1『台湾文藝』一卷五号)の意図を「桃源郷に辿り着こうと再出発を図る」⁵³と捉えた。張文薫は「文明」と「伝統」の対立に着眼し、日本帝国のもたらした近代化に対する張文環の対置によってその反植民意識を見出そうとした。王萬睿も「土の匂ひ」、「雲の中」を戦争協力作品として提起したが、張文環の創作意図をやはり郷土への回帰に帰した⁵⁴。

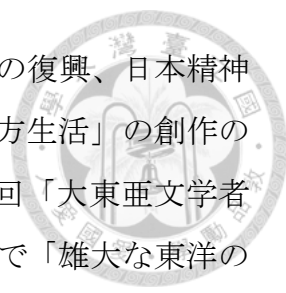
しかし、資料をよく調べると、太平洋戦争の始まった1941年10月より、張文環の参加した皇民奉公会台北支部は、「皇民奉公會臺北州支部娛樂指導班」の方針、「臺北州下に青年演劇挺身隊の根本理念に就て」を掲げ、「今日建設せらるべき新日本文化は、新體制の下に立つ新しき文化であり、然もそれは當然日本的文化でなくてはならぬのである。この事は、云ふまでもなく在来の資本主義文化の否定である事は論を俟たぬ處である」⁵⁵と、国の団結を図り欧米勢力と対抗するために、在来の近代化の方針を見直し、資本主義批判を行い、道德觀念と親權思想を神國思想に緊密に結びつかせようとした傾向が見られる。その中で、張文環は評論の「台湾文学の自己批判」(1941. 8. 1『新文化』8月号)において、「資本主義が背負ってきた個人主義的な社会道德の発展からきた弊害」、「一図に欧州文化を取り入れて自己の持つべき美しい精神的なものを見失い、東洋精神と日常生活のバランスを失なってしまった」、「深刻な自己批判によつ

⁵²張文薫『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フオルモサ』世代の台湾文学—』東京大学大学院人文社会系研究科, 2005, P63-72

⁵³張文薫「派遣作家としての張文環—「雲の中」に語られたもの」藤井省三、黃英哲、垂水千恵編『台湾の「大東亞戦争」：文学・メディア・文化』東京大学出版会, 2002, P99-106

⁵⁴王萬睿「跨不過語言的一代」(『殖民差異與認同：張文環與鍾理和郷土主體的繼承』2005)柳書琴、張文薫編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011, P329

⁵⁵皇民奉公会台北支部「臺北州下に青年演劇挺身隊の根本理念に就て」(『台湾文学』2巻3号 1942)中島利郎、河原功、下村作次郎編『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第四卷』緑蔭書房, 2001, P183



てはじめて、この島に新しい文化が生まれる」⁵⁶と、東洋文学の復興、日本精神運動の唱導に協力する姿勢を見せていた。1942年10月、「地方生活」の創作の前にも、西川満、龍瑛宗、濱田隼雄に伴い日本に赴き、第一回「大東亜文学者大会」に参加⁵⁷した上で、大会後「内地より帰りて」一文の中で「雄大な東洋の道徳は、今度の大東亜戦争で、西洋人にも一つ大きな半生を促してゐる筈である」⁵⁸と、「日本精神」の推奨に協力的姿勢を示した。そしてその協力的姿勢は、大戦中に発表された大部分の作品の内容に影響を及ぼした。藤野雄士「夜猿」その他・雑談は、「夜猿」(1942. 2. 1 同2巻1号)の内容を「南部山手の純朴な農民が、一度ひつかゝた街に巢喰ふ高利貸的商業資本の網の目から逃れようために、生活の上でのたうち廻るものがなし話」⁵⁹と指摘したが、「夜猿」は資本主義と対置する家庭の暖かさへの描写が見られ、家族国家観を強調する可能性が大きい。そして、被植民者が戦場に赴くことしか出世できない階級差別の悲哀を伝えている短編小説「頓悟」(1942. 3. 30『台湾文学』2巻2号)は、「しきりに資本主義等々と説明してゐるが、しかし私はきいて何がなんだかわからなかった」、「私は兵隊を志願することになったが、しかし私の両親は他人の親と違って理解のある両親である。…だから精神生活を飛躍したい私の気持ちを理解してくれるに違ひない」⁶⁰という表現が見られ、資本主義批判と家族国家観への強調という戦争協力の側面が明らかに観察できる。『台湾文学』に載せた「地方生活」(1942. 10. 19『台湾文学』2巻4号)でも、「自分一個人の仕合せを願ふために、義理人情をも押しなければならぬ遺産の紛争を、澤はいくつか見た。これがもし現代の道徳であるならば、次に来るべき社会道徳はどんなものであるか、澤は想像されるのだった」⁶¹という家族愛と道徳観念を強調する

⁵⁶張文環「台湾文学の自己批判」(『新文化』8月号1941. 8. 1) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

⁵⁷張文環『張文環全集』第8巻 陳萬益編 中縣文化, 2002、柳書琴編張文環年表を参照。

⁵⁸「内地より帰りて」(『台湾文学』3巻1号1943. 1. 31) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

⁵⁹藤野雄士「夜猿」その他・雑談(『台湾文学』2巻3号1942) 中島利郎, 河原功, 下村作次郎編『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第四巻』緑蔭書房, 2001, P115-182

⁶⁰張文環「頓悟」(『台湾文学』2巻2号1942. 3. 30) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

⁶¹張文環「地方生活」(『台湾文学』2巻4号1942. 10. 19) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011) について、澤が親の言いなりに結婚しようとして、

描写が見られる。「地方生活」の後に張文環の創作はしばらく途絶えたが、大戦の最中に書かれた「迷児」(1943. 7. 31『台湾文学』3巻3号)、「媳婦」(1943. 11. 17『台湾文学集』)も実利批判と家族愛の強調⁶²をテーマとし、「父に送られて」(1943. 12. 2「興南新聞」))はさらに志願兵を推奨している。また、「ペンを銃にかえる」と掲げた台湾文学奉公会発行の戦争協力誌の『台灣文藝』⁶³に発表した「土の匂ひ」(1944. 7. 1『台灣文藝』1巻3号)も志願兵の推奨を提起した。「雲の中」(1944. 11. 1『台灣文藝』1巻5号)はさらに、「雲の中とはいへ、汽車の汽笛が鳴つてゐた。集材機のひゞきはがらがらと木霊としてきながら、雲の中の都市のやうな感じであつた。」「雲の中に上がってきても、尚俗気の取れないのが悲しいである」⁶⁴というように、経済略奪と文明の侵入を象徴した太平山の増産前線を描いている。郷土回帰と思われるそれらの作品は、実際に家族道徳の強調による実利批判という戦争協力の特徴が顕著であると伺える。郷土に向ける張文環の視線を、日本帝国のもたらした文明への対置として、儒家思想の伝統や郷土への回帰とした捉え方は、張文環の戦争協力の側面と社会体制の関係を無視して形成した盲点だと考えられる。

その一方、「落蕾」を含める張文環の非戦争協力の作品では、確かに家族愛を強調する戦争協力の作品と異なって、父権体制への批判と家族の間隔への描写が見られる。柳書琴の前掲著書は、「父の要求」について、陳有義の社会主義運動に干渉する「父」と下宿先の親子の勧誘から、陳有義に対する伝統親権と帝

婚約対象の婉仔の伝統的女性気質を賛美する一方、父の死に際して婉仔の兄の阿山とともに、遺産を企むハイカラな妹の淑をさんざん叱ったという描写は、宗近の封建道義による勧善懲悪、実利批判で甲野の妹の藤尾に対する行った制裁を描いた漱石の「失敗作」である『虞美人草』に彷彿する。

⁶²張文環「迷児」(『台湾文学』3巻3号1943. 7. 31) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011)では、「大東亜戦争が始まると、女は特志看護士、男は志願兵、と云ふふうに、國家と國民の生活は密接になつたので、大目仔はしかしたのもしく思った。」という描写に加えて、最後に消えた子どもを乞食収容所で見つけた一家団欒の喜劇の場面が描かれている。「媳婦」(『台湾文学集』大木書店1943. 11. 17、陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011)では「親を思はない子には未練がない」という描写がある。

⁶³『台湾文学』と『文芸台湾』の廃刊ののち、戦争協力としての文芸雑誌として発刊された。(尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』勁草書房, 1971, P178)

⁶⁴張文環「雲の中」(『台灣文藝』1巻5号1944. 11. 1) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

国親権思想の抑圧⁶⁵を見出した。張文薰自身も前掲博士論文で、『台湾文学』で発表した「藝姐の家」(1941. 5. 27『台湾文学』創刊号)について、資本主義と父権制度の問題に根付く媳婦仔と藝姐制度に対する張文環の批判⁶⁶を詳しく論じた。また、皇民劇と対置する厚生演劇会の創成を背景とした「閩雞」(1942. 7. 11同2巻3号)について、吳麗櫻、鍾惠芬の修士論文は、「資本家—植民者—父権」⁶⁷という社会体制の支配構造を見出した。游勝冠の前掲著書も、「閩雞」という題名の意味を植民地で権力を奪われた男性の去勢の象徴とし、父権社会に支配される女性の立場を植民者に支配される台湾人の立場⁶⁸と捉えた。つまり、張文環の反植民意識や近代化社会へ批判を指摘するには、「文明」と「伝統」の対立の視点よりも、日本帝国のもたらした資本主義の発展と結びつく父権体制への批判から切り込んでいったほうがいいのではないかと考えられる。

以上、先行研究と資料を通して考察してみると、戦争協力の作品と非戦争協力の作品に分けられる張文環の作品は、近代化に対する捉え方がまったく異なっていることが分る。戦争協力の作品に反映されている国民国家統合の傾向に相対して、非戦争協力の作品は、資本主義、都市化と物質文明の問題が中心とされ、植民地人間の階級問題、物質文明への憧憬、そして父権体制に関する討論が多い。ただ、非戦争協力の作品に関する先行研究は、日本帝国のもたらした文明に対する植民地の人間の従属への張文環の描写に重点を置きすぎている。非戦争協力の作品から国民国家統合とそれに伴った近代化に対する張文環の批判を見出せるかが興味深い。

⁶⁵柳書琴『荊棘之道:臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』聯經, 2009, P339

⁶⁶張文薰『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』東京大学大学院人文社会系研究科, 2005, P86-99

⁶⁷吳麗櫻「張文環小説中女性題材之研究」中興大學中國文學系碩士在職專班, 2004、鍾惠芬「張文環的文學活動及其小説主題意涵研究」屏東教育大學中國語文學系, 2007

⁶⁸游勝冠『殖民主義與文化抗爭・日據時期臺灣解殖文學』群學, 2012. 04, P526-527 原文は: 「這是張文環作為殖民地被去權的男性, 因為父權社會的女性處境相同衍生的共同感情」、「支配月里命運的傳統社會體制, 就像剝奪臺灣人男性特質的殖民體制, 在「父權體制」上也是同質。」

三、 問題意識、研究方法、目的、範囲



(一)、問題意識


漱石と張文環は、それぞれ近代化社会に対する批判が指摘されてきた。しかし、明治社会における資本主義の発展とそれに伴った実利主義、物質文明に対する漱石の観察や批判が、どのように父権体制に触れて文明と道德の関係を探求する側面、さらに「国家」の概念と対置する独自の「個人主義」に辿り着いた思想上の展開に繋がっていくか。また、戦争協力の作品に示されている国民国家統合に対する協力的姿勢に相對して、張文環の非戦争協力の作品から国民国家統合とそれに伴った近代化に対する抵抗が見られるかが、課題として残されている。

曾秋桂論文で提起された長塚節の『土』に対する漱石と張文環の関心は、両作家の繋がりを示している。「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会」において、張文環は実際に「本当に好きなのは長塚節の『土』です。日本の作品で本当に二回も三回も読み返したのは『土』だけです。その他永井荷風、島崎藤村、丹羽文雄、島木健作、大谷藤子、国木田独歩などです。」⁶⁹と述べている。長塚節の『土』だけでなく、島崎藤村の作品に対して漱石もかなり興味を示している。長塚節の『土』と島崎藤村の文学に対する漱石と張文環の共通な文芸的関心は、どのように国民国家統合とそれに伴った近代化に置かれた両作家の近代化批判と文芸思想に関連し、両作家の接点を示しているかが興味深い。

(二)、研究方法と目的

フランス初期ロマン派作家で政治思想を重視し、文芸評論を行っていたアンヌ・ルイーズ・ジェルメーヌ・ド・スタール (Anne Louise Germaine de Staël、1766-1817) は、社会背景がどのように文学に影響を与え、文学がどのように社

⁶⁹台湾文芸連盟 「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会 (1941. 11. 01、『台灣藝術』第3卷第1号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011



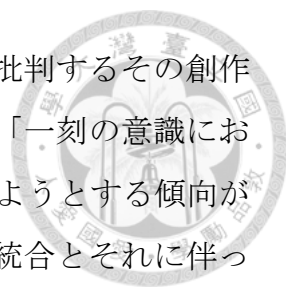
会に影響を与えたかに着目し、文学者の自由と反専制的使命を強調する『De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales』(1800) (『社会制度との関係からみた文学』) を発表して、文学社会学の幕を切り開いた。「時代思潮 (Zeitgeist)」と、「民族精神 (Volksgeist)」という概念が、スタール夫人とドイツ人の交友で1800年前後に形成したもの⁷⁰である。その精神に基づいた文学社会学は、二次大戦後、「西欧的マルクス主義者」、ルカーチ (G. Lukacs, 1885 - 1971) の文学社会論によって展開し、弟子のリュシアン・ゴールドマン (Lucien Goldmann, 1913 - 1970) による体系の整理によって方法論として定着された。ゴールドマンの構造主義に依拠して形成したその理論体系は、「作品世界の構造が特定の社会群体の心理的要素に繋がる」という重要な概念を提示しているが、作者の観点を参照しないまま、マルクス主義に基づく彼自身の純粋な先見的思想を展開したために、その方法論が批判されてきた。ゴールドマンの方法論への修正として、経験的文学社会学が形成し、Escarpit, R. は「作者」と「作品」の結びつきを重視した。Escarpit の理論は作者の内的人格を把握して、歴史的あるいは批評的な観点から、読者が作者の表現した内容をより深く享受できると考えた上で、文化政治経済の背景に関して「社会」という要素を取り入れた。Fügen, H. N. はさらに、「社会学的文学」と「文学社会学」を区別した。「社会学的文学」は文学作品に現われた個々の事柄を認識し、それら個々の事柄が、社会的な個々の事実によって因果的に規定される一方、「文学社会学」は典型的なものの抽出が問題となり、事象の典型的な経過、行動様式、その機能の説明に重点が置かれている⁷¹。

漱石は、心理学と社会学の理論を応用した『文学論』の中で、文学社会学の発端となったスタール夫人の交友圏で形成した「時代思潮 (Zeitgeist)」という言葉「通語」として「社会進化の一時期におけるF」で指し示し、それが個人の「一刻の意識におけるF」の集合によって形成されていると説明している⁷²。漱石の『文学論』は形式論に発展したために、文学作品に見られる「時代思潮

⁷⁰Robert Escarpit 『文學社會學』葉淑燕訳、遠流出版、1990、P6 - 7

⁷¹濱崎一敏「経験的文学社会学の基本原理と問題点」『長崎大学教養部紀要(人文科学篇)』第21巻 第2号、1981.01、135-151

⁷²夏目漱石『文学論 (上)』岩波書店、2011、P37-39



(Zeitgeist)」の現象を論じていない。それでも、近代化を批判するその創作の展開と独自の「個人主義」への辿り着きは、確かに個人の「一刻の意識における F」をもって、「社会進化の一時期における F」を体現しようとする傾向が見られる。漱石と共通な文芸的関心を持ち、同じく国民国家統合とそれに伴った近代化という社会体制の背景を経験した張文環の創作は、まさにそういう「時代思潮 (Zeitgeist)」を体現する関連的な対象だと考えられる。

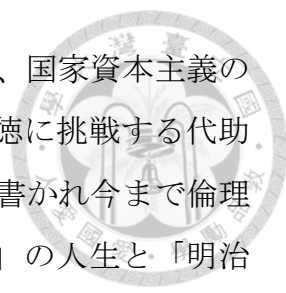
そこで、本研究は、国民国家統合とそれに伴った近代化という典型的な事象を中心に、文学の事実性を重視し、「作者」、「作品」、「読者」、「社会」の関係から文学を探究する経験的文学社会学の方法に基づく。漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の本質を探究し、両作家の共通な文芸的関心と文芸思想の関連性を明らかにし、その接点を提示することによって、明治社会と台湾植民地社会に影響を与えた国民国家統合とそれに伴った近代化を批判する時代思潮の一端を示すことを研究目的とする。

(三) 研究範囲

両作家の作品、創作背景、資料を通してその近代化社会への批判の内容を考察する必要がある。テキスト表現による読解を中心にする一方、作家と文壇の背景に関する資料をコンテキストのように用いて証左を示し、時代背景の視野を開いていく。

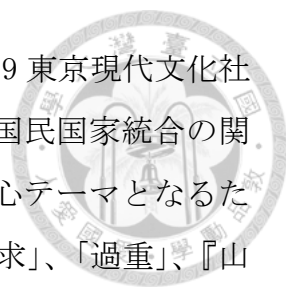
漱石の「藝術観及人生観の一局部を代表したる小説」⁷³の『草枕』は、今まで「反西洋」の東洋観を示していると捉えられてきたが、実際に画工の近代化批判、那美と「家」の関係、日本帝国主義の象徴である日露戦争を背景とした久一の徴兵が描かれている。そして『三四郎』は、新旧文化の混雑を描き出した都市小説として捉えられてきたが、日露戦争後の社会不況を後景にし、三四郎の文明体験の挫折、広田先生などの作中人物の近代化批判を表現している作品であり、特に作中で提起されている「新しき西洋」と「古き日本」の概念が見

⁷³夏目漱石「明治 39 年 8 月 7 日芥舟先生宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店、1957、P74



られる。『それから』は、代助の近代化批判を描いている上で、国家資本主義の矛盾とブルジョアジー父権社会への反抗が指摘され、特に道徳に挑戦する代助の姦通心理が描かれている。そして、『こゝろ』は大正時代に書かれ今まで倫理的な小説として提起されてきたが、明治時代を生きた「先生」の人生と「明治の精神」の意味との関連を示し、「先生」に「現代思想」の問題を求めてきた青年のことを描いている作品であり、漱石の提起した国家主義と対置する「個人主義」に関連させるように取り上げられてきた。『草枕』、『三四郎』、『それから』、『こゝろ』は、『吾輩は猫である』と『野分』のように実利主義への批判に限るのではなく、『虞美人草』の道義意識でもない、また『行人』、『彼岸過迄』、『道草』、『明暗』のように近代化問題への討論があまり見られない作品群と異なり、国民国家統合とそれに伴った近代化という時代性に関連していると伺える。それらの作品を中心に、作家資料と文壇背景を提示して、漱石の近代化批判と文芸思想の本質を探求していきたいと考えられる。

張文環に関して、「落蕾」は植民地の社会階級の問題を描き出しているが、近代化批判との関連性にあまり触れていないために、本研究の研究対象に取り入れられない。一方、『フォルモサ』の停刊と転向風潮の最中において書かれた「父の要求」は、近代文明への憧憬の問題と親権意識の圧迫が指摘されてきたが、父と植民側の賀津子に対する主人公の陳有義の「階級と親子間の間の問題」の思考について未解明なところがまだ多い。「過重」は、コロニアルモダニティと被植民者の父権の喪失が指摘されてきたが、台湾文芸連盟と『台湾新文学』への張文環の参加という背景を取り入れて、植民地生活を描いた作品の意図を提示する必要がある。日本統治期間で創作した唯一の長編作品の『山茶花』は、近代化の中の台湾植民地社会を描いていると指摘されてきたが、植民地の近代教育を受けた主人公の成長を描写する作品の意図と張文環の近代化批判、文芸方法の関連性を解明する必要がある。また、「資本家—植民者—父権」の構造が論じられてきた「閩雞」は、特に皇民文学に対抗する『台湾文学』への掲載、自然主義風のリアリズムの手法が指摘されてきたため、作品の解読には背景と創作意図との関連性への解明が必要である。台湾解嚴の後に書かれ、皇民化に影



響された植民地の問題⁷⁴を描いている『地に這うもの』（1975.9 東京現代文化社出版）も関連する作品であるが、台湾植民地社会の近代化と国民国家統合の関係を表現するよりも、台湾人のアイデンティティの問題が中心テーマとなるため、本研究ではそれを研究対象として取り上げない。「父の要求」、「過重」、『山茶花』、「閩雞」を中心に、作家資料と文壇背景も提示して、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する張文環の観点を論証していきたいと考えられる。

長塚節の『土』と島崎藤村の文学に対する漱石と張文環の共通な文芸的関心に関して、長塚節の『土』とその書かれた経緯、漱石の『土』序、張文環が『土』の愛読を公言した文壇の背景、漱石と張文環それぞれが島崎藤村の文学に対して関心を示す書簡や発言も研究範囲とする。

四、 構成

本論は、「第二章 夏目漱石の近代化批判と文芸思想」、「第三章 張文環の近代化批判と文芸思想」、「第四章 夏目漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の接点」で構成する。各章の概要は次の通りである。

第二章 夏目漱石の近代化批判と文芸思想

本章では、漱石の『草枕』、『三四郎』、『それから』、『こゝろ』を中心に考察し、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する漱石の批判と文芸思想の本質を明示していきたいと考えられる。

「第一節 『草枕』—国民国家統合とそれに伴った近代化への批判の始まり」において、『草枕』と日清戦争後の社会小説潮流との関連性、実利思想の侵入、父権体制の残存という山郷の那古井の現実問題を提示する上で、資本主義と父権体制に対する漱石の批判を明示する。それから、画工の「非人情」と「憐れ」

⁷⁴葉石濤「論張文環的《在地上爬的人》」（「民衆日報」1978、柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館，2011，P132-134）は、張文環の創作の本質を民衆生活の現実への反映で把握した上で、張文環の最後の作品『地に這うもの』を取り上げ、農民の陳啟敏が皇民化と実利主義の社会の中でいかに生き延びていくという描写から、土に定着する台湾人の民族性を見、そこから張文環の文学の特徴を理解されにくい忍従、無動揺と平和指向の老荘的虚無主義精神と指摘した。

の芸術的追求をもって国民国家統合とそれに伴った近代化の支配構造を乗り越えようとする漱石の試みを提示する。

「第二節 『三四郎』—近代化と国民国家統合への批判」において、美禰子に対する三四郎の近代化憧憬を込めた恋の挫折に、物質文明を追求する明治社会の近代化への批判という作品の意図を見出す。その上で、三四郎の文明憧憬と立身出世観に対する観察を通して、「新しき西洋」と「古き日本」の概念を、資本主義のもたらした物質文明の発展と親権思想を残存させた父権体制で明示し、国民国家統合とそれに伴った近代化を批判する作品の意図を見出す。

「第三節 『それから』—国家近代化から離反する近代人」において、資本主義と父権体制の問題を提起した先行研究を踏まえた上で、代助の姦通心理におけるその知性の働きをさらに掘り下げ、父の存在の象徴した資本主義と父権体制に反抗する代助の意図を明示していく。さらに、作品の中で提示されている時事を取り上げ、国家資本主義の発展と国家権力の強化という明治社会の近代化現象とそれに対する漱石の批判を提示する上で、資本主義と父権体制の象徴である父に反抗する代助の不安がアンドレーフの『七刑人』の政治的不安に繋がるところから、国民国家統合とそれに伴った近代化を批判する作品の意図を明示する。

「第四節 『こゝろ』—国民国家統合に反抗する「明治の精神」」において、まず先行研究を回顧し、作品の全体構成と「明治の精神」の意味の関連性を作品解読の手がかりにする。『こゝろ』を構成する手記と遺書の内容を当分に取扱ひ、その中から資本主義と父権体制に対する批判を見出す。さらに、「明治の精神」という言葉の源流を、島崎藤村の『破戒』に対する漱石の賞賛で使われた「維新の志士」という言葉に見出す上で、北村透谷の「明治文学の管見」に示されている国家主義批判、漱石の「個人主義」における国粹主義の批判との関連性を提起する。それによって、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する漱石の到達点を提示する。

第三章 張文環の近代化批判と文芸思想

本章では、張文環の「父の要求」、「過重」、『山茶花』、「闖雞」を中心に、国

民国家統合とそれに伴った近代化に対する張文環の批判と文芸思想を指摘していきたいと考えられる。

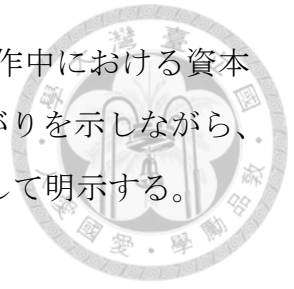
「第一節 「父の要求」—反植民意識の中の国民国家統合批判」において、まず原作の「父の顔」との方向性の違いを提示することによって、従来の「転向文学」論と区別する上で、植民地教育の価値観に影響された父権社会に対する陳有義の懐疑と、彼の思考した「階級と親子間との間の問題」から、国民国家統合のものの近代化の価値観に従属する父権体制に対する陳有義の批判を見出す。それから、陳有義の賀津子に当てた手紙の内容を通して、国民国家統合の近代化における資本主義の侵入、家族国家観に吸収された父権体制に対する批判を見出していく。

「第二節 「過重」—地方主義文学によって反映される国民国家統合の問題」において、地方主義文学の展開と「過重」の発表先の『台湾新文學』との関連性を明示する上で、『台湾新文學』に発表した張文環の社会観察を取り入れながら、経済略奪に遭わされた農婦の母の事を見詰め、父の喪失を思い出した健の功利主義と物質文明を憧憬する立身出世観からの目覚めを描いた「過重」に、資本主義の支配と、帝国の価値観に従属した父権体制という、国民国家統合とそれに伴った近代化への批判の反映を見出す。

「第三節 『山茶花』—国民国家統合に影響されている植民地社会」において、まず、植民地人間の生活に関する描写の中から、資本主義の広まりと父権体制の支配性という近代化問題の反映を提示する。それから、賢の田舎恋着の形成の原因を資本主義のもたらした功利主義観への嫌悪と指摘する一方、植民地の現実に対する客観視でもたらした田舎恋着の崩壊を提示する上で、そういうリアリズムの側面と自然主義の「地方色」のロマン性を脱して近代化問題を見つめる『フォルモサ』の理念との関連性を示し、日本帝国による国民国家統合とそれに伴った近代化に対する知識人の目覚めという作品の意図を提示する。

「第四節 「閨雛」—資本主義と父権体制への反抗に隠されている国民国家批判」において、台湾植民地社会における資本主義の侵入、父権体制の道德規範の残存の問題に反抗する個人内面の苦悩で時代性の問題に繋がる作品の意図を提示する上で、作品における自然主義風のリアリズムの手法と自然主義を取

り入れていた台湾文壇の近代化批判の関連性を手がかりに、作中における資本主義と父権体制に対する抵抗を、張文環の反植民意識との繋がりを示しながら、国民国家統合とそれに伴った近代化に対するその批判意識として明示する。



第四章 夏目漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の接点

本章では、長塚節の『土』、島崎藤村の作品に対する漱石と張文環の共通な文芸的関心とそれぞれの文芸思想の関連性を示し、漱石と張文環の文芸思想の接点を提示する。

「第一節 国家資本主義への批判で繋がる『土』への関心」において、まず長塚節の『土』に対する近代化批判の視点を込めた漱石の『『土』序』の評価を提示し、国家資本主義を批判する漱石の階級的視点、社会主義の傾向と人道的視線に関連させていく。それから、張文環がプロレタリア作家の友人への弔辞の中でそのリアリズムの作品の価値を『漱石全集』に比し、漱石の評価したリアリズム文学の『土』を自分の創作の参考にしたことへの観察で、漱石に対する張文環の意識を示す上で、張文環におけるリアリズムの重視が、実際に日本の国家資本主義の発展に呑み込まれた台湾植民地の近代化に対する批判意識と深く関連していることを提示する。それによって、国家資本主義の全体主義化の傾向を批判する漱石と張文環の文芸思想の接点を提示する。

「第二節 父権体制と国民国家統合への批判で繋がる藤村文学への関心」において、第二章の『こゝろ』論で提起した『破戒』に対する漱石の関心を手がかりにして、明治維新の封建打破の精神を文学の精神とする漱石が『破戒』の提起した階級と父子の問題に着目したのは、父権体制における制度的道徳への批判を文学の課題とし、それを国家主義と国民国家統合への批判に発展したと提示する。それから、張文環の「父の要求」における「階級と親子間との間の問題」への探求を手がかりにして、張文環における父権体制への批判と島崎藤村の文学への接触の関連性を明示し、さらに台湾植民地の国民国家統合の傾向への批判の展開との関連を提示する。それによって、父権体制と国民国家統合を批判する漱石と張文環の文芸思想の接点を提示する。



第二章 夏目漱石の近代化批判と文芸思想

漱石は、西洋化と対置する「文明批評家」として評価されてきたとともに、三好行雄によって「人間と文学の総体をあげて、いまなお現代人の〈生〉に突きつける問いの重さ、誠実さにある」⁷⁵と評価され、エゴイズムを批判し道義性を重んじる作家として認識されてきた。一方、先行研究の回顧において、すでに「文明批判小説」の『虞美人草』の道義性から転換する漱石の倫理意識を提示している。小泉浩一郎は方法論の視点で漱石のリアリズムをこのように指摘している。『草枕』において確立されたこの方法は、『二百十日』（明 39）、『野分』（明 40）、そして『虞美人草』（明 40）における、〈道義〉の立場からの現実への一方的裁断批評の試みを越えて、『三四郎』（明 41）から『こゝろ』（大 3）に至る現実への内的外的溯及と、その内部からの現実批評の視点の獲得と確立という、方法的一貫性の第一の出発点にほかならない」⁷⁶果たして、道義性を乗り越える漱石のリアリズムは、どのように国民国家統合とそれに伴った近代化という時代性に対する思考を反映しているのだろうか。本章は、『草枕』、『三四郎』、『それから』、『こゝろ』を中心に探求していきたいと考えられる。

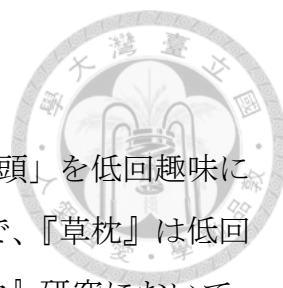
第一節 『草枕』—国民国家統合とそれに伴った近代化への批判の始まり

一、日清戦争後の社会小説の動向との繋がり

『草枕』（明治 39. 9～40. 1「新小説」）は、「二十世紀の文明」、「人情」の「煩い」から離れようとした画工が、山郷の那古井へ「非人情」の旅に出て、「気違い」と言われた那美に出会い、日露戦争に徴兵される久一への見送りの場面において、同じ汽車に乗った元夫を見て那美の表情に一瞬に表れた「憐れ」で、

⁷⁵三好行雄編『夏目漱石事典』（二版）学燈社、1992、P9

⁷⁶小泉浩一郎「人生」『夏目漱石事典』三好行雄編『夏目漱石事典』（二版）学燈社、1992、P168



求める画題が成就したという内容を物語っている。

『「鶏頭」序』(明治41.11)の中で、漱石が高浜虚子の「鶏頭」を低回趣味に立脚し、禅味・俳味に通じる「余裕」の文学と評価したことで、『草枕』は低回趣味の芸術観を表す小説とされていた。そしてその後、『草枕』研究において、熊坂敦子が『草枕』を反近性、「理想郷」への追求⁷⁷と捉えてから、西洋と対置する東洋の理想郷への追求という『草枕』のイメージが定着されてきた。それによって、吉田熙生は『草枕』における「「非人情」の美学」を「「出世間」すなわち社会的人間関係の否定」、「自然回帰」、画面に止まる「時間切断の願望」⁷⁸と捉え、東郷克美は「「出世間的」な慰藉の旅、精神的「トニック」を求めての「桃源」遊行の試み」⁷⁹と捉えた上で、前田愛はさらに山道の登って那古井に着いた画工の旅を、「往路と復路の描写を桃源郷のトポスに収斂させていく過程」⁸⁰と捉えてきた。平川祐弘も『草枕』を「反西洋としての東洋」、「反近代」の俳句的小説⁸¹とした。確かに、画工は自然と人間感情を描いたシェーレの雲雀の詩⁸²を読んで、「超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多かろう」、「西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものもこの境を解脱する事を知らぬ」⁸³(P10)というように、現実世界のことを憂慮する西洋の詩を批判し、「採菊東籬下、悠然見南山」(陶淵明「飲酒」)「獨坐幽篁裡、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照」(王維「竹里館」)という漢詩の境地から、「超然と出世間

⁷⁷熊坂敦子「反近代・日本の漱石」『解釈と鑑賞』40(2)学燈社、1975.02、P25-32

⁷⁸吉田熙生「『草枕』序説」(初出記されず1976)『漱石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P236

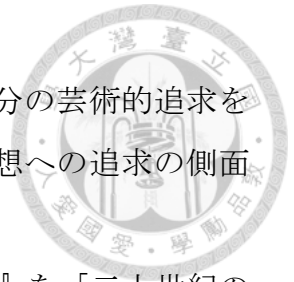
⁷⁹東郷克美「『草枕』水・眠り・死」(『別冊国文学夏目漱石必携』1982.02)『漱石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P251

⁸⁰前田愛「世紀末と桃源郷—『草枕』をめぐる—」(「理想」1985.03)『漱石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P261

⁸¹平川祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘—』(第2刷)講談社、1993、P342、「汽車の走らぬ世界—漱石にとってのピトロクリ—」三好行雄編『講座夏目漱石 第5巻(漱石の知的空間)』有斐閣、2004.09、P296-320

⁸²「We look before and after And pine for what is not: Our sincerest laughter With some pain is fraught; Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.」(前をみては、後えを見ては、物欲しと、あこがるるかなわれ。腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ)(夏目漱石『草枕』新潮文庫、2011、P9)

⁸³夏目漱石『草枕』新潮文庫、2011



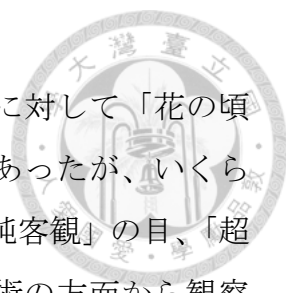
的に利害損得の汗を流し去った心持ち」(P12)を感じて、自分の芸術的追求を東洋の精神世界に求めようとした。しかし、それは画工の理想への追求の側面を捉えているだけである。

『草枕』の冒頭に、画工の語りは、『不如帰』と『金色夜叉』を「二十世紀の文明」を書き表した「人情」の小説と呼んでいる。徳富蘆花の『不如帰』は、日清戦争を背景にして旧家族の軋轢と戦争に出された夫の死に繋がる女の悲運を描き、尾崎紅葉の『金色夜叉』は、名利目当てで両親の言いなりに結婚した女への復讐として高利貸しに墮落した男の悲運を描いている。日清戦争後の明治二十年末に、戦争の起した社会不況で、社会小説を求める声が高くなり、社会性や作者の観念性を反映させる深刻小説や観念小説が、硯友社門下の広津柳浪や川上眉山などの作家によって書かれはじめた。飛鳥井雅道の指摘によると、すでに労働社会に視線を向いた柳浪の取り扱う「家庭問題」は、「三十年代文学のカギともな」り、そして明治三十年代における社会小説動向は、魯庵、柳浪、蘆花を中心とする、日本の封建的な「家」またはそれを支える半封建社会との対決であった⁸⁴。『不如帰』と『金色夜叉』はまさにその流れの中で、日清戦争後の社会の実情をよく書き表していることによって、社会小説の最盛期、明治三十年代で歓迎されていた。

作中人物の画工が「住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、有難い世界をまのあたりに写すのが詩である、画である」(P6)と主張し、「恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛国も結構だろう。しかし自身がその局に当れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んでしまう。」(P11)というように、『不如帰』と『金色夜叉』の描き出した世の中と対置するのは、まさに資本主義と国民国家統合を発展する明治社会の実情から離れようとする意図を示している。にもかかわらず、佐藤勝が反近代の中で文明現実を常に意識している画工のこと⁸⁵を指摘したように、画工は最初から旅の中で人間に出会い、「我利私欲の羈絆」が現れる可能性を予想した。

⁸⁴飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』晶文社、1970、P46

⁸⁵佐藤勝「『草枕』論」(『国語と国文学』1972.04)『漱石作品論集成第二巻 坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P195



山郷の婆さんの口から那美の花嫁姿を聞いた画工は、那美に対して「花の頃を越えてかしこし馬に嫁」(P26) という俳句的美しい想像があったが、いくら人間を「見様次第で如何様とも見立てがつく」ものと捉え、「純客観」の目、「超然と遠きから見物する気で」、「全力を挙げて彼等の動作を芸術の方面から観察する」(P15～17) ように努めても、婆さんが二人の男に懸想してどちらも選べなく自己犠牲で死んでしまった昔話の長良の娘のような存在で、「気違い」になった那美のことを話したとたん、近代小説を熟読した画工は、すぐに『ハムレット』の内容を思い出し、花嫁姿の那美の顔を、父が恋相手のハムレットに誤殺されたため、正気を失い、足を踏み外して溺れ死んでしまった悲劇的ヒロインのオフエリアのイメージと重ねてしまった。画工にとって、那美の存在はむしろ「我利私欲の羈絆」という「人情」の要素の取り入れた近代小説のヒロインに近かった。二人の男に懸想した長良の娘に例えられた那美は、二人の男の間に挟まれていたが、その事情は決して愛する相手が決められないような単純な昔話ではない。那美は「是非京都の方へと」、京都修行に出た時に知り合った男に嫁ぐのを望んでいたが、「親ご様が無理に」取り決めて、親の利益目当ての「我利私欲」で「城下で随一の物持ち」(P29) に嫁がせられたのである。那美の「恋」と結婚の事情は、まさに画工の指す近代テキストの「人情」の要素、すなわち「親」、「恋」、「利害の旋風」を表している。「百万本の檜に取り囲まれて、海面を抜く何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭いはなかなか取れない」(P14) という画工の語りから分かるように、山郷の那古井は「人情」という現実の色合いを残し、純粹に「理想郷」として造形されていない。

その上で、画工が床屋に行った場面で、「日英同盟国旗」が現れ、志保田の隠居に訪ねた時も、那美の甥の久一が徴兵されたことが語られている。「現実世界は山を越えて、海を越えて、平家の後裔の住み古したる孤村にまで逼る。」(P111) と久一のことを感嘆した画工の認識のように、天皇中心の「忠君愛国」、すなわち富国強兵のための国民国家統合は、すでに山郷の那古井に侵入している。天皇イデオロギーの頂点となった日露戦争を背景とした『草枕』は、まさに日清戦争後の社会小説の『不如帰』、『金色夜叉』に描き出された社会実情と深く関



連し、「親」、「恋」、「忠君愛国」、「我利私欲」、すなわち富国強兵のための近代化における資本主義の導入と、封建思想の残存した父権体制と国家権力に侵入された山郷の近代性を描き出している。

漱石は、確かに「Self-consciousnessの結果は神経衰弱を生ず」、「父子ノ關係を疎にし。師弟の情誼を薄くし。夫婦の間を割き。朋友の好みを滅する傾向なり」⁸⁶というように、個人意識の危険性を意識していたが、それはエゴイズムに対する思考であり、通俗道徳に対する認めではない。漱石は『草枕』の創作の前に、「自由主義は秩序を壊亂せる事」、「無學不徳義にても金あれば世に勢力を有するに至る事を事實に示したる故國民は窮窟なる徳義を棄て只金をとりて威張らんとするに至りし事」⁸⁷と、明治社会における資本主義の導入と、それによって形成した実利主義の問題を批判した。そして、「人は善悪をも辨ぜず徳義の何物たるをも解せず只其道々にて機械的に國家の用に立つのみ毫も國民の品位を高むるに足らざるのみか器械的に役立つと同時に一方には國家を打ち崩しつゝあり」⁸⁸、「今ノ文化ハ金デ買ヘル文化ナリ金デ買ヘル文化ガ最モヨキ文化ナルカ若シ然ラズンバ日本ガ萬事ニ於テ西洋ヲ崇拜スルハ愚カナリ」⁸⁹と、資本主義のもたらした実利主義の問題を国家政策への批判に関連させた。一方で、明治の近代化の過程で残された忠孝思想を意識し、「日本ノ昔ノ道徳はsubordinationがヨク出来て居る君臣、父子、夫婦。是は社会を統一シテ器械的に働かす為に尤も必要である今はだめ」⁹⁰、「道徳は習慣だ強者の都合よきものが道徳の形にあらはれる孝は親の権力の強き處忠は君の権力の強き處貞は男子の権力の強き處にあらはれる」⁹¹と、上下関係、権力関係を固く決め付ける父権体制を批判した。『草枕』に描かれている実利思想と親権思想の問題は、まさに資本主義と父権体制を含めた国民国家統合とそれに伴った近代化に対する漱石の批判の表れであり、明治維新の啓蒙思潮を受けた漱石にとって、徳川幕府の

⁸⁶夏目漱石「明治 38. 39 断片」『漱石全集第二十四卷』岩波書店，1957，P133

⁸⁷夏目漱石「明治 34 年 4 月頃以降の断片」『漱石全集第二十四卷』岩波書店，1957，P64

⁸⁸注 87 と同書，P64

⁸⁹注 87 と同書，P69

⁹⁰注 87 と同書，P73

⁹¹注 87 と同書，P71

封建体制を残し、資本主義国家に発展する明治国家は皮肉に見えていたのがある。

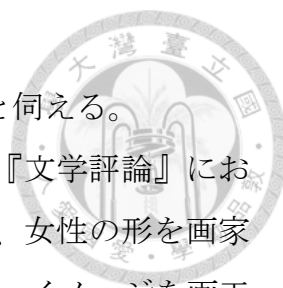


二、「憐れ」による近代化問題への超越

画工が志保田の温泉に泊った最初の日、那美は画工の部屋の近くで「あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」(P34) という失恋や不幸などの「人事」、「現象世界」を表す長良の娘の唄を歌い、振袖姿の影を画工に見せたことによって、「孤村の温泉」、「春宵の花影」、「月前の低誦」、「朧夜の姿」(P37) という俳句の世界の風情を楽しもうとした画工の心を取り乱そうとした。そして、それをわざと承認⁹²した上で、「海棠の露をふるふや物狂」「花の影、女の影の朧かな」「正一位女に化けて朧月」(P39) と書いた画工の句の傍に、部屋の掃除の時にわざと鉛筆で「海棠の露をふるふや朝鳥」、「花の影女の影を重ねけり」、「御曹子女に化けて朧月」(P45~46) というように男女関係を引き立てる句を画工の書いた句の傍らに添えた⁹³。それから、画工の泊まった部屋の向側の二階の欄干に寄りかかって、画工に「毒矢の如く空を貫いて、会釈もなく余が眉間に落ちる」(P52) を感じさせる強い感情的視線を投げかけ、「詩的な立脚地に帰れる」と受け止めた画工に対して、裸の姿でわざと画工のいた風呂に現れた。さらに、画工と悲恋を描く西洋小説の『ビーチャムの生涯』を読む時に、「惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を最初から仕舞まで読む必要がある」、「画工だから、小説なんか仕舞まで読む必要はない」と主張した画工の「非人情」に相對して、筋の流れと人物関係が気になり「人情」に拘る一面を見せ、地震に遭った瞬間、体を摺り寄せて、二人の顔が触れかけるところでわざと「非人情ですよ」と言って色気を見せていた。那美の一

⁹² 「あなた、だって嫌な方じゃありませんまい。昨日の振袖なんか……」と言いかけると、「何か御褒美をちょうだい」と女は急に甘えるように云った。「なぜです」「見たいとおっしゃったから、わざわざ、見せて上げたんじゃないですか」「わたしがですか」「山越をなされた画の先生が、茶店の婆さんにわざわざ御頼みになったそうで御座います」(夏目漱石『草枕』新潮文庫、2011、P120)

⁹³ 画工の見かけた大徹の額と戸棚にある『遠良天釜』が「全くあの女の所持品」で、画工の泊った部屋是那美のもともと使っていた部屋であることから見れば、部屋の掃除でわざと句を書き残したのが那美である。



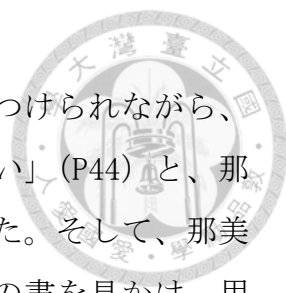
連な行動は、わざと男女関係を画工に意識させる意図があると伺える。

そういう場面描写があるため、前田愛は『英文学形式論』、『文学評論』において漱石の何度も引用したロセッティの詩を手がかりにして、女性の形を画家の魂としたロセッティの手法で、『草枕』の那美のオフェリア・イメージを画工のアニマとし、それを画工の求めるエロスの深層意識の投影⁹⁴と捉えている。しかし、画工は実際に那美の挑発に対して、湯気朦朧の中の那美の姿を人の目に媚びる裸体画と対置し、「幽玄に化する一種の霊気のなかに髣髴として、十分の美を奥床しくもほのめかしている」「桂の都を逃れた月界の嫦娥」として眺め、地震で体を摺り寄せてきた那美に対する視線を外して桜に投げかけて「どう変化しても矢張り明らかに桜の姿を保っている所が非常に面白い」と考え、美化や挑発に乗らない姿勢を示した。そして、「余は画工である。先は只の女とは違う」、「恋とか愛とか云う境地は既に通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない」(P53)「現実世界に在って、余とあの女の間には纏綿した一種の関係が成り立ったとするならば、余の苦痛は恐らく言語に絶するだろう」(P154)という考えを述べた。那美のオフェリア・イメージが画工のアニマだとしても、それはエロスの深層意識の投影よりも、むしろ「非人情」を求める画工と、「人情」に拘る那美の暗闘が、作品における衝突性を築き、作品の面白みを一歩ずつ高潮に導くほど、那美の「気違い」に対する画工の認識が浮き彫りになる。

画工は「嬢様はまた那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。」(P29)という、日清戦争で夫の勤めの銀行の倒産で、那古井に出戻りした那美のことに対する村人の噂⁹⁵を、真に受けていない。その代わりに、那美のことを「力めて往昔の姿にもどろうとしたのを、平衡を失った機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云わぬばかりの有様」(P44)と観察した。その上で、「その軽侮の裏に、何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした様

⁹⁴前田愛「世紀末と桃源郷—『草枕』をめぐる—」(「理想」1985.03)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P266-267

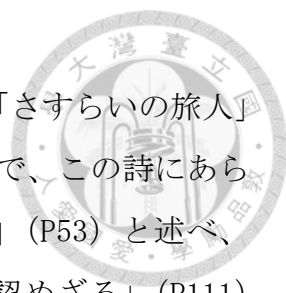
⁹⁵范淑文『漱石研究「草枕」その究極』(凱倫 2002, P81)「村人は離縁の背後に潜んでいる事象に目を向けず」「那美さんを「不人情」「薄情」と軽々と判断を下した。」と指摘している。



子の底に慎み深い分別がほのめている」(P44)、「不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔だ」、「不仕合な女に違ない」(P44)と、那美の情欲的姿勢が「気違い」ではなく「芝居気」だと認識した。そして、那美の使っていた部屋で観海寺の大徹和尚の「竹影払階塵不動」の書を見かけ、用筆筒から名利を求めない白雲和尚の『遠良天釜』の説法と、自由恋愛の悲劇を描く歌物語の『伊勢物語』を見つけ、また「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めておられる」(P75)という那美の修行に対する大徹和尚の賛美を聞いた。赤井恵子は、那美をアニメ、画工の〈内なる女性〉と捉える一方、「現世に生きて苦悩する一人の近代人」の那美を画工から独立した存在⁹⁶で区別したが、画工の観察と視点の置くところから観察できるように、画工は実際に実利主義をもたらした資本主義と封建思想を示す父権体制に圧迫される那美のことを領略している。

「離縁された亭主です」(P166)と告げた那美が、「銀行が潰れて贅沢が出来ねえって、出ちまったんだから」(P65 床屋の親方の証言)と言い放したのは、実利主義と親権思想の支配を象徴する親へのやつあたりを示している。家名を汚した那美は、本家に引き取られなく、高雅な趣味を持つ隠居さんによって引き取られていた。「義理が悪るいやね。隠居さんがああしているうちはいいが、もしもの事があつた日にゃ、法返しがつかねえ訳になりまさあ」、「本家の兄たあ、仲がわるしさ」(P65)という床屋の親方の観察から分るように、隠居がなくなった後、本家に迷惑をかける那美は居場所を追われるようになる。「私が身を投げて浮いている所を一苦しんで浮いている所じゃないんです—やすやすと往生して浮いている所を—綺麗に書いてください」(P123)と、那美が自己の死を予告し、戦場に赴く久一への別れで「久一さん、御前も死ぬがいい。生きて帰っちゃ外聞がわるい」(P170)と言い放したのは、まさに実利主義と親権思想に勝とうとして勝てられない人間の運命を宣告している。那美の戻ろうとした「往昔の姿」は、まさに国民国家統合とそれに伴った近代化で形成した実利主義と親権思想の結合によって壊される前の、「極々内気の優しい」姿であると伺

⁹⁶赤井恵子「「草枕」小考」『近代文学試論』(19) 広島大学近代文学研究会 1980. 11, P9-16



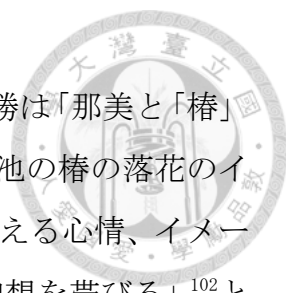
える。それに対して、画工はメレディスの英詩⁹⁷で、自分を「さすらいの旅人」に、那美を佳人に例えて、「二人の間には、ある因果の細い糸で、この詩にあらわれた境遇の一部分が、事実となって、括りつけられている」(P53)と述べ、久一との出会いを「夢みる事より外に何等の価値を、人生に認めざる」(P111)自分にとって一種の「運命」の存在として認識した。画工が、鏡の池に写生に行った久一のことを聞いてすぐ興味を感じ、「あの女の御蔭で画の修業がだいふ出来た」と述べ、その後那美からその池に身を投げるのを聞いて驚いたあまり、鏡の池へ写生に行ったのは、まさに画想を求めに行ったことを通して、近代化社会の現実を描き出そうとした意図が込められている。小泉浩一郎は『草枕』と「現代日本の開化」との対照において、「統一」を欠く那美の「顔」「心」「世界」の背景には、「外発的開化」を宿命づけられた日本の国民の悲惨な現実がダブル・イメージをなして存在している⁹⁸と捉え、「鏡が池」の自己客観視する機能を通して、画工の「非人情」には「現実逃避」から「二十世紀文明の即自的体験者としての那美」を「領略」するようになるという意味上の変化がある⁹⁹と指摘している。小泉の指摘のように、那美に対する画工の観察と理解は近代化社会の問題への観察と深く関わっていることが分かる。

画工は、本当は「自在に泥団を放下して、破笠裏に無限の青嵐を盛る」(P77)詩人画客の境地に達せない。画工にとって「因果の糸」や「運命」の存在とは、「楽は物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む」(P77)というように、理想の誕生には現実の存在が常の付き物であるという意味を含めている。それで、画工はミレーの使った草花と違って鏡の池に浮かんだ椿の花を構図に

⁹⁷メレディス『シャングパットの毛剃り』第二章「美女バナヴァーの物語」夏目漱石『草枕』「Sadder than is the moon's lost light, Lost ere the kindling of dawn, To travelers journeying on, The shutting of thy fair face from my sight. Might I look thee in death, With bliss I would yield my breath.」(「夜明けの光の前に月光が消えうせることよりも、さすらいの旅人である私にとって、あなたのうろわしい面影が眼前から消え去ることのほうがいっそう悲しい。もし死んであなたを見ることができればなら、わたしは無上の喜びをもってこの息を絶とう。」)(夏目漱石『草枕』新潮文庫、2011、P52、192)

⁹⁸小泉浩一郎「『草枕』論—画題成立の過程を中心に—」『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』(「国文学言語と文芸」1973.02)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P204

⁹⁹注98と同じ論文資料、P208



取り入れようとした。構図の中の椿のイメージについて、佐藤勝は「那美と「椿」とが計画的、意識的に重ね合わされ」¹⁰⁰、小泉浩一郎は「鏡が池の椿の落花のイメージに対する画工の異様な拘執」¹⁰¹、清水孝純は「那美に抱える心情、イメージは、鏡が池に散る椿の花のイメージとともに妖しい濃艶な幻想を帯びる」¹⁰²と捉えた。「あの色は只の赤ではない。屠れたる囚人の血が、自ずから人の眼を惹いて、自ずから人の心を不快にする如く一種異様な赤である」、「人魂の様に落ちる。又落ちる」(P128) という描写から分かるように、花ごとく落ちる血の色のような椿は、実際に『草枕』の中で人間の死の象徴とされている。「屠れたる囚人」の死は、実利主義と親権思想の現実世界に囚われて昔の優しい自己像を追い続けて、理想喪失で死を選んだ那美のことを指している。「鏡の池」という地名の象徴から分るように、水の中に死ぬ那美と、岸边に立ってそれを描こうとする画工の間に鏡像関係が存在している。反近代という理想を追求する「生」への願いが画工の意識的側面であれば、現実の支配に導かれた那美の「死」が画工の現実認識としてのアニマ、すなわち近代化社会の問題に対する認識の投影である。

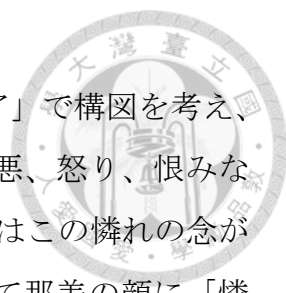
「あんなのを美的生活とでも云うのだろう」(P154) と、那美の情欲的姿勢を形容した画工の言葉は、作品全体の構造から見れば、実際に那美を皮肉するものではない。「美的生活」という言葉は、『太陽』で国家主義や日本主義を説いて、社会小説や社会新聞を発展させていた明治三十年代の社会によって受け入れられなく、ロマンチズムの本能主義に転落¹⁰³した高山樗牛の「美的生活を論ず」から出ている。那美の芝居は、狂気による情欲の暴露であるが、資本主義のもたらした実利主義と父権体制の親権思想に圧迫されて出た行動でもある。画工を通して提起されたその言葉は、実際に高山樗牛に対する諷刺であり、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する批判の暗示なのである。

¹⁰⁰佐藤勝「『草枕』論」(『国語と国文学』1972. 04)『漱石作品論集成第二巻 坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990. 12, P199

¹⁰¹注 98 と同じ論文資料、P207

¹⁰²清水孝純「『草枕』の問題—特に「ラオコーン」との関連において—」(『文学論輯』21, 1974. 03)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990. 12

¹⁰³ 飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』晶文社、1970, P82—83



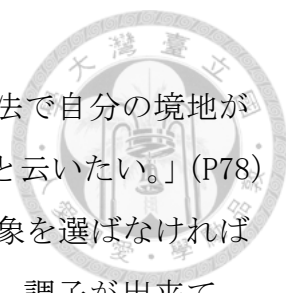
一方、画工は「平生から苦しんでいた、ミレーのオフェリア」で構図を考え、「矢張御那美さんの顔が一番似合う様だ」と思い、嫉妬、憎悪、怒り、恨みなどの激しい情緒を挙げた最後に、「御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ」(P129～130)と、水死構図において那美の顔に「憐れ」の表情を点じようとした。「憐れ」について、萩原桂子は画工の最後に見つけた「憐れ」を「非人情」の「究極」¹⁰⁴と捉えている。そして「非人情」について、清水孝純は「非人情の美学は、運命の認容の方向に向って徐々に拡大深化している」、「画工は、絵になるかならないかという過程を通して、心の重要性を発見するのであるが、その心は、実は人間の諸関係からきているのである」¹⁰⁵と捉えている。范淑文も「非人情」の美学を「超然と遠き上から」画中の人物、それぞれの動きを眺める」が、「全く人情を棄てられぬ。同情を起こしたり。反感を起こしたりする」¹⁰⁶と捉えている。旅の中で、「画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ」(P17)ように、人間性の優しさと自然の調和を発見しようとした画工が、最初に出会ったのは春山の中の婆さんであり、婆さんに接して、夫婦相合を描く世阿弥の高砂能を思い出した。「成程老女にもこんな優しい表情があり得る」「老人もこう表わせば豊かに、穏かに、あたたかに見える」(P21)とあって、婆さんの袖無し姿を描こうとした。画工の絵に取り入れようとした基準から分かるように、「非人情」は確かに人間関係からかけ離れない概念であり、そして、「神の知らぬ情で、しかも神にもっとも近き人間の情」(P129)の「憐れ」は、確かに画工の「非人情」の旅の中で求めようとした理想の到達点である。

そして、その理想の到達点は、傍観者よりも画工自身の参与も必要になる。画工は、「たしかに何物をも見ておらぬ」と自然に対する「物化」の芸術論を拒む上で、「只眼前の人事風光を有のままなる姿」(第一方法)、「わが感じたる物象を、わが感じるままの趣を添えて、画布の上に淋漓として生動させる」(第二

¹⁰⁴萩原桂子『「草枕」論：浮遊する魂』『九州女子大学紀要。人文・社会科学編』34(3), 1998, P91-100

¹⁰⁵清水孝純「「草枕」の問題—特に「ラオコーン」との関連において—」(「文学論輯」21, 1974. 03)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社, 1990. 12, P217、225

¹⁰⁶范淑文『漱石研究「草枕」その究極』凱倫 2002, P73、78



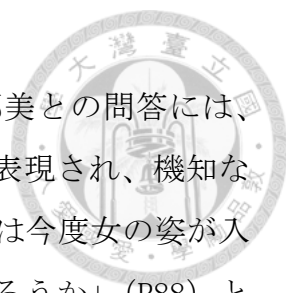
方法) という「主客深淺の區別」(P79)のある普通の画の方法で自分の境地が表せないと意識していた。「余が心はただ春と共に動いていると云いたい。」(P78)と主張した画工が求めようとしたのは、「心持ちに恰好なる対象を選ばなければならない」(P80)、「筆墨に物外の神韻を伝え得る」、「色、形、調子が出来て、自分の心が、ああここにいたなど、たちまち自己を認識するようにかかなければならない。」(P81)という「第三」の方法である。それは、すなわち漱石が明治三十九年の断片で書き記した「主客は一致なり」、「物ト心トハ本来分ツベキ物ニアラズ」¹⁰⁷という境地である。

オフエリアが運命に翻弄されて悲しみの果てに無抵抗な姿勢を示しているのに対して、那美は「人情」¹⁰⁸に拘り過ぎていた。そういう那美の姿に対して、画工は「温和しい情けが吾知らず湧いて出る」(P44)ように感じ、他界に逝く那美への想像¹⁰⁹によって、那美の人生の悲劇性を意識し、彼女を諭そうとした。「真夜中の甲板に帆綱を枕にして横わりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血に似たる瞬時、女の手を確と把りたる瞬時が大濤のごとくに揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強いられたる結婚の淵より、是非に女を救い出さんと思い定めた。かく思い定めて男は眼を閉ずる。——」、「女は?」、「女は路に迷いながら、いずこに迷えるかを知らぬ様である。攫われて空行く人のごとく、ただ不可思議の千万無量——」(P118) 男女の悲恋を描く西洋の近代小説の『ビーチャムの生涯』を読むその場面は、今まで「非人情」を求める画工の矛盾と

¹⁰⁷夏目漱石「明治39年断片」『漱石全集第二十四巻』岩波書店、1957、P184

¹⁰⁸安藤靖彦「「草枕」論」(『国語と国文学』1972.04)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P192)は、「非人情」を一種の「夢の立場」と捉える一方、那美の「憐れ」の表情で「胸中の画面」が成就した時、「非人情はすでに現実なる人情の対立物ではなくなる」と捉えている。しかし、その捉え方は、「憐れ」における人間関係の要素と「我利私欲」を指す作中の「人情」の概念を区別していない。「憐れ」はやはり「我利私欲」を指す作中の「人情」の概念と対立するものである。

¹⁰⁹「どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ、断念もして、念仏を唱えたい。死ぬべき条件が具わらぬ先に、死ぬる事実のみが、ありありと、確かめらるるときに、南無阿弥陀仏と回向をする声が出るくらいなら、その声でおういおういと、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮りの眠りから、いつの間とも心づかぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかかった煩惱の綱をむやみに引かるようで苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んでくれるな、穏かに寝かしてくれと思うかも知れぬ。それでも、われわれは呼び返したくなる。」(夏目漱石『草枕』新潮文庫、2011、P87)

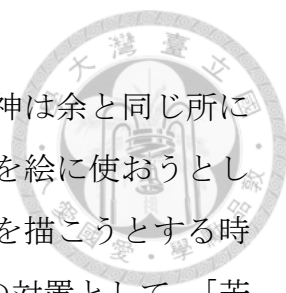


して捉えられてきたが、実際に画工の引用したテキストと那美との問答には、「非人情」を求める画工と「人情」に拘る那美の相対関係が表現され、機知な那美に悟りのきっかけを与えようとする動機が見られる。「余は今度女の姿が入口にあらわれたなら、呼びかけて、うつつの裡から救ってやろうか」(P88)という画工の同情の念は、まさに人間を憐憫する「憐れ」の感情である。画工が「人情」に拘る那美を「筆墨に物外の神韻を伝え得る」「恰好なる対象」とし、「この情があの子の眉間にひらめいた瞬間に、わが画は成就する」(P130)ように考えたのは、まさに自分の中の「憐れ」の存在を那美に見出すこそ、自分の芸術観が達成できるという創作意図を示している。

そして、「勝とう勝とう」としていた那美は、最後に「九寸五分」で元夫を殺さなく、おちこぼれた彼に財布を渡すのを選択した。「片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した、白い手頸に、紫の包。これだけの姿勢で十分画にはなろう」(P162)と、画工は期待したが、那美と元夫の画の構成が、二人の「心的状態」の間隔で、「画としては、支離滅裂」になった。画工がやっと那美の表情から「憐れ」を見出したのは、志保田一家が日露戦場に赴く久一を見送る場面である。それは、富国強兵の政策と忠君愛国の思想ために、人間が「二十世紀の文明」、「現実世界」の中で建設した「文明の長蛇」の汽車に、貨物のように乗せられて、犠牲に赴いていく場面である。「名残り惜しげに首を出した」元夫を見ると、那美は「憐れ」の表情が自然と浮んだ。「人を思いやる人間的優しさ」、「無私の表情」¹¹⁰という東郷克美の捉え方のように、那美の「憐れ」は、まさに自分の意志で選択できない夫に恨みを抱かなく、金を工面してあげ、その死を惜しむことを含めて、利害を超えた至上の感情である。画工は女が水底に往生したことを軽い気持で描いたスウィンバーンの詩で、ミレーのオフエリアを「苦なしに流れる有様は美的に違いない」(P90)というように解釈を試みた。ミレーはキリスト教の「祈り」¹¹¹の意味でオフエリアの表情を描いたのに対して、

¹¹⁰東郷克美「『草枕』水・眠り・死」(『別冊国文学夏目漱石必携』1982.02)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社、1990.12、P259

¹¹¹ミレーの属するラファエル前派は、自然への回帰と誠実な細部描写、芸術の高尚な理想と豊かな詩想を重んじる。鈴木保昭「漱石のオフエリア夢想～草枕の中のシェークスピア」



画工は「ミレーのオフエリアは成功かもしれないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑わしい」と述べた。長良の娘の飛び込んだ鏡の池を絵に使おうとして、鏡の池へ写生に行って、椿の漂う水面に美女の浮かぶ画を描こうとする時も、画工は苦しい表情を生動に表現する彫刻のラオコーンとの対置として、「苦痛が勝ってはすべてを打ち壊わしてしまう」(P129)と主張した。それによって、画工が「憐れ」の表情を選択して那美の顔に点じようとしたのは、苦しみへの乗り越えという意味が込められていると伺える。東洋の自然に調和する優しい人間性に根源している「憐れ」を、那美の顔と西洋画の構図に見出すこそ、「西風東漸」のもたらした「二十世紀の文明」の推移、「我利私欲」の苦しみを乗り越える画工の理想を示している。

漱石自身は『草枕』を「藝術観及人生観の一局部を代表したる小説」¹¹²と呼んでいる。それについて、小泉浩一郎は方法論の視点で「人生（現実）と芸術（認識）とを有機的な統一関係において相結ぶ方法的確立は、『草枕』のうちにこそ認めうる」¹¹³と指摘した。漱石にとって、椿の花を絵に配置するのが近代化社会の現実に対する観照であれば、「憐れ」の表情を点じるのは、まさに現実を乗り越えようとする芸術の認識を示している。そして、現実への観照も現実への乗り越えの芸術的試みも、国民国家統合とそれに伴った近代化でもたらされた資本主義と父権体制の支配に対する批判と深く関連していると伺える。

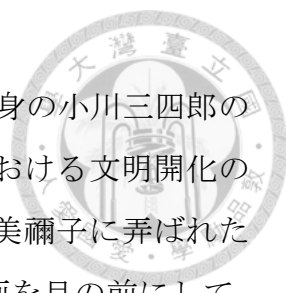
第二節 『三四郎』—近代化と国民国家統合への批判

一、近代人の戯画で示している近代化批判

（「立正大学文学部論叢」89, 1989, P1-38）は、ミレーの「オフエリア」を「まるで「神」に祈るような顔の表情」と捉えている。

¹¹²夏目漱石「明治39年8月7日芥舟先生宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店、1957, P74

¹¹³小泉浩一郎「人生」『夏目漱石事典』三好行雄編『夏目漱石事典』（二版）学燈社、1992, P168



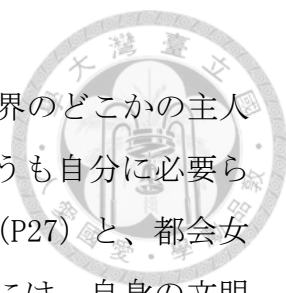
漱石の『三四郎』（明治 41.9～12「朝日新聞」）は、田舎出身の小川三四郎の東京進学と日露戦争後の社会を中心に描き、三四郎が都会における文明開化の目まぐるしい変化と都会人との出会いで眼界を広め、憧れの美禰子に弄ばれた結果、その結婚を見届け、展覧会に招待されて美禰子の肖像画を目の前にして、「迷羊」を口で繰り返すしかない恋の幻滅の過程を物語っている。小泉浩一郎は『三四郎』を、『虞美人草』の道義意識を乗り越えて『草枕』のリアリズムを継承する作品として捉えているほかに、吉田孝次郎も『三四郎』の意図について一般の「教養小説」論¹¹⁴と区別して、『破戒』の衝撃の後に展開した漱石のリアリズム創作の「写実的意図」¹¹⁵を指摘した。『三四郎』のリアリズムが、いかに近代化問題に関連し、漱石の近代化批判と文芸思想を表現しているかが興味深い。

日露戦争に勝って明治の近代化が全盛期を極めた明治四十年代において、田舎出身の小川三四郎は、東京に出て近代化のめまぐるしさを見聞した。「東京のまん中に立って電車と、汽車と、白い着物を着た人と、黒い着物を着た人との活動を見て、こう感じた」、「この劇烈な活動そのものがとりもなおさず現実世界だとすると、自分が今日までの生活は現実世界に毫も接触していないことになる。」¹¹⁶ (P22) 三四郎の動揺は、国家資本主義の発展でもたらされた立派な物質的建設に対する驚きであると伺える。三四郎は地味な母を古ぼけた昔の代表とし、旅館まで着いていった大胆な「汽車の女」を「現実世界の稲妻」とした上で、東京大学の池辺で美禰子と出会い、美禰子の「黒眼の動く刹那を意識した」とたん、「活動の激しい東京を見たためだろうか。あるいは——三四郎はこの時赤くなった。汽車で乗り合わせた女の事を思い出したからである」(P27)と思い出した。そして、学者になろうとした志が「未来に対する自分の方針が

¹¹⁴ 「教養小説」の定義は、主人公が経歴を経て内面的に成長していく過程を指しているが、『三四郎』に関する「教養小説」論は、主人公の「夢を見ている」「無性格」という越智治雄の指摘によってすでに論破されている。(越智治雄『『三四郎』の青春』(『漱石私論』1971.06)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社、1995、P24)

¹¹⁵ 吉田孝次郎「漱石三部作の世界」(『文学』1954.05)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社、1995、P19

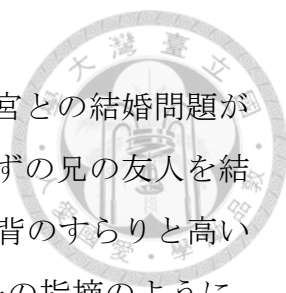
¹¹⁶ 夏目漱石『三四郎』新潮文庫、2006



二途に矛盾している」(P27) ように動揺され、「自分はこの世界のどこかの主人公であるべき資格を有しているらしい」、「——現実世界はどうも自分に必要らしい。けれども現実世界はあぶなくて近寄れない気がする。」(P27) と、都会女性と文明に対する憧憬と不安の念が発生した。三四郎の考えには、自身の文明体験を女性のイメージと結びつける傾向が見られる。そして、三四郎は田舎からの母の手紙を受け取ってから、心の中で彼なりの世界観を形成した。第一の世界は、「明治十五年以前の香がする」「立退場のような」母のいる田舎の旧社会である。第二の世界は、「生計はきっと貧乏」、「現世を知らないから不幸で、火宅を逃れるから幸いである」広田先生と野々宮君の代表する学者生活である。第三の世界は、「燦として春の如く盪いている。電燈がある。銀匙がある。歓声がある。笑語がある。泡立つシャンパンの杯がある。そうしてすべての上の冠として美しい女性がある」(P80-81) という、物質文明と美しい美禰子の代表する近代化の世界である。その三つの世界の中で、美禰子のいる第三の世界が、三四郎にとって「最も深厚な世界」であった。美禰子に対する三四郎の追求のいきさつは、作品に表現される近代化問題への理解に深く関連していると伺える。

作中人物の広田先生は、「利他本位の内容を利己本位でみたす」「偽善を行うに露悪をもってする」「露悪家」(P166) として美禰子の正体を評した。秋山公男はすでに論証しているが、「黒ん坊の王族が英国の船長にだまされて、奴隷に売られて、非常に難儀をする事」を描いたアフラ・ベーンの『オルノーコ』について、与次郎が「黒ん坊の主人公が必要なら、その小川君でもいいじゃありませんか。九州の男で色が黒いから」(P98) と冗談らしく美禰子に薦めたのは、三四郎を「奴隷一虜」にする美禰子の魅惑性と「露悪」性を暗示している¹¹⁷。そして、美禰子は「迷える子」の英訳「ストレーシープ」を三四郎に教え、二匹の羊を画いた絵葉書を送り、好意を示すように金を仕立て上げ、展覧会で三四郎を使って野々宮を愚弄した。広田先生の批判は美禰子のイメージと一致し

¹¹⁷秋山公男「『三四郎』小考—「露悪家」美禰子とその結婚の意味—」(『日本近代文学』24, 1977. 10) 『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社, 1995, P120-123




ている。一方、美禰子が三四郎を利用したのは、実際に野々宮との結婚問題が関わっている。美禰子は最後に、よし子の婚約相手であるはずの兄の友人を結婚相手にした。「黒い帽子をかぶって、金縁の眼鏡を掛け」、「背のすらりと高い細面のりっぱな人」、里見恭介の友人は、秋山公男、中山和子の指摘のように、「第三世界の実業家」¹¹⁸、「ブルジョア社会の成功者」¹¹⁹である。「白い雲はみんな雪の粉」(P90)、「高く飛ぼうというには、飛べるだけの装置を考えたいえでなければできない」(P111～113)という野々宮の実際的思考に対して、「雲は雲でなくっちゃいけないわ」(P90)、「そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかもしれません」、「なんだかつまらないようだ」(P111～113)と、美禰子が反論を下し、そして「学問をする人がうるさい俗用を避けて、なるべく単純な生活にがまんするのは、みんな研究のためやむをえないんだからしかたがない。野々宮のような外国にまで聞こえるほどの仕事をする人が、普通の学生同様な下宿にはいつているのも必竟野々宮が偉いからのことで、下宿がきたなければきたないほど尊敬しなくってはならない」(P157)と言ったのは、学者の貧しい生活に甘んじる野々宮に対する非難と蔑視を示すためである。美禰子の結婚は、本当は萬田務の捉えたような「家族制度という封建的な仕組み」¹²⁰で兄の結婚に際して強いられた結婚ではない。学問の世界に潜り込んで貧しい生活に甘んじる野々宮に対する不満が、野々宮を選ばない原因である。「美禰子さんはそれよりずっと偉い。その代り、夫として尊敬のできない人の所へははじめから行く気はない」(P272)という三四郎に対する与次郎の慰めは、美禰子への揶揄である一方、三四郎が美禰子の望む相手に合わないことを提示した上で、野々宮が美禰子との結婚を拒否したのではなく、野々宮が美禰子の望みに合わないで振られたということを示している。

そういう美禰子の正躰と三四郎の近代化憧憬との関連は、三四郎が金を取りに美禰子の家を訪ねた一場面に連結する。「三四郎がなかば感覚を失った目を鏡

¹¹⁸注 117 と同じ論文資料、P124

¹¹⁹中山和子「「三四郎」一片付けられた結末一」(『別冊国文学 14 夏目漱石必携 II』1982. 05) 『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社、1995、P181

¹²⁰萬田務「「三四郎」への一視点：その文明批評的側面」『大阪城南女子短期大学研究紀要』11, 1976. 11, P18



の中に移すと、鏡の中に美禰子がいつのまにか立っている、「美禰子は鏡の中で三四郎を見た。三四郎は鏡の中の美禰子を見た。」(P184) 三四郎のしている美禰子の虚像、そして虚像の美禰子のしている三四郎という構図¹²¹から、二重の意味が見い出せる。まず、広田先生は「君もその露悪家の一人」と三四郎を論じ、美禰子を自意識の強い「イブセンの女」(P135) と称して、「男も女もイブセンのように自由行動を取らないだけだ。腹のなかではたいていかぶれている」(P137) というように述べた。与次郎はさらに「イブセンの人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじゃない。今の一般の女性はみんな似ている。女性ばかりじゃない。いやしくも新しい空気に触れた男はみんなイブセンの人物に似たところがある。」(P137) と付け加えた。「——自分はそれほどの影響をこの女のうえに有しておる。——三四郎はこの自覚のもとにいっさいの己を意識した。けれどもその影響が自分にとって、利益か不利益かは未決の問題である。」

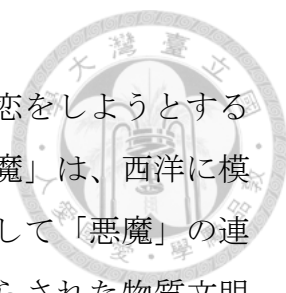
(P237) という考え方から分かるように、美禰子への追求の最後に、三四郎は自分の利己性と自意識を認識するようになった。それは三四郎が鏡像を見ているように自分と似ている人に出会ったということを示している。それから、第二の意味は、美禰子と三四郎の相似性に基づいている。「その縁に羊を二匹寝かして、その向こう側に大きな男がステッキを持って立っているところを写したものである。男の顔がはなはだ獰猛にできている。まったく西洋の絵にある悪魔を模したもので、念のため、わきにちゃんとデビルと仮名が振ってある。」

(P128) この絵葉書の構図は、クリスチャンである美禰子の信仰に関連して聖書の寓話¹²²を引用したものである一方、聖書の意味である神の愛よりも、『三四郎』において別の意味として使われている。美禰子と三四郎のことを象徴する

「羊」は、「西洋の絵にある悪魔」によって連れ去られた。精神の愛よりも「第三の世界」の物質享受を選び、「金なんぞ……」(P240)、「我はわが愆を知る。わが罪は常にわが前にあり」(P281) と、自身の罪に気付かずにいられない神経

¹²¹筆者の拙い発表「『三四郎』—西洋化社会の中の「迷羊」—」(『比較日本学教育研究センター研究年報 第9号』)では、鏡の中の虚像を美禰子の心理に対する三四郎の表像認識として捉えたが、ここで新たな意味に修正していきたい。それだけでなく、「迷羊」の概念を含めて、本論文における『三四郎』論は、発表稿を見直した部分が多い。

¹²²新約聖書マタイ伝第十八章及びピルカ伝第十五章、神の愛の寛大さを説く寓話である。




の鋭い「文明人種」の美禰子のことと、物質文明に憧憬して恋をしようとする三四郎のことから見れば分かるように、西洋の絵である「悪魔」は、西洋に模倣し国家資本主義を発展する日本の近代化の象徴であり、そして「悪魔」の連れ去った「ストレーシープ」は、国家資本主義の発展でもたらされた物質文明に魅せられ、迷子になった美禰子と三四郎のことを象徴している。

「迷える子のなかには、美禰子のみではない、自分ももとよりはいつていたのである」(P128) というように、自分を美禰子の仲間だと思って密かにうれしがっていた三四郎は、最後に美禰子に翻弄される運命を辿った。作品の結末では、野々宮がとうに済んだ美禰子の披露宴の「招待状を引き千切って床の上に棄てた」、そして三四郎が「森の女と云う題が悪い」と言って「ただ口の中で迷羊、迷羊と繰り返した」(P284) という場面が描かれている。野々宮の行為が鬱憤晴らしであるのに対して、三四郎のほうは自分の迷妄に裏切られて、途方の知れない無力さを示している。鏡で三四郎の見た美禰子の虚像は、まさに彼の文明憧憬の空洞さを示している。漱石は、講演「現代日本の開化」(明治44年、和歌山)の中で、物質文明を重んじる日本の開化を、「皮相上滑りの開化」¹²³を称している。『三四郎』という作品は、まさに物質文明に憧憬して美禰子を追求して幻滅したリアリズムの表現によって、明治社会の近代化に対する批判を示し、漱石の近代化批判に繋がっている。

二、「新しき西洋」と「古き日本」の問題

広田先生は、「古い寺の隣の杉林を切り倒して、きれいに地ならしをした上に、青ペンキ塗りの西洋館を建てている。広田先生は寺とペンキ塗りを等分に見ていた。」「時代錯誤だ。日本の物質界も精神界もこのとおりだ。君、九段の燈明台を知っているだろう」、「こんなに古い燈台が、まだ残っているそばに、偕行社という新式の煉瓦作りができた。二つ並べて見るとじつにばかっている。けれどもだれも気がつかない、平気である。これが日本の社会を代表しているん

¹²³夏目漱石「現代日本の開化」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫、2009、P557



だ」(P72-73)と、明治社会の近代化を批判している。「九段の燈明台」¹²⁴は、招魂社として創建された靖国神社のために献燈として明治四年に建てられた和洋折衷の建築であるのに対して、「九段偕行社」は陸軍将校の集会所・社交場・迎賓館として建てられた西洋建築である。広田先生の批判について、吉田孝次郎は「一は未開封建的な信仰心につながる様式他は文明社会の生み出した様式を意味し、「時代錯誤」とは両者が軍国主義的目的の下に結合奉仕させられ利用されている社会の精神年齢十二歳の未成熟さを意味した」¹²⁵と解説している。その解説から見られるように、『三四郎』は物質文明を重んじる近代化の問題を批判するだけではない。三四郎が与次郎に引っ張られて参加した学生の会合で聞いた「髭の男」の講演はこのような内容を示している。「我々は古き日本の圧迫に堪ええぬ青年である。同時に新しき西洋の圧迫にも堪ええぬ青年である」「文芸は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根本義に触れた社会の原動力である。」(P144)「新しき西洋」は国家資本主義のもたらした物質文明の発展であるのに対して、「古き日本」は社会体制に残存している封建性の問題に関連している。

『三四郎』は青年知識人が古い田舎の世界から近代化の都市に向かう時代背景を描き出しているため、内田道雄は三四郎の造形を「上京する青年」¹²⁶の系列に捉え、前田愛は「故郷を喪失して浮遊する知識人の象徴」¹²⁷と捉えている。上京知識人という造形は、明治四十年代の自然主義運動が、「真」を見詰める客観主義を強調する田山花袋や島崎藤村を代表として、日本の農村的社會構造を中心に、農村の封建性、上京知識人の自意識、旧家の問題¹²⁸を中心に描いている。熊本育ちの三四郎の頭の中で形成した第一と第三の世界は、「農村—都市」の構

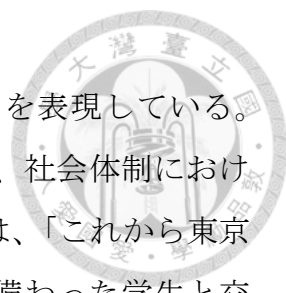
¹²⁴佐藤俊樹「社の庭—招魂社-靖国神社をめぐる眼差しの政治」(『社會科學研究』57(3/4)東京大学総合文化研究科2006-03, P171-173)は、「九段坂上」の燈明台を提起し、「燈明台は戦前前半期招魂社-靖国神社を象徴する建造物であった」と指摘した。

¹²⁵吉田孝次郎「漱石三部作の世界」(『文学』1945)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社, 1995, P17

¹²⁶内田道雄「『三四郎』論—上京する青年—」(『国文学言語と芸術』1971.03)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社, 1995, P77

¹²⁷前田愛「明治四十年代の青年像—『三四郎』論—」(『国文学』16.12臨時号1971.03)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社, 1995, P91

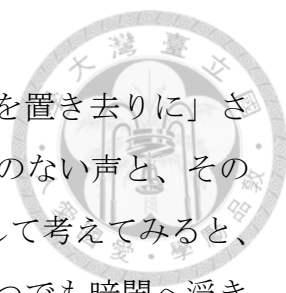
¹²⁸相馬庸郎『日本自然主義再考』八木書店, 1981, P19-24



造を示すだけでなく、古い社会と文明開化の社会に跨ることを表現している。『三四郎』はまさに自然主義の取り扱っていた題材を借りて、社会体制における新旧混雑の側面を書き表している。そして、三四郎の上京は、「これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性の備わった学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母がうれしがる」(P14) という立身出世の動機があった。めまぐるしい文明社会の象徴である美禰子に出会った後も、「要するに、国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問にゆだねるにこしたことはない」(P81) と考えていた。勝又浩が「父のない子は広い世間に範を求めて己れの倫理を確立する必要」¹²⁹と提起したように、三四郎の立身出世の願望は父権体制と深く関わっている。その中には特に封建思想の残存が見られる。「熊本より東京は広い。東京より日本は広い」、「日本より頭の中のほうが広いでしょう」(P21) 汽車の中で出会った広田先生が三四郎を諭したその言葉は、まさに三四郎のことを旧社会に属す狭い考え方の持ち主と提示している。「古き日本」の意味は、社会体制に残存している封建性、特に父権体制に関連している。

父権体制に立脚して、近代教育を受け、皮相な文明憧憬を抱き、日露戦争の勝利で「これから日本も段々発展する」と信じる明治の青年、小川三四郎はまさにまさに国民国家統合とそれにともなった近代化を発展した明治社会の側面を反映している。それに対して、三四郎と汽車に乗り合った「汽車の女」は、夫が国内の不況のため、「大連へ出稼に行」って便りがなくなっていった境遇を述べた。そして、「汽車の女」の聞き手の爺さんは「いったい戦争はなんのためにするものかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんなばかげたものはない。世のいい時分に出かせぎなどというものはなかった。みんな戦争のおかげだ」(P6-7) と、戦争批判を示していると同時に、子どもが徴兵されて戦死されても苦しい生活が続ける庶民の本音を言い出していた。三四郎が野々宮の留守番をした時にも、「汽車は右の

¹²⁹勝又浩「明治文学と父の消去、父の復権」(『国語と国文学』1988.08)『夏目漱石反転するテキスト』有精堂, 1990.04, P105



肩から乳の下を腰の上まで美事に引き千切って、斜掛けの胴を置き去りに」された「轢死の女」は、「その顔と「ああああ……」と言った力のない声と、その二つの奥に潜んでおるべきはずの無残な運命とを、継ぎ合わせて考えてみると、人生という丈夫そうな命の根が、知らぬまに、ゆるんで、いつでも暗闇へ浮き出してゆきそうに思われる。」(P54) というような自殺事件が起こった。社会の不況によってもたらされた命の不安、それに伴う「死」の匂いの漂う世界という、日露戦争後の明治社会の深刻な不況を描写している作品の暗い基調に関して、漱石は『三四郎』を構想する段階で、一般平民や文士の不幸な死の消息を明治四十一年初夏以降の断片¹³⁰に集中的に記録し、フランスにおける日本の外債について、「日本ハ已ヲ得ズ日露協約ノ相談ヲ持チ出シテ辛ウジテ外債ヲ募リ了ル」¹³¹と書きとめ、社会不況の原因と日露戦争の関連性を認識していた。『三四郎』に漂う社会不況への描出は、まさにその認識に基づいている。それに対して、「切実に生死の問題を考えたことのない男である。考えるには、青春の血が、あまりに暖かすぎる」、「人の文章と、人の葬式を余処から見た」(P54) 作品の中で三四郎のことは語り手によってそういう社会問題の深刻さと対置されている。語り手によるその対置は、三四郎の文明憧憬に繋がる恋の幻滅への作品の表現とともに、国民国家統合とそれにともなった近代化に対する作品の批判の意図を示している。その点で、「イプセンの女」、美禰子の役割は単純に「露悪家」として批判されるべき存在よりも、むしろ親権思想をもって立身出世を求め、物質文明に憧憬した三四郎が弄ばれると描いている作品の中で、物質文明と実利主義に近代化社会に生息する自覚的な文明人として、国民国家統合とそれに伴った近代化における価値観の崩壊に導く役割を果たしていると捉えられる。

¹³⁰夏目漱石「明治41年初夏以降の断片」『漱石全集第二十五巻』岩波文庫、1957、P34-50
断片の中では、「汽車の女」、「大学の構内」、「三四郎」といったキーワードが書かれてある。

¹³¹注130と同じ資料、P36

第三節 『それから』—国家近代化から離反する近代人



一、 代助の姦通心理に見られる資本主義と父権体制への反抗

漱石の『それから』（明治 42. 6. 27～10. 14「朝日新聞」）は、喰うための職業を軽蔑し父兄の経済力に依存する高等遊民の長井代助が、友人の平岡の妻で生活に苦しんだ三千代と再会し、三千代との過去を回想していくうちに愛の存在を確かめ、父の企んだ政略的結婚を拒み、平岡から三千代を奪うことを決意した結果、父兄から経済的援助を断たされ、苦しい世の中に飛び込んで職業を探しにいく結末を迎えたことを物語っている。

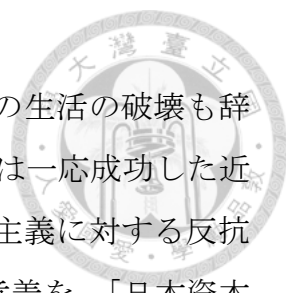
『それから』は『三四郎』の後身とされてきた一方、代助の高等遊民の造形によって批判的に捉えられる傾向がある。しかし、近代化批判を示した代助を、近代化問題を思考しない三四郎と同一視し、三千代に対する代助の感情を「利他的な利己主義」¹³²と捉えたり、姦通の過程について一人の高等遊民の悲惨の結末¹³³のみに注目したりするのは、人物心理を克明に描いている『それから』の伝えようとする時代的意義を見落とししかねない。「姦通は一篇の重要なテーマにちがひないが」¹³⁴と述べた亀井勝一郎は、『それから』を論じるに当たって、姦通問題における「代助の知性の実験」に注目した。猪野謙二は「観念臭の濃い、いわば心理主義的な道德小説」として『それから』を捉え、「一個の生きた典型」、「審美的倫理的な人間から社会的な人間へ」¹³⁵と、代助の人物造形の時代的意義

¹³²重松泰雄「夏目漱石一起点としての「それから」を中心に—」（『日本近代文学』17集，1972. 10）『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04，P88）は、「自己」の中味を抜きにした「利己主義」者へと移り、さらに、最後は「露悪家」のまま、三千代との間に「純一無雑」な愛を交わすという、新しい「偽善」の行為に進み出て、いわば利他的な利己主義者に転成する」と捉えている。

¹³³熊坂敦子『『それから』—自然への回帰—」（『日本近代文学』10集，1973. 03）『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04，P63-74）は、代助の姦通を「自己の生命のために」、「恋愛を契機として次第に生命の高ぶりを積み重ね」たが、「現実生活への定着を見ないままに終わり、結果はまことに惨澹たるものであった」と批判した。

¹³⁴亀井勝一郎「長井代助—現代文学にあらはれた智識人の肖像—」（『群像』6巻2号，1951，02）『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04，P14

¹³⁵猪野謙二『『それから』の思想と方法』（『岩波講座文学の創造と鑑賞』一卷，1954. 11）『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04，P18、P25



を捉えた。高橋和己は、さらに「何らかの理念のために自らの生活の破壊も辞さない」と代助の造形を提起した上で、「国家的規模においては一応成功した近代を、内部批判すべき時代」で「明治の資本主義および官僚主義に対する反抗として長井代助を創り出す」と述べ、代助と三千代の姦通の意義を、「日本資本主義の矛盾の激化」¹³⁶の象徴である父権社会への反抗と指摘した。そして、高橋論の延長として、飛鳥井雅道は、代助と父の対立をブルジョワ父権社会の中の父子対立¹³⁷と捉え、大岡昇平は代助の姦通行為を「父の政略結婚強制の拒否によるブルジョアのエゴイズムの摘発」¹³⁸と捉えた。ここでは、高橋、飛鳥、大岡の指摘に踏まえながら、象徴論の視点から脱して、代助の姦通心理をさらに掘り下げ、資本主義と父権体制に対する代助の反抗の意図を明示していきたいと考えられる。

代助の父、長井得は、「儒教の感化」、「維新前の武士に固有な道義本位の教育」のもとで、子どもと親の「骨肉の恩愛」を固く信じ、よく旧藩主への忠誠心を持ち出し、「誠実と熱心」、「誠者天之道也」や国家への義務を代助に談義していた。「自分が代助に存在を与えたという単純な事実が、あらゆる不快苦痛に対して、永久愛情の保証になると考えた親爺は、その信念をもって、ぐんぐん押しで行った」¹³⁹ (P31) ように、長井得は代助に強迫的に自分の価値観を受け入れさせようとした。それで、代助も「已を得ず親爺という老太陽の周囲を、行儀よく回転する様に見せている」(P34) ようになった。酒井英行は「我が利益の凡てを犠牲に供して他の為に行動せねば不徳義である」という「義侠心」から三千代を平岡に譲ったのである。代助が父の「太陽系に属」していて、「模範的道德」「ロマンチックの道德」(『文芸と道德』) 下に成長したからである。¹⁴⁰と指摘した。確かに、「双互の為に口にした凡ての言葉には、娯楽どころか、常

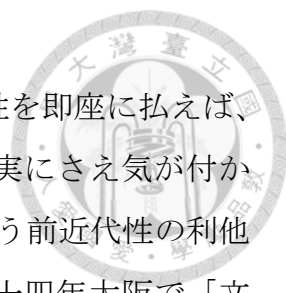
¹³⁶高橋和己「知識人の苦悩」(『高橋和己全集』13巻1978.05河出書房)『漱石作品論集成第六巻それから』1995.04, P49-62

¹³⁷飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』晶文社, 1970, P46

¹³⁸大岡昇平「姦通の記号学—『それから』『門』をめぐる—」(『小説家夏目漱石』1988.05)『漱石作品論集成第六巻それから』1995.04, P152

¹³⁹夏目漱石『それから』新潮文庫, 2002

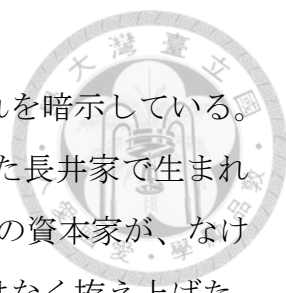
¹⁴⁰酒井英行「自然の昔—『それから』論—」(『国文学研究』82集, 1984.03)『漱石作品論集成第六巻それから』1995.04, P164



に一種の犠牲を含んでいると確信していた。そうしてその犠牲を即座に払えば、娯楽の性質が、忽然苦痛に変わるものであると云う陳腐な事実さえ気が付かずにいた。」(P18) という代助と平岡の友情は、自己犠牲を払う前近代性の利他本位の精神に成り立っている。それに関して、漱石は明治四十四年大阪で「文芸と道德」の講演を行い、「ロマンチックな道德」をこのように批判した。「昔の道德すなわち忠とか孝とか貞とかの字を吟味してみると、当時の社会制度にあつて絶対の権利を有しておった片方にのみ非常に都合の好いような義務の負担に過ぎないのであります。親の勢が非常に強いとどうしても孝を強いられる。強いられるとは常人として無理をせずに自己本来の情愛だけでは堪えられない過重の分量を要求されるという意味であります」¹⁴¹長井得という人物造形は、まさに「模範的道德」「ロマンチックの道德」、すなわち親権思想を残存させた父権体制の存在を表現している。そして、そういう前近代的な父権体制の影響は代助と平岡などの明治の青年たちに深い影響を及ぼしていると伺える。代助はそういう父権体制の中で、恋していた三千代を平岡に譲り、道義慾を買いつつ自己の愛まで押し殺してしまっていた。それで、「三十になるか、ならないのに既に nil admirari の域に達してしま」(P25) い、「餓えたる行動は、一気に遂行する勇氣と、興味に乏しいから、自らその行動の意義を途中で疑う様になる」(P151) ように、行為に出られない苦しみを抱え、アンニュイの文明病に罹っていた。作品の冒頭において、平岡の端書が父の手紙とともに、代助の書齋に送られていた場面描写は、今まで作品の筋に関わる描写¹⁴²だと指摘されてきたが、その二通の手紙を読んで三千代の写真を見つめた代助の行為に暗示されているのは、三千代の上京というきっかけで、代助がいかにその前近代の利他本

¹⁴¹夏目漱石「文芸と道德」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫、2009、P605

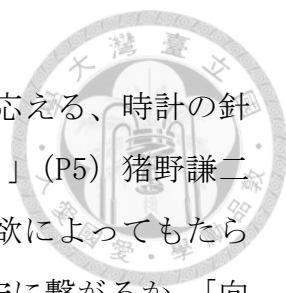
¹⁴²斎藤英雄「「真珠の指輪」の意味と役割—『それから』の世界—」(『日本近代文学』29集、1982.10)『漱石作品論集成第六巻それから』1995.04、P133)は、題名の「それから」の意味を「結婚してから」の意味と指摘した上で、平岡の「「端書」を「それから」以前の世界が「それから以後」の世界へ接近したことを告げる先触れの役割を果たしている」と捉えた。浜野京子「<自然の愛>の両儀性—『それから』における<花>の問題—」(フェリス女子学院大学「玉藻」19号、1983.06)『漱石作品論集成第六巻それから』1995.04、P141)は、代助のところにやってきた二通の手紙の意味を、「平岡からの葉書は代助に三千代への愛をもたらし、父からの封書は「物質的供給の杜絶」がかかっている縁談をもたらす」と捉えた。



位の教育の束縛に立ち向かっていくか、という作品全体の流れを暗示している。

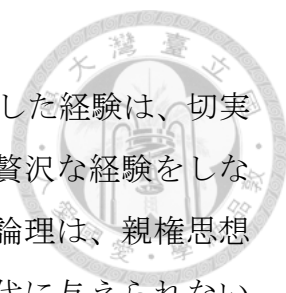
明治初年に横浜への移住奨励でもらった土地で成金となった長井家で生まれ育った代助は、「東京市の貧弱なる膨脹に付け込んで、最低度の資本家が、なけなしの元手を二割及至三割の高利に廻そうと目論で、あたじけなく拵え上げた、生存競争の記念であった」(P79) という近代化の社会を観察し、父の利欲心も観察していた。「今利他本位でやってるかと思うと、何時の間にか利己本位になっている」(P34)、「御父さんは論語だの、王陽明だのという、金の延金を呑んでいらっしゃるから、そういう事を仰しゃるんでしょう」(P38)、「父は実際に於て年々この生活慾の為に腐蝕されつつ今日に至った」、「父は自己を隠蔽する偽君子か、もしくは分別の足りない愚物か、何方かでなくてはならない」(P122) 代助の観察したそういう父の存在は、資本主義国家を築き上げていく中で、資本主義の喚起した利己心に無自覚なままで、誠実、尊重と理解をもって個人性を重視しなく、封建時代の道徳を繰り返す近代化の中の明治社会の一側面を反映している。「自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感応性に対して払う租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である」父の偽りへの不満と利他本位の虚偽は、代助により一層自身がその中に組み込まれている事実を自覚させた。さらに、三千代の上京をきっかけに、代助は「真鍮を以て甘んずる様になった」、「全く彼れ自身に特有な思索と観察の力によって、次第々々に鍍金を自分で剥がして来たに過ぎない」(P83) ように、父の仕込んだ利他本位の教育から抜け出そうとする意識が芽生えた。

作品の冒頭に椿と代助の心理に関するこのような描写がある。「枕元を見ると、八重の椿が一輪暈の上に落ちている。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が静かな所為かとも思ったが、念のため、右の手を心臓の上に乗せて、肋のはずれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。」「寝ながら胸の脈を聴いてみるのは彼の近来の癖になっている。動悸は相変らず落ち付いて確に打っていた。彼は胸に手を当てたまま、この鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流



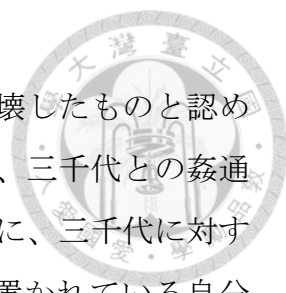
れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に应える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘の様なものであると考えた。」(P5) 猪野謙二と浜野京子は、椿の象徴義を三千代に対する代助の恋愛と性欲によってもたらした生の不安¹⁴³と捉えている。しかし、恋愛と性欲がなぜ不安に繋がるか、「向後父の怒に触れて、万一金銭上の関係が絶えるとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に噛り付かなければならない。そうしてその償には自然の愛が残るだけである。その愛の対象は他人の細君であった。」(P190) という代助の心理を見れば分かるように、三千代への愛は不倫関係に繋がり、そしてずっと経済的支援で生活を支えてくれている父親の代表する父権体制の道徳を破って、安定な生活を失う不安に繋がっている。『それから』の落ちる椿の意味は、資本主義と結合した父権体制と衝突した那美の不幸を象徴した『草枕』の落ちる椿からの意味の継承があると伺える。森田草平の『煤煙』における要吉と朋子の心中事件を読んで、代助が「ああいう境遇に居て、ああ云う事を断行し得る主人公は、恐らく不安じゃあるまい。これを断行するに躊躇する自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は独りで考えるたびに、自分は特殊人だと思う」(P75) ように懷疑したのは、姦通によって生活の経済的基盤を失う自分の中に発見した恐れが、『煤煙』の描写に見られないことを示している。代助は父の道徳の影響から離脱して三千代を愛する自己を抱擁しようする一方、労働社会の中で生存競争の犠牲者になりたくない彼自身のジレンマを指している。情欲が不安に繋げられるのは、それが道義性への反逆とともに、

¹⁴³猪野謙二『『それから』の思想と方法』(『岩波講座文学の創造と鑑賞』一卷, 1954. 11) 『漱石作品論集成第六卷それから』1995. 04, P18-19) は、代助の不安を椿のイメージを作品の中で出た植物に関連し、「八重椿、アマランス、薔薇、百合、鈴蘭、擬宝珠、君子蘭——目覚めた青春にのみふさわしい生の不安と恐れ、性的な情緒や切迫した恋愛心理を、漱石はこの作品で、これらの花々の色と香とを媒介にしながら、きわめて象徴に描いてゆく」と捉えた。それを踏まえて、浜野京子「<自然の愛>の両儀性—『それから』における<花>の問題—」(『漱石作品論集成第六卷それから』1995. 04, P143) は、「鈴蘭には幸福の再来という意味があり、また、死の意味もある。百合は代助と三千代の思い出の花であるが、同時に罪の意味を持つ。アマリリスはこの二つの花が持つそれぞれの両儀的意味を全て包摂したものなのである。アマリリスの外見そのものにも、赤い色と百合の形とにその両儀性が表されており、不安の色ではあるが、それ以上に三千代との愛を示す百合に通ずる期待がある」というように、代助の不安における情欲の存在を論証した。



生活の経済基盤の喪失を意味しているのである。「麵麩に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麩を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくっちゃ人間の甲斐はない」(P22) という代助の高等遊民の論理は、親権思想と衝突することができない自己の臆病さと、経済基盤を三千代に与えられない負い目の現れとして見受けられる。その上で、代助にもっとも不安を感じさせるのは、実際に利他本位を掲げる父権体制に反抗し、平岡を裏切ることによって、自身の嫌っている父のような利己本位の人間になることである。「二個の相容れざる願望嗜欲が胸に闘う」(P151)、「自然の児になろうか、又意志の人になろうか。」(P211) と考えた代助の心理は、父権体制における虚偽のような利他本位で形成した平岡と三千代との関係を打破しようとし、平岡との信頼関係に傷を与えてしまうエゴイズムの発生を恐れる閉塞感を示している。

一方、「現代の社会は孤立した人間の集合体に過ぎなかった」、「泰西の文明の圧迫を受けて、その重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為泣き得るものに、代助は未だ曾て出逢わなかった」(P119)、「代助は人類の一人として、互を腹の中で侮辱する事なしには、互に接触を敢てし得ぬ、現代の社会を、二十世紀の墮落と呼んでいた。そうして、これを、近来急に膨張した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促がしたものと解釈していた。又これをこれ等新旧両慾の衝突と見做していた。最後に、この生活慾の目醒しい発展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得ていた。」(P121)、「現代の日本に特有なる一種の不安に襲われ出した。その不安は人と人との間に信仰がない原因から起る野蛮程度の現象であった。」(P133) 日露戦後の商工業膨張の反動から事業を救うために、政略結婚で息子を多額納税者の佐川の令嬢に縁を結ばせようとする父の露骨な利己心と虚偽の道徳に圧迫されてきた自分自身のことを含めて、代助は「生活難に苦しみつつある三千代をただの昔の三千代よりは気の毒に思った」(P197) ように、平岡の利己心に苦しまれる三千代のことを見詰めていた。「自分の影を、犬と人の境を迷う乞食の群の中に見出した」(P255) ように、あれほど自分の落ち零れを恐れた代助が、最後に高等遊民の論理を修正し、「天意には叶うが、人の掟に背く恋」(P211) を選び、「腹の中で今までの我を冷笑」



し、「どうしても、今日の告白を以て、自己の運命の半分を破壊したものと認め
たかった」(P224) ように、利己の事実への恐れを受け入れて、三千代との姦通
を決行したのは、『草枕』に表現された「憐れ」の感情のように、三千代に対す
る同情心が働いている上で、近代化社会への観察、その中に置かれている自分
の運命、及び三千代と平岡の関係への観察によるものである。

代助は「社会の習慣に対しては、徳義的な態度を取る事が出来なくなった」
道徳の「登攀者」となり、「今日始めて自然の昔に帰るんだ」(P228) と思って
三千代との姦通に踏み出した。「平生の自分から生れ変わった様に父の前に」(P252)
現れた代助は、三千代のために、「愛の刑と愛の賚」を共有し、三千代に生きさ
せる責任に悩み、「自然に復讐を取られ」る覚悟をしたように、自らエゴイズム
の罪人になるまでも、近代化社会における資本主義と父権体制への反抗を試み
ようとしている。代助の姦通は、近代化に築きあげられた資本主義、そして資
本主義の支配を深めた父権社会の旧い道義性の両方に対する反抗の意図を示し
ている。

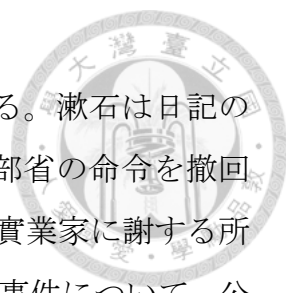
二、 国民国家統合に対する反動の暗示

前掲高橋和己の論点に提起されている代助の姦通による国家近代化への批判
は、近代国家の夫婦制度への対抗において論じられたものである。興味深いのは、
作品に取り入れられている高商騒動、日糖事件、大倉組問題、幸徳秋水の
社会主義運動といった時事と代助の姦通心理との関連性である。

高商騒動は、1909年に日本文部省が高等商業学校を廃校にして東京帝国大学
のうちに置くことが原因で生徒の抗議を招いた騒動¹⁴⁴であり、そして、日糖事
件は、明治政府がわざわざ日糖会社の破綻の事情を隠蔽して、衆議院議員を賄
賂した不正案¹⁴⁵である。また、大倉組問題は軍需品輸入会社の大倉組商会在日

¹⁴⁴「商科大学問題の運動」「朝日新聞縮刷版」1909年4月20日（朝日新聞記事データベ
ース）

¹⁴⁵「日糖事件（大石正巳氏の談）」「朝日新聞縮刷版」1909年4月20日（朝日新聞記事デー
タベース）



清戦争の時に軍隊に納めた牛を盗んで売り返す不正事件である。漱石は日記の中で、特に高商騒動について、生徒のために仲裁に入って文部省の命令を撤回させる実業家の澁澤榮一を大いに非難¹⁴⁶し、「明治の日本人は實業家に謝する所なかるべからず」¹⁴⁷と、資本主義の発展を皮肉し、そして日糖事件について、公務員の代議士への不満をもらした¹⁴⁸。『それから』の中で、代助は高商騒動について、早稲田大学の校長である大隈重信が生徒に味方¹⁴⁹をしたのを、生徒を早稲田に呼び寄せるためだと解釈し（P76）、都市商業資本家と知識人の連携によって国家資本主義を中心目標とし、政治の改良と法律の前進を進もうとした大学の方針を指し示した。そして、代助は大倉組問題を「現代的滑稽の標本」（P203）と称し、国家による近代化への諷刺を示している。さらに、代助の父の会社が日糖事件の余波を受けたように配置された上で、父の政略結婚を裏切った代助の姦通が描かれている。国家資本主義の発展と国家権力との間の分裂と競合関係、さらに国家権力による資本主義の掌握に対する漱石の批判と代助の認識が見合っているのみならず、近代化社会への観察として資本主義と父権体制に反抗する代助の姦通心理も、国家権力への批判に繋がっていると伺える。

その上で、資本主義と父権制度の規範的道德の支配にぶつかる代助の命の不安は、「アンドレーフの「七刑人」の最後の模様を、此所まで頭の中で繰り返してみ、ぞっと肩を縮めた」、「生の欲望と死の圧迫の間に、わが身を想像して、未練に両方に往ったり来たりする苦悶を心に描き出しながら凝と坐っている」（P47）というように、アンドレーフの『七刑人』と結びついている。『それから』の創作の前から、漱石は弟子の小宮豊隆を通してロシア社会主義作家アンドレーエフの文学に接触していた¹⁵⁰。それに関して、「漱石が大逆事件以前から


¹⁴⁶夏目漱石「明治42年4月25日日記」『漱石全集第二十五巻』岩波書店、1957、P69

¹⁴⁷夏目漱石「明治42年5月24日日記」『漱石全集第二十五巻』岩波書店、1957、P77

¹⁴⁸夏目漱石「明治42年4月16日日記」『漱石全集第二十五巻』岩波書店、1957、P66

¹⁴⁹「大隈伯爵建部博士高商学生評」『朝日新聞縮刷版』1909年5月20日（朝日新聞記事データベース）

¹⁵⁰漱石の明治四十二年の日記、三月十二日「アンドレーフの獨譯ジーベン、ゲヘンクテンの一章を豊隆に讀んでもらふ。」三月十八日「豊隆アンドレーフ論ヲカク」三月十九日「朝小宮豊隆とアンドレーフの獨譯の一章を讀む。」三月二十三日「小宮とアンドレーフを讀む。」三月二十八日「朝小宮が来テ、アンドレーフを讀む。」四月二日「豊隆のアンドレーフ論を



アンドレーフの不安を政治的圧迫から解釈していた」¹⁵¹と提起して、アンドレーフに対する漱石の関心を社会主義と結び付けた藤井省三の論説はよく知られてきた。代助は平岡の提起した社会主義者の幸徳秋水に対する警察の監視に対して、あまり関心と興味を示していない（P203）が、確かに「代助は露西亜文学に出て来る不安を、天候の具合と、政治の圧迫で解釈していた」（P74）というように、「七刑人」の内容が政治の圧迫への表現であると認識している。そして、作品は最後に「三千代以外には、父も兄も社会も人間も悉く敵であった。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺そうとしている」（P287）というように、代助を包む不安の赤を表現した。その不安の赤は、作品冒頭の赤い椿の落ちるイメージを含めて『草枕』の椿のイメージに繋がり、近代人を支配する資本主義と父権社会の道徳に衝突する人間生命の凋落を意味し、ニヒリズムの一面を示している。その一方、社会から追放される代助の不安と政治の圧迫との結びつきは、資本主義と父権体制の支配性を持つ明治社会の体制からの離反を示している上で、全体主義に発展した国家権力からの離反も暗示している。社会の時事を取り入れて、代助の姦通心理と関連させている『それから』は、資本主義と父権体制という近代化社会の現象に対する批判を示すだけでなく、国民国家統合の傾向に対しても批判を示しているのである。

第四節 『こゝろ』－国民国家統合に反抗する「明治の精神」

一、 議論の分かれてきた『こゝろ』の思想性

大正 3. 4. 20～8. 11 に「朝日新聞」に連載された『こゝろ』は、「私」の手記と「先生」の遺書によって構成されている。「先生」ことに対する青年の回想、

讀む。』『漱石全集第二十五巻』岩波書店、1957、P53

¹⁵¹藤井省三『『彼岸過迄』－「自我」の探求とアンドレーエフ文学』（『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』平凡社、第三章「漱石とアンドレーエフ」より、1985. 04）『漱石作品集第八巻』桜楓社、1991. 8. 10、P241



及び叔父に裏切られて人間不信に陥り、下宿先の娘の静への恋で友達の K を裏切って自己のエゴイズムに悩んだ結果、「明治の精神」に殉死を選んだ「先生」の告白を物語っている。

エゴイズムへの苦悩を描いている『こゝろ』の中心思想をなすのは、言うまでもなく道徳への思考である。大正時代において、『こゝろ』は安部能成、小宮豊隆ら漱石の弟子たちによって、人間性の普遍性を描写する人生の道徳的小説¹⁵²と捉えられていた。そして、佐藤泉の指摘によると、1940年頃の大戦期において、東洋道徳の提唱と資本主義の見直しが強調され、漱石は岡崎恵一の「則天去私」神話によって「自然主義＝無思想性・非社会性」との対照である「倫理・藝術複合体」つまり「東洋的精神」という文化的言説」として期待されていた。それによって、「明治の精神」を記した『こゝろ』は、「伝統倫理と公・国家に対する責任意識を保持していた明治人」と主張した江藤淳らの夏目漱石論によってクローズアップされていた¹⁵³。それに対して、大戦後、アジア・アフリカの反帝国主義・反植民主義闘争の動向の中で、「国民文学論」に関与した猪野謙二は、「先生」の社会活動への不参与を国家主義の公的倫理観の範囲内に自ら制限を受ける人格主義の形成にイコールし、『こゝろ』の思想内容を「社会的個人をの否定の上に立つ個人主義」¹⁵⁴と捉え、『こゝろ』と社会の繋がりを低く評価した。一方、戦時中・戦後における戦争協力や戦争への反省という明確なイデオロギー指向の捉え方と異なって、三浦泰生、越智治雄の作品論は、再び人間性の普遍的概念で『こゝろ』の倫理の私的個人性¹⁵⁵を提起し、西成彦はその普遍的概念に踏まえて、「先生」の殉死を乃木殉死の公的概念との乖離¹⁵⁶と指摘した。また、畑有三、野崎守英、佐藤泰正、重松泰雄、三好行雄らは、遺

¹⁵²安部能成「『こゝろ』を讀みて」（「思想」1935.11）『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社、1991、P16、小宮豊隆「『心』」（「漱石の芸術」1942.12）同書、P21

¹⁵³佐藤泉「変動する漱石」『文学季刊』1(2)2000、P47-62

¹⁵⁴猪野謙二「『心』における自我の問題」（「世界」36号1984.12）『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社、1991、P48

¹⁵⁵三浦泰生「漱石の「心」における一つの問題」（『日本文学』13巻5号1964.05）『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社、1991、P60、越智治雄「こゝろ」（『漱石私論』1971.06）同書、P97

¹⁵⁶西成彦「鷗外と漱石—乃木希典の「殉死」をめぐる二つの文学—」（「比較文学」28号1986.03）『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社、1991、P331

書の表した思想を東洋思惟から形成してきた倫理道德¹⁵⁷と捉えたのに対して、小泉浩一郎は「現代日本の開化」と結びつけ、「真に内発的な文化、倫理を追求しようとする文明批判の精神」と、道德観念に込めた文明批判の側面¹⁵⁸を提起した。作品論はそういう様々の視点によって、「明治の精神」の意義を、明治時代への忠誠¹⁵⁹、国民の精神¹⁶⁰、儒教の倫理¹⁶¹、「郷愁としての倫理の残り火」¹⁶²、「和洋折衷の時代を生きる日本人の精神」¹⁶³、無意味の言葉や自殺の言い訳¹⁶⁴などどのように捉えてきた。そして「明治の精神」への「先生」の殉死の意味について、平岡敏夫、佐藤泰正、鳥井正晴はそれを明治という一時代の終焉の象徴¹⁶⁵と捉え、滝沢克己、西成彦は「真実の「自由と独立」」¹⁶⁶で触れ、三浦泰生は「個人主義の精神」¹⁶⁷、小泉浩一郎は「対外的独立の象徴」¹⁶⁸と捉えた。それに対し

¹⁵⁷畑有三「心」（『国文学』10巻10号1965.08）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P65、野崎守英「漱石における自己—『こゝろ』を中心に—」（『実存主義』60号1972.06）同，P171、佐藤泰正「『こゝろ』—〈命根〉を求めて—」（『夏目漱石論』1986.11）同書，P191-193、重松泰雄「Kの意味—その変貌をめぐって—」（『国文学』26巻13号1981.10）同書，P241、三好行雄「『こゝろ』鑑賞」『鑑賞日本現代文学5夏目漱石』1984.03）同書，P302

¹⁵⁸小泉浩一郎「漱石「心」の根底—「明治の終焉」」（『文学・語学』53号1969.09）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P133

¹⁵⁹小宮豊隆の同論述，P22、猪野謙二の同論述，P49

¹⁶⁰丸谷才一「徴兵忌避者としての夏目漱石」（『展望』1969.06）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P123）は、藤村の『破戒』に対する漱石の関心を、漱石の徴兵忌避の自己告白として捉え、「明治の精神」をその後ろめたさで鼓舞した国民精神として捉えている。本研究は「明治の精神」に対するその捉え方に反論する。

¹⁶¹荒正人「『こゝろ』」（『漱石文学全集6巻』解説1971.12）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P153

¹⁶²野崎守英「漱石における自己—『こゝろ』を中心に—」（『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P171、佐藤泰正「『こゝろ』—〈命根〉を求めて—」同書，P190

¹⁶³三好行雄「『こゝろ』鑑賞」『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P301

¹⁶⁴稲垣吾郎「Xさんへの手紙」（『漱石全集』14巻月報13，1966.12）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991，P73、西垣勤「『こゝろ』覚書」（『日本文学』20巻9号1971.09）同書，P141、大岡昇平「『こゝろ』の構造」（『文学界』1973.09）同書，P207、松本寛「『こゝろ』論—〈自分の世界〉と〈他人の世界〉のはざまで—」（『夏目漱石—現代人の原像』1986.06）同書，P275、本研究はそれらの捉え方に反論する。

¹⁶⁵平岡敏夫「『こゝろ』と明治の終焉」『解釈と教材の研究』26(13)，1980，P72、佐藤泰正「漱石探究：『こゝろ』から何が見えて来るか」『日本文学研究』38，2003-02，P64、鳥井正晴「「明治の精神」—その典拠と、漱石の認識」『明治国家の精神史的研究—〈明治の精神〉をめぐって』以文社，2008，P5-55

¹⁶⁶滝沢克己「『こゝろ』」（『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991、西成彦「鷗外と漱石—乃木希典の「殉死」をめぐる二つの文学—」，同書，P35

¹⁶⁷三浦泰生「漱石の「心」における一つの問題」『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，



て、嘉戸一将は明治思想史の研究において、明治天皇という人格化された債権者の死による破綻¹⁶⁹と捉えた。

『こゝろ』に表現されている道德問題、「明治の精神」の意義と「先生」の殉死の意味をめぐって、議論がかなり分かれていると観察できる。『こゝろ』研究においてかなり影響力を持つ以上の観点の中で、特に漱石の「個人主義」に触れた三浦泰生の論点と、文明論に基づいて「対外的独立の象徴」を提起した小泉浩一郎の視点が興味深い。本節はその他の論点への反論を兼ねて、『こゝろ』の内容と、「明治の精神」、「先生」の殉死の意義と、漱石の近代化批判、「個人主義」の関連性を探求していく。

二、資本主義と父権体制への批判に繋がる『こゝろ』の手記と遺書

作品全体で重みを持つ「先生」の遺書は、「利己心の発見」(P238)すなわち人間性のエゴイズムそのものを、「冷かな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きている」「もっと強い物にもっと強く働き掛ける事が出来る」「生きた答え」(P190)であるように、人間性へのリアリズム描写で表現している。人間性に対するリアリズムの描写が、なぜ作品の最後における「明治の精神」の言葉に繋がるかが、『こゝろ』の研究者や思想史の研究者を悩ましてきた問題である。

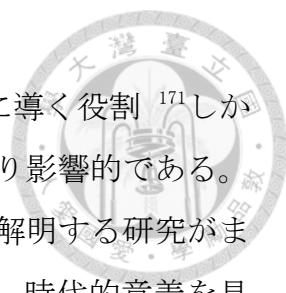
その問題をいかに解くか、まず『こゝろ』をめぐる作品論と構造論の研究手法と作品内容の解読の問題を正視しなければならない。三浦泰生は、作品の内容と精神を克明に分析して作者の背景に繋がらせる作品論で、「先生」と「私」の関係を「精神的親子」¹⁷⁰と捉え、「明治の精神」を「私」に与える意義のある言葉とした。それに対して、のちに発展してきた構造論は作品と作者及びその時代背景の関連性を重視しないまま、作品に書かれた字面から意義を取り全体

1991, P54

¹⁶⁸注 158 と同じ。

¹⁶⁹嘉戸一将「「忠君」と「愛国」—明治憲法体制における「明治の精神」『明治国家の精神史的研究—<明治の精神>をめぐって』以文社、2008, P115

¹⁷⁰注 167 と同じ。



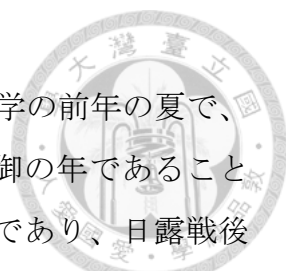
の構造を捉えようとした。青年の「私」の存在を遺書の教訓に導く役割¹⁷¹しかないと捉えた秋山公男の構造論が『こゝろ』研究においてかなり影響的である。それによって、「先生」と「私」の関係から「明治の精神」を解明する研究がまだ十分に展開していないで、押し殺されてしまった。そして、時代的意義を見出せるはずの『こゝろ』は、長い間、形式論と合流した構造論によって無意義なテキストとして解釈されていた。しかし、手記と遺書によって構成されている『こゝろ』において、手記は「先生」の思想に対する尊敬を前提としている一方、遺書はこのように青年の熱意に答える姿勢を示している。「貴方は現代の思想問題に就いて、よく私に議論を向けた事を記憶している。(中略)その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。私はその時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。(中略)私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。」¹⁷²

(P173)「先生」のその自白は、遺書が青年のもっている思想問題に答える役割を提示している。そういう遺書の内容は「先生」の思想に対する尊敬を払う手記によって導き出されている。つまり、手記と遺書という『こゝろ』の構成自体は、明治の思想問題を導き出す役割を持っている。手記と遺書を当分に重視するこそ、構成の次元でも形式論と合流した構造論の制限から脱することができ、「現代の思想問題」を理解し、「明治の精神」の意味に繋がることができる。

「若いうち程淋しいものはありません。なぜ貴方はそう度々私の宅へ来るのですか」(P26)と聞いた「先生」の言葉を通して、手記は、通学先以外の師を求める青年の動機を語りだしている。鎌倉の海辺で、はじめて西洋人連れの「先生」が目に入って、青年は「どうも何処かで見た事のある顔の様に思われてならなかった」(P11)という既視感を抱いていた。その原因は、まず西洋人連れが「先生」も同じく明治時代に生まれ西洋の影響を受けた知識人であることを

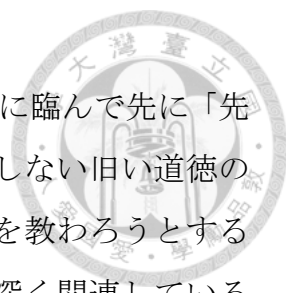
¹⁷¹秋山公男『漱石文学論考—後期作品の方法と構造—』桜楓社、1987、P218

¹⁷²夏目漱石『こゝろ』新潮文庫、2006



示しているところにある。そして、「先生」との出会いが大学入学の前年の夏で、卒業した年が「先生」の遺書を受け取った時で明治天皇の崩御の年であることから推測すれば、青年と「先生」のつきあいは明治末年の頃であり、日露戦後の長く続いた経済不況の時期と重なっている。手記が「個人の別荘は其所此所いくつでも建てられてた」(P8)と語って青年の住んでいた宿と対比したのは、貧富の格差ある世の中を語りだしているのである。そして、手記は西洋化を中心とした立身出世の道を歩みだしていた青年のことを描いている一方、青年の立脚地が明治天皇の病気や乃木大将の殉死のことですっと抱いて来た臣民の倫理観¹⁷³を示した父の代表する父権体制であることも語りだしている。その上で、青年は学校の勉強に目的を感じられなく、卒業証書を取ってもそれを遠眼鏡にしたぐらいに生の茫漠を感じていた。青年の感じた生の茫漠は、手記の語りだしている貧富格差と父権体制の社会と深く関連していると伺える。明治末年の貧富格差をもたらしたのは国家資本主義の発展であり、そして父権体制の社会に根付く問題は明治天皇に対する父の倫理観に見られる封建思想の残存であると伺える。そういう時代の閉塞感に呑み込まれてしまった生の茫漠があるこそ、「ミイラ」のように生きていた「先生」に対する共感が発生したのである。手記は、「現代思想の問題」をまだはっきり認識していなかった青年がいかにも、「その思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった」(P48)というように、自分の生の問いとして「先生」に期待したことを物語っている。そして、青年と「先生」の命の繋がりをこのように述べている。「肉のなかに先生の力が喰い込んでいると云っても、血のなかに先生の命が流れていると云っても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生は又いうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな真理でも発見したかの如くに驚ろいた」(P72)、「もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解っていなかった。(中略)要するに先生は私にとって薄暗かった。私は是非とも其所を通り越して、明るい所ま


¹⁷³ 「両親と私」、夏目漱石『こゝろ』新潮文庫，2006，P114-167



で行かなければ気が済まなかった。」(P137) 父と「先生」の死に臨んで先に「先生」のところに駆けつけた青年の行為は、まさに現代に通用しない古い道徳の父権体制から離れる変革への望みを示している。人生の経験を教わろうとする青年の動機は、国民国家統合とそれに伴った近代化の問題と深く関連していると伺える。

資本主義の潮流と父権体制に閉じ込められて、「私は淋しかった」と青年の生の茫漠を語っている手記に繋がられて、答えを与えようとするのがそのあとに配置されている遺書である。「私の存在に必要な人間になっていた」(P179) 叔父によって財産の略奪を企まれた「先生」は、深い信頼が裏切られたゆえに、「普通のもので金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていた」(P190) と、人間不信の深淵に陥ってしまった経緯を叙述した。そして、エゴイズムは他人にあるだけでなく自分にもあるということを示すために、孤独の境遇に置かれたKを救済心と同情心で下宿に招き入れ、かえてKと静の接近で、静を専有しようとするエゴイズムの感情が募り、何かを失う不安、先走りされる不愉快と恐怖感、Kに対する嫉妬心と負い目に囚われた自己の心理を語り、Kの弱点、すなわち、摂慾、禁欲と恋愛の排除を重んじるその精神的修行の理想と、恋をする本能の衝動への迷いを発見したとたん、Kの弱点に付け込んで自分の利害と衝突しないように向けさせた、というエゴイズムの発見の過程を告白した。叔父の裏切りに関しては、「先生」は資本主義の発展で形成した実利主義と人間不信の問題に直面した経験を語っている。そして、Kに対する裏切りに関しては、叔父の利己心に憤りKを救う利他心に繋がる「先生」の利他本位が自己の利己心と衝突したことの示しているように、「先生」に影響を及ぼしてきた父権体制の利他本位の道徳思想の問題が絡んでいる。

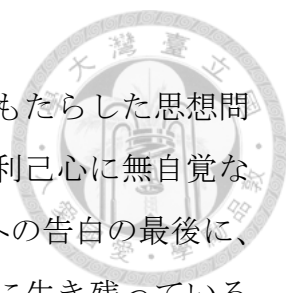
叔父に裏切られた「先生」は、かつて静との出会いの場面において、「異性の匂い」に強く惹きつけられ、「愛に対しては、まだ人類を疑わなかった」(P200～201)「信仰に近い愛」、「本当の愛は宗教心とそう違ったものでない」(P206)、「お嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢



さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました」(P206) というように、恋愛感情を抱いていた。「先生」の恋愛感情における「信仰」は、今まで妻の記憶を純白にしてエゴイズムを隠蔽する精神的潔癖¹⁷⁴として捉えられてきたが、実際に最初に静の単純で恥ずかしげな表情を見て恋に落ちたその視線と心理の変化を観察すれば分かるように、静に対する恋愛感情の「信仰」は、利他本位を信じていた「先生」が人間不信の深淵から、純粋に人間との信頼関係を回復できるきっかけに臨んで発生した感情である。それに対する執着が、Kの介入を排除する行動に繋がる。「恋は罪悪ですよ、よござんですか。そして神聖なものですよ」(P44) という言葉の示すように、かつて恋に生の希望という神聖面を発見したが、今度は親友の自殺で生の欲求に根源するエゴイズムという罪悪面を見つめなければならないように、一体両面の関係を示している。そして、Kの自殺の原因¹⁷⁵は、静に対するKの告白を阻止するために結婚の申し込みを奥さんに出した「先生」への不信よりも、「狼の如き罪のない羊に向けた」「先生」による「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」(P282) という残酷な一言で、「自分で自分が分からなくなってしまった」(P280) こと、すなわち生の信条を失くした混乱と絶望である。「この己は立派な人間だという信念」(P315) という、「先生」のもっていた利他本位の信条も、「人間の胸に装置された複雑な器械」のために、Kに対する裏切りで崩壊を迎えた。「Kが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった」(P318) と、Kのように信条喪失をしみじみに味わった「先生」は、「ミイラ」のように生きるようになった。しかし、その時、自分の思想を求める青年が現れ、「今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したい」(P47) という自己を閉じ込めた茫漠な生を打破するきっかけを「先生」に与えた。

¹⁷⁴押野武志「静に「声」はあるのか—『こゝろ』における抑圧の構造—」『文学』第三巻4号, 1992, P48

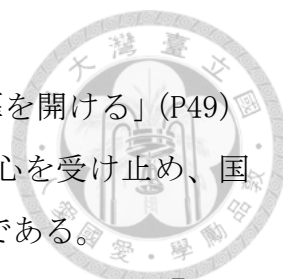
¹⁷⁵Kの死因について、畑有三「心」(『国文学』10巻10号1965.08)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社, 1991, P65)は、「先生」に裏切られて他人を信じられない淋しさ、精神優位観と道に殉じる修養第一主義で挙げているが、「先生」に理想への矛盾を突き詰められた時、Kはすでに「覚悟」を言い出し、上野から帰った夜も襖を明けて「先生」の熟睡を確かめて自殺を図る形跡を示していた。



「先生」による人生経験に関する告白自体は、資本主義のもたらした思想問題を実利主義で提起し、そして父権体制のもたらした問題を利己心に無自覚な利他本位の道徳思想で提起している。そして、その人生経験への告白の最後に、「先生」は「最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました」(P323)と、自分の人生を明治時代に関連させた。「先生」は、まさに自身の過去の生の信条を、エゴイズムに自覚できなく道義本位の優越感に甘んじる明治の時代性の縮図のように捉えている。そして、「先生」は自分の発見したその答えを「自由と独立と己れとに充ちた現代」(P47)を生きている青年に示すには、「明治の精神」への殉死が必然に伴ってくると考えていた。「明治の精神」への殉死は、自分の生きてきた過去の生の信条への否定¹⁷⁶という意味を持っている。そして、「旗」という明治天皇の象徴が旧幕臣との西南戦争で取られてて君臣関係を尽くせなかったという乃木希典の殉死の意味との区別をつけていることから見られるように、「明治の精神」への殉死はエゴイズムに無自覚な道義本位を抱える父権体制を否定する意味を持っている。「明治の精神」が殉死の対象であるこそ、「先生」の殉死自体が、外的に資本主義のもたらした桎梏を打破し、内的に父権体制の道義思想を打破する新しい意義を付与されている。

「先生」が自分を求めに来た青年の行為を「恋に上る段階」(P42)と称したのは、静に恋した過去の自分自身を見つめるように、生の茫漠を抜け出そうとする青年の心を見透かしたのである。「私の鼓動が停まった時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」(P173)と、「先生」は自己否定を通して、青年に明治社会の思想問題を開示した。手記に記されている椿の舞い落ちるところを眺めた「先生」の視線は、資本主義と父権制度の圧迫を表現した『草枕』と『それから』の椿のイメージとの関連を仄めかしている。遺書の示している思想問題は、手記に提起されている青年の閉塞感の源である資本主義と父権体制の問題と関連している。遺書によって「先生の頭の中にある生命の断片」

¹⁷⁶越智治雄「こゝろ」(『漱石私論』1971.06)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』P97)は、「自己の否定」という概念も提起し、「自身をかく有らしめた時代と刺し違える」と捉えているが、本論はそれと異なる意味を見出している。



への開示を通して、青年と「先生」の「二人の間にある生命の扉を開ける」(P49) ことができているが、どのように旧い道義性を打破して利己心を受け止め、国家資本主義に立ち向かっていくかが、青年のそれからの課題である。

そのように、手記と遺書の探究する時代思想の問題から分かるように、『こゝろ』における道德問題の探究は、「先生」の人格主義の宣言ではなく、儒教倫理や単純な私的個人の倫理観でもない。むしろ、資本主義を受け入れた明治の近代化問題を解決するために、正視しなければならない父権体制の中の封建性の問題を提示している。

三、「明治の精神」の真義と「個人主義」の国粹主義批判との繋がり

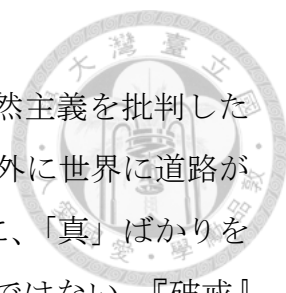
ここで、さらに「明治の精神」というの言葉の源流と意味を見出す上で、『こゝろ』の内容が「国家」の概念と対置する漱石の「個人主義」に繋がる意味を見出していきたいと考えられる。

明治三十九年三月に出版された島崎藤村の『破戒』を読んで、漱石は「僕は多く小説を讀まず。然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ。」¹⁷⁷と大いに評価した。漱石は特に『破戒』に対する賞賛の中で、「維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい」¹⁷⁸と述べている。漱石の文学精神の源流を示しているその言葉は、漱石が日記で行啓能と明治天皇の大葬への観察記録を明治45年の日記に書き記したために、よく明治精神史の研究によって、民族的、政治的立場の認めとして誤用されてきた。それは漱石が有名な文学理論の「文芸の哲学的基礎」において「真、善、美、壮」の平衡の理想への追求を主張し、自然主義作家と対置した意識が見られることで、理想派の作家として捉えられきて、「自然派が嫌いじゃない」¹⁷⁹という創作意識が従来無視さ

¹⁷⁷夏目漱石「明治39年4月3日森田米松宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店、1957、P36-37

¹⁷⁸夏目漱石「明治39年10月26日鈴木三重吉宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店、1957、P123

¹⁷⁹夏目漱石「『坑夫』の作意と自然派傳奇派の交渉」『漱石全集第三十四巻』岩波書店、1957、P143



れてきた研究の流れの影響もあるのかもしれない。漱石が自然主義を批判したのは、「真が独り人生に触れて、他の理想は触れぬとは、真以外に世界に道路がある事を認め得ぬ色盲者の云う事であります」¹⁸⁰と示すように、「真」ばかりを注目する自然主義手法だけであり、社会問題批判の文芸意識ではない。『破戒』は部落民の問題を取り扱っているが、吉田精一は『破戒』以前はすでに被差別部落問題を描く小説が現れていたために、「真摯な人生問題として主題をつかみ、作者自身の自我の告白と苦悩を秘めている点で、別種類の小説」、「社会の封建的観念との闘いを、丑松の内部にある封建的なものとの闘いに移し、むしろ後者すなわち内面の苦悩を強調した点に、この小説の近代性があると見るもの」¹⁸¹と、『破戒』の特異性を指摘している。藤村自身も「作者としての私が読んで貰ひたいと思ふのは、「その父と子の関係」なのである」¹⁸²と、社会問題に関連して個人内面の苦悩と「家」との衝突を表現する『破戒』の創作意図を述べている。漱石は「吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでもイヤなものでも一切避けぬ否進んで其の内へ飛び込まなければ何にも出来ぬといふ事である」¹⁸³と、社会現実とぶつかって社会現実を描き出している『破戒』に対する感動を示している。その上で、「破戒にとるべき所はないが只此點に於テ他をぬく事數等であると思ふ。然し破戒は未ダシ」¹⁸⁴と創作の意欲を示し、のち「野分」、「坑夫」以降の創作でリアリズムを試みるのみならず、近代化批判を行う『草枕』、『三四郎』、『それから』などの作品においてもリアリズムの表現を示している。さらに、すでに第一節の『草枕』論で提起しているように、漱石は「日本ノ昔ノ道德は subordination がヨク出来て居る君臣、父子、夫婦。是は社会を統一シテ器械的に働かす為に尤も必要である今はだめ」¹⁸⁵、「道德は習慣だ強者の都合よきものが道德の形にあらはれる孝は親の權力の強き處忠は君の權力

¹⁸⁰夏目漱石「文芸の哲學的基礎」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫、2009、P397

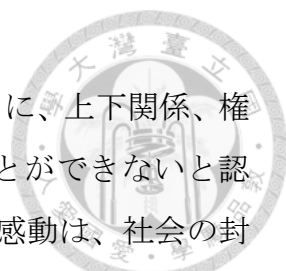
¹⁸¹吉田精一『島崎藤村』桜楓社、1988、P59

¹⁸²島崎藤村「融和問題と文芸」『融和時報』中央融和事業協会 1928. 3. 1、P2-9

¹⁸³夏目漱石「明治 39 年 10 月 26 日鈴木三重吉宛書簡」『漱石全集第二十八卷』岩波書店 P123

¹⁸⁴前注と同じ。

¹⁸⁵夏目漱石「明治 34 年 4 月頃以降の断片」『漱石全集第二十四卷』岩波書店、1957、P73

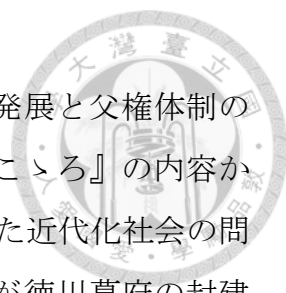


の強き處貞は男子の權力の強き處にあらはれる」¹⁸⁶というように、上下関係、権力関係を固く決め付ける封建社会の旧道徳へと後戻りすることができないと認識していた。『破戒』の描き出した社会の真実に対する漱石の感動は、社会の封建的観念に対する打破と深く関連し、「維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい」という賞賛の言葉について、漱石をむしろ社会における文学者の使命として使っているということが分かる。

社会の封建的観念への打破がなぜ、「維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい」という言葉と繋がるかということ、明治維新の変革によってもたらした啓蒙思潮という社会背景の前提が存在する。徳川時代の封建社会を打破し、近代ブルジョア社会に転換する明治社会の発展に対応する精神が、封建性批判の啓蒙精神である。漱石は明治維新の精神を封建打破、四民平等を掲げ、個人精神の自由解放として受け止めていたと伺える。それに関して、透谷の「明治文学の管見」は、「維新の革命は政治の現象界に於て旧習を打破したること、万目の公認するところなり。然れども吾人は寧ろ思想の内界に於て、遙かに偉大なる大革命を成し遂げたるものなることを信ぜんと欲す。武士と平民とを一団の国民となしたるもの、実に此革命なり、長く東洋の社界組織に附帯せし階級の繩を切りたる者、此革命なり。(中略)今日に於て旧組織の遺物なる忠君愛国などの岐路に迷ふ学者、請ふ刮目して百年の後を見ん。」¹⁸⁷と述べている。透谷は、明治社会に残存する封建体制、忠君愛国の思想への打破を明治文学の一課題として取り入れている。『草枕』の中で忠君愛国の思想を批判し、『三四郎』の中で親権思想を表す「古き日本」を提起し、そして『それから』の中で「模範的道德」に衝突する知識人像を描いて、国家主義への批判を暗示してきた漱石は、まさにその思潮を汲み上げていた。乃木將軍の殉死に表している君臣道義とあえて区別した『こゝろ』の「先生」における「明治の精神」への殉死からも観察できるように、「明治の精神」は、まさに封建体制に反対する『破戒』への賞賛の言葉、「維新の志士の如き烈しい精神」に根源している上で、忠君愛

¹⁸⁶夏目漱石「明治34年4月頃以降の断片」『漱石全集第二十四巻』岩波書店、1957、P71

¹⁸⁷北村透谷「明治文学の管見」『現代日本文学大系6 北村透谷・山路愛山集』筑摩書房、1969、P133



国と対置する概念であると伺える。そして、国家資本主義の発展と父権体制の封建思想の共存でもたらした時代の閉塞感を表現している『こゝろ』の内容からも見られるように、『こゝろ』は国民国家統合に置かれていた近代化社会の問題を批判する新しい視点を取り入れている。明治維新の精神が徳川幕府の封建体制を打破する啓蒙精神であれば、『こゝろ』における「明治の精神」の意義は、国民国家統合とそれに伴った近代化への批判である。

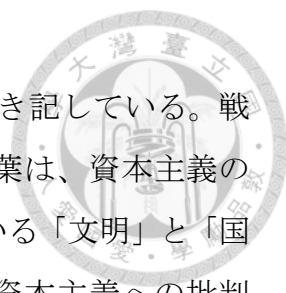
「明治の精神」を論じるにあたって、漱石の「個人主義」はしばしば引用されてきた。しかし、「明治の精神」と「個人主義」の関連性は、「先生」の「私的個人性」を表す概念、または前掲猪野論に捉えられたような国家主義の下位概念として認識されてきた。実際に、漱石の「個人主義」は英国留学の時の「自己本位」に根源し、その「自己本位」の精神は、「私が独立した一個の日本人であって、けっして英国人の奴婢でない」¹⁸⁸というように、明治維新の独立自尊、四民平等の精神に由来している。また、大正3年11月25日に学習院で行った講演の「私の個人主義」の中で、漱石はブルジョア階級の学習院の学生たちに向けて「金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重んじなければならない」¹⁸⁹と語り、「自己本位」が洋行で西欧に対する独立心に目覚めて獲得した思想だと述べた一方、明治社会に形成していた国粹主義に対して、「封建時代の人間の団体のよう」¹⁹⁰だと批判し、自分の「個人主義」における党派心への嫌い、国家主義との区別を、国粹主義に対する嫌悪感に関連させている。漱石の独自の「個人主義」は「私的個人性」や国家主義の下位概念ではなく、むしろ四民平等を唱える明治開国の啓蒙精神に繋がることによって、国家主義との対峙を示している。そして、『こゝろ』の「明治の精神」のように、国家資本主義と父権体制の封建思想に対する批判で、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する反動の意志を示している。

大正四年に一次世界大戦への日本の参戦を観察した漱石は、「歐洲戦争 社會

¹⁸⁸夏目漱石「私の個人主義」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫、2009、P624

¹⁸⁹注 188 と同じ資料、P636

¹⁹⁰注 188 と同じ資料、P640



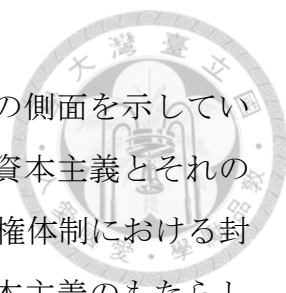
主義、経済、人道、皆國家主義に勝つ能わず」¹⁹¹と、断片に書き記している。戦争を巻き起こした原因が國家主義にあると認識しているその言葉は、資本主義のもたらした帝國主義の進出の世界潮流の中で、漱石の戦っている「文明」と「國家」の問題が、実利主義、生存競争原理を内容とした西洋の資本主義への批判だけでなく、帝國支配のために國粹主義の唱える家族國家観で父権体制を固め、明治の近代性も含めているということを示している。漱石は、まさに資本主義の問題に抵抗するには、まず國粹主義の家族國家観のもとに置かれた父権体制の強固という近代化の矛盾性を打破しなければならないと考えていた。明治國家の國民國家統合とそれに伴った近代化に対する漱石の抵抗は、「明治の精神」と「個人主義」の概念と結びつき、漱石の近代化批判と文芸思想の核心となっていると伺える。

第五節 結び

従来余裕的、理想郷への追求の小説として捉えられてきた『草枕』は、日清戦争後の明治三十年代の社会小説の動向に繋がり、資本主義、父権体制と「忠君愛國」による人間支配という國民國家統合とそれに伴った近代化の問題を描き出している。人間の死を象徴する「椿」が那美の水死絵に点じられたのが、國民國家統合に運命を支配されている人間の敗残を象徴しているのに対して、漱石は主客一致の芸術論で「憐れ」をもって、資本主義のもたらした実利主義と父権体制における親権思想の結合への克服を試みようとした。『草枕』の理想主義的な結末は実際に近代化社会の現実への凝視に基づき、そしてそのリアリズムの一面はのちの作品によって継承されるようになった。

『三四郎』は、日露戦争後の社会の不況への描写と、親権思想のもとで立身出世の道を歩もうとし、自身の文明憧憬を都会女性的美禰子に結びつけた三四

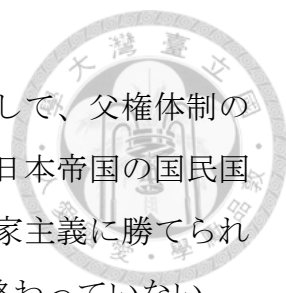
¹⁹¹夏目漱石「大正4年12月頃より大正5年7月27日までの断片」『漱石全集第二十六巻』岩波書店、1957、P180



郎の恋を、失敗に遭うように導いていることで、リアリズムの側面を示している。その中に提起されている「新しき西洋」の概念は、国家資本主義とそれをもたらした物質文明の発展である。「古き日本」の概念は、父権体制における封建思想の残存である。父権体制の封建思想に立脚し、国家資本主義のもたらした物質文明に憧憬して、近代学校に通う三四郎の立身出世観は、国民国家統合とそれに伴った近代化という時代性を反映している。そして、立身出世観の幻滅を導き出した作品自体は、その時代性に対する批判の意図を表している。

『それから』は、近代化社会への批判と関連する代助の姦通心理から、国家資本主義の発展と父権体制に残存した封建思想の圧迫を打破する動機が見られる。作中に配置されている社会の時事も、国家権力による資本主義の推進と支配の問題を伺わせている。資本主義と父権体制の結合を象徴する父の存在に反し、社会主義作家のアンドレーフの『七刑人』における政治的支配で発生した不安に繋がる代助の姦通心理の不安は、全体主義に向かっている近代化国家と離反する近代人のイメージを反映している。

『こゝろ』は、手記と遺書の構成を通して、国家資本主義の桎梏と父権体制に残存した封建思想のもとで未来の道を見出せない青年が、「先生」に「現代思想の問題」に関する答えを求め、「先生」が資本主義にもたらされた人間の利欲心、父権体制の利他本位でエゴイズムに無自覚な近代人の深淵という人生経験をもって答えたことを物語っている。「先生」の殉死の対象である「明治の精神」は、「維新の志士の如き烈しい精神」という藤村の『破戒』に対する評価の言葉に根源している一方、君臣道義と区別した「先生」の殉死の意図から見られるように、近代国家の中に残存した「忠君愛国」の封建思想への打破を呼び起こす透谷の思想にも繋がっている。封建打破と啓蒙精神という意味を持つ「明治の精神」への「先生」の殉死は、殉死という言葉に明治の社会体制への打破の新しい意義を付与している。そして、『こゝろ』は近代化社会への思考を含め、国民国家統合とそれに伴った近代化への批判に繋がる一方、ブルジョア階級に金力の悪用を戒め、国粹主義に対して批判を示した漱石の独自の「個人主義」に関連している。



そういうように、漱石は近代化批判と文芸思想の展開を通して、父権体制の古い道義性を利用して資本主義のもたらした支配性を固めた日本帝国の国民国家統合の過程への批判を示してきた。しかし、人道主義が国家主義に勝てられない失望を示した漱石の文芸上の課題は、明治時代の終焉に終わっていない。



第三章 張文環の近代化批判と文芸思想

漱石と共通な文芸的関心を持っている張文環は、日本帝国の支配下に置かれ明治近代化の経験を取り入れた台湾植民地で育った。張文環は、葉石濤によって「植民地作家」¹⁹²と称されてから、反植民意識が論じられてきた。張恆豪は、張文環を殖民政府の思想統制に不満を感じて『フォルモサ』、『臺灣文學』を創刊した組織力のある「先行者」、「厚生演劇研究會」を成立して台湾民俗文化の保存に努力した民族精神の「継承者」と評価した上で、庶民の生活態度と道徳観念から人間生存の意義、人間性、尊厳と責任を省察し、民族意識を内包して人道精神を流露する冷静なる作品基調を持つ「人道作家」¹⁹³と評価している。張文環の作品は近年において、柳書琴、張文薰、游勝冠らの研究者によって、近代化問題と植民地の階級問題を提起され、近代化社会における資本主義と父権体制の問題が浮き彫りにされてきた。ただ、張文環の作品はどのように当時代の文壇の動向と関連し、日本帝国の国民国家統合とそれに伴った近代化に対する批判を反映しているのか。本章は「父の要求」、「過重」、「山茶花」と「闖雞」の四つの作品を中心に、探求していきたいと考えられる。

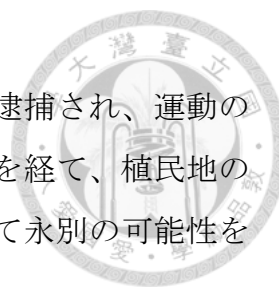
第一節 「父の要求」—反植民意識の中の国民国家統合批判

一、 国民国家統合に従属した父権体制への認識

「父の要求」は1935. 9. 24に『台灣文藝』2巻10号に発表し、『中央公論』の懸賞小説の優秀賞となった「父の顔」(1934. 9)から改作した短編小説である。東京で勉強していた台湾人の陳有義が、下宿先の日本人の娘の賀津子に恋し、

¹⁹²葉石濤「論張文環的《在地上爬的人》」(「民衆日報」1978)柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館, 2011, P129-137

¹⁹³張恆豪「張文環的思想與精神」(『臺灣文藝』81期1983)柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011, P117-127



プロレタリア活動に参加していた林得貴に接触、社会運動で逮捕され、運動の放棄を要求した父の手紙を読んだ結果、入獄した心境の転換を経て、植民地の故郷に戻り、最後に津賀子宛ての手紙で郷里の情景を形容して永別の可能性を告げたという内容を物語っている。

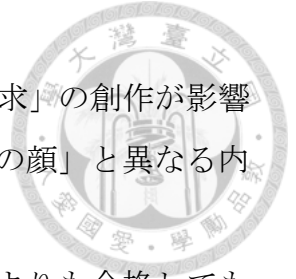
張文環は1931年に東洋大学文科に入学した¹⁹⁴頃から、1936年に共産党の浅野次郎との交友で連帯罪をきせられて三ヶ月間の入獄を経験するまで、東京でプロレタリア活動に参加していた。野間幸信の指摘によると、「父の顔」、「父の要求」の創作は、張文環の東京留学とプロレタリア活動への参加に取材している¹⁹⁵。『フォルモサ』の停刊の後から『中央公論』の懸賞小説の締め切りまでに創作された原作の「父の顔」はすでに散逸したが、プロレタリア文学運動からの脱落、思想の放棄に対する良心の不安、家族に対する反省を創作のテーマとした1934-1935年の転向文学の風潮の背景から見れば、その受賞はまさに転向を中心テーマに描き出したことが原因だと推測できる。それによって、野間幸信は「父の顔」の受賞に類推して改作の「父の要求」を「転向文学」¹⁹⁶と捉え、賀津子に対する陳有義の恋愛感情を台湾人の立身出世の現状からの逃避とし、そしてその政治的活動への参加を階級意識の獲得と捉え、入獄で見た泥棒の「生きんための努力」を階級意識から社会の多種多様な人生への理解による価値の転換とした上で、陳有義の帰郷を「父の要求」に即した転向¹⁹⁷と捉えている。しかし、「父の要求」の発表の前に、張文環は作品掲載の遅れによって謝りを台湾文芸連盟の『台湾文藝』に寄稿している。その謝りは、「拙作の「父の顔」が本誌の五月に発表する筈でありましたが、實は私はそれを読み返してゐるうちに、この儘で発表するに堪えない作者の良心的な苛責にぶつかりまして、なほすのに手間が取る理で延期して頂くやうに編集諸方にお願ひしましたのでございま

¹⁹⁴野間信幸「《福爾摩沙》創刊前的張文環」(『東洋大学中国哲学文学学科紀要』13号 2005. 03) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011, P139-151

¹⁹⁵野間信幸「張文環の「父の要求」について」(『東洋大学中国哲学文学学科紀要』(3), 1995, P35-39)

¹⁹⁶注 195 と同じ。

¹⁹⁷注 195 と同じ。



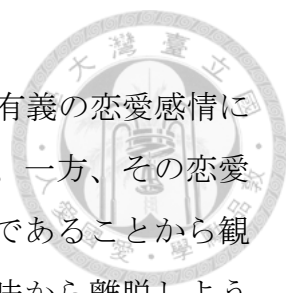
す。」¹⁹⁸という内容である。「作者の良心的な苛責」で「父の要求」の創作が影響されているとは、「父の要求」は転向を中心テーマとした「父の顔」と異なる内容を描き出していると同える。

作品の冒頭では、「臺灣人としては行政科に適さないと云ふよりも合格しても採用されないから」¹⁹⁹という被植民者差別に遭うことを知っていた陳有義が、大学の卒業証書を両親に送り、貧しい下宿環境の中で、採用を望めない高等文官の試験を準備し、そして試験を受けたことが描かれている。それと対照して、近代教育の潮流に流され、「知らずにたゞ金モールのきら／＼する制服を着てかへる阿義の姿」を望み、息子の立身出世の苦境を理解していない両親の無知が描かれている。「父や母の盲目的な教育に腹立しくなった」という青年の批判的な視線を通して、植民地における国民国家統合の一環となり、功利主義と物質文明を中心価値とした近代教育に従属した植民地父権社会の蒙昧が示されている。陳有義は未来に対して茫漠を感じていた中で、下宿を換える件で新しい下宿先において未亡人の娘の賀津子と知り合い、「利己主義」と称するような恋愛感情が芽生えた。彼は賀津子を「華胥の描いた美人」に例え、「異性を壓迫する崇高な美しさ」を持つ「美の権化」と捉えた上で、「自分の生活と家庭は果たしてこの美の権化を守ることができるか」、「自分の生まれ故郷或いは自分の民族でさへ呪はしくなってくる」ように考えた。張文薫はキリスト教を信仰し、日本音楽學校の高師部に通い、ピアノを弾いていた賀津子のイメージを、西洋から押し寄せてきた近代文明の象徴と捉え、そして、賀津子に対する陳有義の恋愛感情を近代文明に惹きつけられた被植民者の心理と指摘した²⁰⁰。游勝冠も、陳有義の恋愛心理には、自己を卑下して文明をもたらした植民者側の賀津子を

¹⁹⁸張文環「謝る」(『台灣文藝』2卷5号, 1935.05.05) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

¹⁹⁹張文環「父の要求」(1935.9.24『台灣文藝』2卷10号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011 (電子資料であり、ページ数が記されていない、本節におけるテキストの引用はすべて同じ資料。)

²⁰⁰張文薫『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』(2005) P42-48

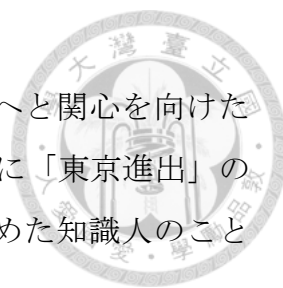


神聖化する傾向があると指摘した²⁰¹。その指摘のように、陳有義の恋愛感情には、確かに文明憧憬と被植民側の台湾人の負い目が見られる。一方、その恋愛感情が蒙昧な両親に対する反抗心から生まれた「利己主義」であることから観察すれば、そこから近代文明への追求を通して父権社会の蒙昧から離脱しようとする反動意識も伺える。

しかし、植民者の文明への憧れをもって、国民国家統合とそれに伴った近代化に従属した植民地の父権体制の主体性の喪失を乗り越えようとする陳有義は、やはり論理の矛盾と迷走によって自分のアイデンティティの混乱に直面せざるをえなかった。プロレタリア運動に参加していた同郷の林得貴が陳有義の下宿に訪ねた時、「日本が勝つやうに、そして負傷者がいやうにお互は祈りつこしてある。しかしかう考へて見ると神様は戦争や鐵砲弾と云ふものを籠毬ぐらひに思つてゐないでせうよ」と、満州事変のことを提起して、徴兵される父の帰りばかりを祈り、戦争先の中国と被植民者の台湾人の立場を深く思慮していないキリスト教信者の賀津子のことを皮肉した。游勝冠は、賀津子と陳有義の恋愛の不毛への展開と陳有義の社会運動への参与が、林得貴の介入に植民者と被植民者の民族階級の不平等関係への自覚²⁰²のためだと指摘した。その指摘のように、社会科学の本を読み始めていた陳有義が、林得貴の言葉を聴いて冷淡になった賀津子の様子を見て、「所在なさゝうに外ばかり凝視めてゐた」という思案ぶりを示し、その後、「小市民的な根性と堪え得られない肉體的な苦痛」で降伏した林得貴の転向事件に憤り、「どんな制裁を加へられてもいとはない。文句を言はない。良心的な働きに沈重なそして冷静な態度にかへる」ように、民族運動への参加の決心を固めたのは、林得貴の来訪で賀津子への恋愛感情を反省し、被植民者の自覚が生じたのである。柳書琴は日本の植民でもたらされた西洋の近代文明と啓蒙の概念を郷土への改革に取り入れようとした1920年代の台湾知識人と、「東京進出」の題材を最初に描き出した謝春木の「彼女は何処へ」（1922. 5. 21 - 23『台湾』第3年第4号 - 第7号）の傾向を指摘した上で、社

²⁰¹游勝冠『殖民主義與文化抗爭・日據時期臺灣解殖文學』群學，2012. 04，P480-501

²⁰²注 201 と同じ。

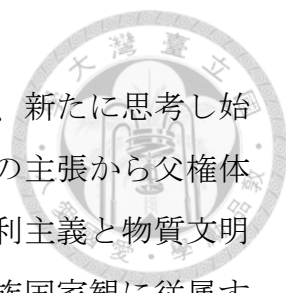


会運動への参加で植民問題と資本主義、帝国主義と民族主義へと関心を向けた謝春木の傾向を指摘した²⁰³。張文環の「父の要求」は、まさに「東京進出」の後、プロレタリア活動に投入して、植民地問題への思考を広めた知識人のことをよく描き出している作品であると同える。

そして、「父の要求」はさらに主人公の陳有義が転向風潮の中で検挙され、思想上の転向を強いられることを描いている。陳有義が死を恐れなくても死ぬことができなく、ただ監獄の中に閉じ込められたまま精神的な苦痛を繰り返されてきた時、刑務所は津賀子の母を呼び寄せて陳有義の「父の心配してゐる手紙がきた」という手段を通して、転向を誘致しようとした。陳有義に宛てた父の手紙は、「お前の父母はお前を今日まで育つのにどれ程財産を費やしたか。阿義お前も知つてゐる筈だ。父はそれを恩にきせて、お前に孝行してくれとは言はぬ。これも前世の運命也。父は恨まぬ。阿義お前がいゝ兒になつて成人の姿を見て、私等二人に安心して死ぬことだけを望んでゐるに過ぎない」という内容である。その手紙を受け取った陳有義は監獄の中で「階級と親子間との間の問題」をじっくり思考し、繰り返しの審問で発狂する間に、同じ部屋にいる泥棒の「生きんための努力」を見て、とうとう「良心のために屋根から屋根を傳ふことができなかつたら、人間としての生甲斐、或はこの男よりも下等な人間になるのかも知れない。この人はいやしむべきか、いやしむべき人は生の意識を失つてゐる人間だ」と思い、生きることを決めた。柳書琴は父の手紙に示された「父の要求」に「忠孝一体」、「忠臣良民」の親権思想が介在していると指摘し、文芸大衆化を図る台湾文壇の背景を通して、泥棒の生を見詰める視線と「市井小民」に対する帰郷後の陳有義の視線を、健げに生きる郷土の大衆の生命力への発見²⁰⁴と捉えている。作品の内容から陳有義の帰郷の後に郷土の大衆の生命力への発見に関する描写がまったく見られないため、泥棒からの生の発見は、むしろ陳有義の生きる意志の発見に過ぎないが、陳有義の思考した「階級と親子間との間の問題」は確かに植民側の親権思想と結んでいた被植民側の

²⁰³柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』聯經，2009，P30-48

²⁰⁴注 203 と同じ，P339



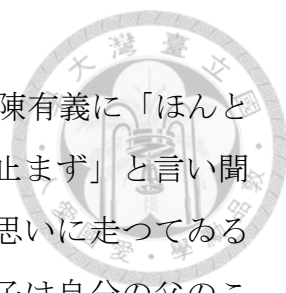
父権体制の問題が見られる。陳有義の民族意識の追求の中で、新たに思考し始めた「階級と親子間との間の問題」は、つまりプロレタリアの主張から父権体制の問題への思考に回帰する傾向である。そして、それは功利主義と物質文明に従属する父権体制を批判する時の視点に加えて、日本の家族国家観に従属する父権体制の問題を発見した新たな視点の獲得である。

二、 植民地における資本主義と父権体制の問題への批判

作品の最後に、陳有義の留學生活に繋がる賀津子への手紙が書簡体で配置されている。今までの研究は、この手紙の内容を主に陳有義が帰郷後に見た情景を賀津子に報告するものと捉えてきて、その内容と「階級と親子間との間の問題」に対する陳有義の思考の関連性を論じていない。しかし手紙の内容が作品全体において、日本帝国による国民国家統合に従属した父権体制を見詰めた陳有義の視線をもっとも反映しているところではないかと考えられる。

まず、陳有義は、植民者に頭を下げたり媚びたりする郷里の中の人間が増え、「一人の盲目の乞食」が敬語でしきりに女性の歓心を買っていた情景を提起した。「盲目の乞食」は、本当は乞食を指しているのではなく、「皮肉にもこの盲目は目あきよりも富裕な生活をしている」、「これは階級の復興か、没落か」という形容から分かるように、出世のために敬語をしゃべって植民者に媚びていた当時の多くの中産階級の知識人のことを指している。陳有義がそのことを賀津子に伝えたのは植民者に従属した父権体制の蒙昧の中で立身出世の問題に悩んだ結果、「利己主義」で近代文明の権化を象徴する植民者側の賀津子に恋した自己の盲目を批判する意図が伺える一方、日本のもたらした資本主義潮流と実利主義思想が、被植民者に精神面でも従属化させてしまったことを示している。

その上で、手紙の中で、「乞食」によって媚びられ「焼豚のやうな顔をしてゐる娘」、「本物の姫よりも彼女達の方がはるかに幸福感にひたしてゐる」と形容された女性の存在が提起されている。それは、実際に下宿先の親子が陳有義に父の手紙を読み聞かせてもらった場面における賀津子の反応と関連している。



「おばさんはこゝまで讀んだときは眼に涙が一杯に溜まって」、陳有義に「ほんとに親孝行をせねばなりません」、「樹静からんと欲すれども風止まず」と言い聞かせる態度を示している。そして「津賀子は？津賀子も遠い思いに走つてゐるやうに眼をうるはせて茫然と聞き入つてゐる」ように、賀津子は自分の父のことを思い出し、転向を強いられ「今日において絶対服従の立場にある」と感じて帰郷を願った陳有義のせつない心情に、理解を与えていない様子を示している。植民側と被植民側におけるその感情の断絶で、陳有義は賀津子の態度を自分の世界しか考えられない姫様だと諷刺しているのである。陳有義が賀津子の古い腕時計を餞別のお土産としてもらい、手紙の中で「私は何故かあなたに貰つた腕時計のねぢを廻して置くのを忘れてみた」と述べたのは、まさに自己の民族を蔑視し「二つの世界の時刻を支配してゐる刑務所の時計臺」という被支配の現実を無視しようとした自分への反省を示し、植民者側と被植民者側の感情の断絶を賀津子に暗示するためである。

そして、手紙は父母に「できるだけ安心させ」、つまらない井戸端話に取り囲まれる自分の退屈な日々で郷里の情景を描くことによって、親権思想を持つ賀津子に自分が父権体制に自由を制限されていることを示している。それに関連して、父の建てた「墓場」の隣の「洋館」に閉じ込められて発狂していた転向者の林得貴のことも提起し、転向の圧迫の中で良心に虐げられて生の意義を見失った被植民者の尊厳のなさを表現している。プロレタリア運動者で被植民者の林得貴を閉じ込めた父の建てた「洋館」の存在は、物質文明を象徴する一方、日本帝国によって取り入れられた西洋の資本主義潮流と、国民国家統合に影響された植民地父権体制の結合でもたらした植民地への支配を示している。手紙は最後に、「再び思い出されたことは賀津子の母が云ふやうに、樹静からんと欲すれども風止まずと云ふことである。愛の仇は兄弟であつたのかも知れないと彼は、或はこのまゝ賀津子達と永遠に手紙のやりとりをしないで終るのかも知れない」と書いている。「愛の仇」は、文明憧憬で生じた盲目的な愛が、とうとう被植民者の自覚と日本帝国の家族国家観に従属した植民地の父権体制への批判によって生じた恨みの感情に変わったことを意味している。陳有義は、植民者の



階級の困境から離脱するために、旧父権の蒙昧な社会を否定しようとし、近代文明を追求してかえて国民国家統合の中の家族国家観という障壁にぶつかってしまい、自身と賀津子への批判によって、植民地の父権体制に影響を与えた国民国家統合とそれに伴った近代化を批判している。

「父の要求」の発表の機関誌は『台湾文藝』であり、そして張文環の参加した「台湾文聯東京支部第一回茶話會」において、中国の新進作家であり文芸連盟で活躍していた雷石瑜は、『台湾文藝』の掲げるべき思想性について、「封建思想を打破して初めて民衆のものたり得る」²⁰⁵と、辛亥革命の発生した中国との連携を提起した。それに関して、劉捷も「續臺灣文學鳥瞰」において、政治的挫折を背負う 1930 年代の台湾文壇で、辛亥革命は封建打破、立憲政治の意義がある²⁰⁶と言及した。張文環自身も「台湾文学の自己批判」において、「本島人の青年は封建的家庭と個人主義的な社會の雰圍氣に悩まされ」²⁰⁷てきたと、自身の直面していた文芸的問題を述べていた。「父の要求」の内容への解説、または張文環の文芸思想への理解には、まず世界資本主義の広まりで形成した帝国主義の潮流の中に生まれた、民衆運動と啓蒙思潮による階級問題と封建性への打破という台湾文壇の思潮を念頭に置かなければならない。そして、「父の要求」は、近代文明の呑み込まれ、アイデンティティをなくし、自身の民族を蔑視して近代文明に憧憬し、そして親権思想によって転向を強いられた植民地知識人の複雑な心理を表しているとともに、資本主義の潮流と日本帝国の家族国家観に従属した父権体制に対する批判を表現している。西洋や日本の資本主義と帝国主義の支配に抵抗するには、まず階級支配を固める父権体制の封建性から批判する、という台湾植民地の知識人の思考をよく反映している作品である。

²⁰⁵台湾文芸連盟「台湾文聯東京支部第一回茶話會」(『台湾文藝』2卷4号, 1935.04.01) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

²⁰⁶劉捷「續臺灣文學鳥瞰」(『台湾文藝』2卷3号, 1935.05 (台湾文芸連盟))『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001, P116-121

²⁰⁷張文環「台湾文学の自己批判」(『新文化』8月号早稲田大学 1941.08.01) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011 (この評論の主旨は日本主義精神の宣揚であるが、張文環自身の長い間の課題に触れている。)



第二節 「過重」—地方主義文学によって反映される国民国家統合の問題

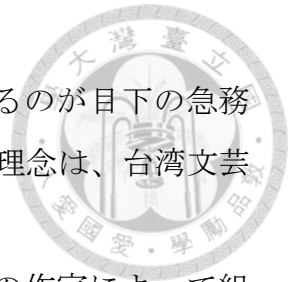
一、地方主義文学という背景

「過重」は、「父の要求」を発表したのち、張文環が 1935. 12. 28 に楊達の主催した『台湾新文學』の創刊号に寄稿した短編小説である。小学生の健が学校の華やかな儀式に参加したい気持を抱き、農婦の母と喧嘩しながら、バナナを市場まで運ぶのを手伝い、市場で経済略奪を遭わされた母のことを見つめて学校へ行く気をなくしたという内容を描いている。

1935年に創作された「過重」は、1930年代以降の台湾文壇動向と『台湾新文學』の成立と深く関連している。1930年代の台湾文壇は、政治的挫折の中で、世界中の民族自決、ネオリアリズムの政治動向の影響を受け、文芸を社会改造の使命としていた。言論の取り締まりが厳しくなっていく中で、日本帝国主義を直接に批判できないために、封建制度と資本主義への批判に転じ、台湾人の生活現実の描写を唱える郷土文学が流行り始めた。楊達の「臺灣の文學運動」によると、1931年に左翼で政治主義的色彩を帯びる台湾文芸作家協会が成立し、同年の八月にプロレタリア色彩の濃い『臺灣文學』が創刊された²⁰⁸。協会メンバーの滝澤鐵也は「主題の積極性」一文の中で、ブルジョア階級文学への対抗として、プロレタリア文学を方針とし、「労働者及労働者婦人の日常の文化欲求及び生活欲求を擁護すること等の現実の闘争」を目的とした「大衆文學」をもって、『臺灣文學』の方向を提示した²⁰⁹。『臺灣文學』のプロレタリア傾向は、その後、温和派路線を取った『フォルモサ』によって継承されていたが、『フォルモサ』はプロレタリア活動の挫折と雑誌の停刊に遭わされ、さらなる発展を遂げられなかった。その後、頼富貴が1935年2月5日の「台湾文聯東京支部第

²⁰⁸楊達「臺灣の文學運動」(『文学案内』1935. 01. 04)『日本統治期台湾文學・文芸評論集第二卷』緑蔭書房, 2001, P198-199

²⁰⁹滝澤鐵也「主題の積極性」(『台湾文学』6月号8~9, 1932)『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房, 2001, P197-199



一回茶話會」で「日本と対抗し得る台湾民眾の文藝を創造するのが目下の急務ではないか」²¹⁰と提起したように、「大衆向けの文学」という理念は、台湾文芸連盟によって継承されるようになった。

一方、楊逵は「臺灣文壇の近情」一文を通して、台湾全島の作家によって組織された台湾文芸連盟の指導部の弛み、そして自然主義に染まった左翼運動者や支持者の創作手法を批判した。その上で、「光を求める精神」、「希望を呼び起こす力」で台湾の新文学を提唱した一方、「ロマンを盛る文学は、何より現實の科學的觀察を必要とするものであり、表現に於ても最高のリアリズムが必要である」²¹¹と、台湾文壇の重視していた文学の社会性を継承しようとした。楊逵は再び「大衆には大衆の文学がある」と提起し、「大衆（中でも文化的下層の労働者農民）の為に藝術を創作出来ないなど言ふことは愚劣千萬ではないか！」²¹²と述べた上で、「大衆」の概念を「読者」より労働者と農民の階級に広げ、左翼の立場を表明し、1930年代初期の『臺灣文学』で提唱された文芸大衆化に繋がろうとした。そして最後に、台湾文芸連盟を脱退して当時の多くの左翼作家を網羅して台湾新文学社を成立し、1935年12月28日に文芸雑誌の『台湾新文学』を創刊した。

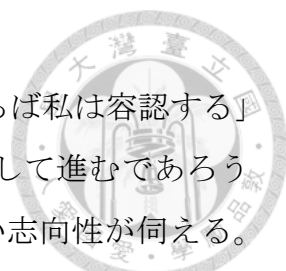
『台湾新文学』の創刊号に「臺灣の新文学に所望する事」と題した意見交流のコラムでは、「植民地文学の進むべき道」、「臺灣に於ける編集者作家読者への訓言」²¹³という質問に対して作家や批評家たちの意見が乗せられている。そして、「植民地文学」の取り扱いに関する意見は、作家の立場の違いによって主に二派に分けられる。まず、「植民地政策に就いての批判的な小説」（矢崎弾）、「階級的、プロレタリア文学としての植民地文学」（中西伊之助）、「植民地文学」を「植民地」を題材にした文学といふ風に解釋するならば、例へば農民文学、

²¹⁰台湾文芸連盟「台湾文聯東京支部第一回茶話會」（『台湾文藝』2巻4号，1935.4.1）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011

²¹¹楊逵「臺灣文壇の近情」（『文学評論』2巻12号）『日本統治期台湾文学・文芸評論集第二巻』緑蔭書房，2001，P198-199

²¹²注211と同じ。

²¹³台湾新文学社「臺灣の新文学に所望する事」（『台湾新文学』1，1935.12.28，P29-40）『日本統治期台湾文学・文芸評論集第二巻』緑蔭書房，2001，P211-221（コラムの発言は「臺灣の新文学に所望する事」から引用した資料である。）



地方小説、都會小説といったやうな區別の仕方だと見なすならば私は容認する」
「だから、今後のすゝむ可き路も他のプロ文學と歩調を合はして進むであろう
と思ふ」（張赫宙）というように、プロレタリア文學への強い志向性が伺える。
その一方、「土地自然や、特殊な歴史や澤山の習慣やの中に、貧しい人々がいかに
暮らしてゐるか」（徳永直）、「その土の匂ひ、傳統、歴史性、社會性、生活性」
（新居格）、「臺灣の農民は何を喰ひ何を着、こんな土地で何をつくり、地主様
やお上にどのくらひ年貢をおさめるか」（橋本英吉）、「現段階の植民地文學の第
一の任務は、じつくりと落ちついて、殖民地のリアルを方法をあやまたずに仔
細に書くことです。たとへば朝鮮の張赫宙君など、所謂左翼の作家でないにも
拘らず、尚彼の描く貧農、淫賣婦等のリアルな生活は、文學として最も大事な
點を讀者に訴へてゐる所があるではないか」（細田民樹）、「民族の最大多数を占
める労働者、農民、小生産者等の氣分や生活の利害の上に立つて、物事を觀察
し、その結果を描いて行くようにすれば、多くの人々を感動させうる藝術が生
れるだらうと思ひます」（貴司山浩）、「植民地文學の行くべき道はその地方色を
生かす事に一つの途は有るべく」（石川達三）、「植民地臺灣の文學運動は、その
土地の労働・勤勞階級の生活的特徴によつて、當然何等かの特徴を持つであら
う。」（槇本楠郎）というように、地方主義文學の方法で植民地文學を發展させ
ようとする方向が主流となつていた。地方主義文學の方法が当時多くの左翼作
家によつて考えられていたのは、「植民地文學も資本主義國家文學も、正しく進
むべき道は一つきりないでせう。現實を正しく全體的な觀點に立つて描くこと。
但し、植民地文學の場合は、一層外動的制限が多く従つてその描きかたは一層
工夫されなければならない」（藤森成吉）という見解の示すように、プロレタ
リアの精神を地方主義文學の書き方に隠すことによつて、植民地文學を發展させ
る意図が見られる。

張文環は『フォルモサ』、台湾文芸連盟、『台灣新文學』の同人として、『台灣
新文學』のコラムに意見を發表していなかったが、1935. 12. 28に『台灣新文學』
の創刊号に「過重」を寄稿した上で、1936年4月にまた「民族差別の新聞なん

て」、「新民報や臺灣新聞以外は取るな！」²¹⁴と、植民地における民族階級差別への批判を表している。農婦を通して農民層の被抑圧を描き、知識人の道を歩もうとする子どもが現実を見詰め、植民地の現実に目覚めたことを描いて、「地方」の風物、人間、経済的事情を表現した「過重」は、まさに農村の労働階級の現実生活を描く当時の地方主義文学の動向に繋がっていると伺える。

二、国民国家統合に置かれていた植民地知識人の重荷

「過重」は「式場はもう奇麗に飾ってあるだらう」、「若し美しい女の子の傍に晴着を着ない男の子が立ってあたら、なんと云ふ不調和だらう」²¹⁵というように、小学生の健の視点を通して、公学校の生徒の祝日の「旗日」に対する台湾人の子どもの憧れを描き出している。許佩賢の指摘によると、植民地の近代学校で行われた各種の儀式や典礼は、生徒や保護者以外のより多くの一般民衆に、「学校」という存在が「国家代理人」、「文明代理人」の重役を担っている²¹⁶。地方主義文学の動向に繋がっている「過重」はその一方で、植民地における近代教育による国民国家統合のことに触れていると伺える。それについて、陳建忠は健の文明憧憬を植民地教育でもたらしたコロニアルモダニティ²¹⁷と指摘している。「先生も何時か教壇で云ったやうに、そしてサーベルを指し乍ら「これですよ、勉強してゐるものは、判任官ですよ」、「金モール、あゝ金すぢ、健は息を殺し乍ら天秤棒を滑らさないやうに帽子を脱ると、金モールをつけた陳先生に最敬禮をした。」という描写から見られるように、コロニアルモダニティに影

²¹⁴張文環「明信片」（1936. 4. 1『台湾新文学』）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2001

²¹⁵張文環「過重」（1935. 12. 28『台湾新文学』創刊号）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2001（電子資料であり、ページ数が記されていない、本節におけるテキストの引用はすべて同じ資料。）

²¹⁶許佩賢『植民地臺灣的近代學校』遠流出版，2005，P49（原文：「在學校舉行的各種儀式與典禮，則是學校在向學生家長之外的更廣泛的一般民眾發出訊息，宣告「學校」的存在，並展現其作為「國家代理人」及「文明代理人」的角色。」）

²¹⁷陳建忠「一個殖民地作家的自畫像——論張文環小說中的成長主題」（『日據時期臺灣作家論：現代性・本土性・殖民性』2004. 08）柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011，P185

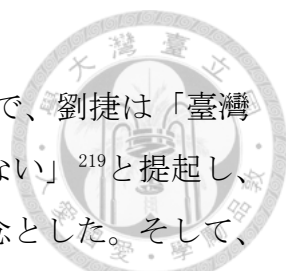


響された主人公の健は功利主義と物質文明を中心価値とした近代教育に憧れていた。

健は故郷の山郷と学校のある町を対置して、「あゝ或は学校に行かないほうがいゝかも知れない、と思ふとつくづく自分が町の子に生れて来なかつたことをひどく不幸に思ふのだった」と考えた。健の憧れは、農村の存在と対置する都市の近代化に対する憧れを反映している。「母のことなぞは忘れ」たように、心が学校の式場に馳せその一方で、「息苦しさに喘いでゐる母の姿を見ると、健は急に戀しく思ひ、そして気の毒に思った」、「或は母はこの坂の上で血を吐いて死ぬかも知れない。健はかう思ふと矢も楯も堪えなずに坂の下へ駆け下りて行った」ように、母親に対する子どもの依存心理を抱いている。そして、町の市場に着いたとき、健ははじめて市場でバナナを売る母親が、町の狡猾な商人から安い値段でバナナを買い取られ、税務管理の幹事から重い税金を取られたことを目撃した。母親は悔しくて幹事を罵ったが、健はそれを聞いて恐ろしく思った。そこで、「つい或る朝の父が思ひ出されて」「何か後から誰か追駆けて来やしまいか」「来たら母も父のやうにさらはれて行きはしまいか」というように、父が植民者に反抗して市場からつれられていってしまったことを思い出した。健は文明の外形に心を取られて、父が連れられていくことを忘れていたが、経済略奪された母親のことを見た後、母への強い依存心理によって、被植民者としての悲惨な思い出が蘇り、文明憧憬や立身出世を追求する立脚地が美しい夢の剥がれた現実環境であったと気付いた。

それについて、陳萬益は父権の略奪を被植民の隠喩とし、主人公の健の立身出世への憧憬から目覚めた現実を、「無父的被殖民者の生存現實」²¹⁸（父をなくした被植民者の生存の現実）と捉えている。その一方、健の出会った現実も、自分の運命の主導権を失われた被植民者の背負う経済搾取の事実である。それに関して、台湾文芸大会（1934. 5. 6）を契機に成立し、「文芸大衆化」を図る台湾文芸連盟は、『フォルモサ』同人の鼓舞を受けて、リアリズムの文芸思想で反

²¹⁸陳萬益「一個殖民地少年的啟蒙之旅—析論張文環小說〈重荷〉」（「中央日報」19版1996）柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館2011, P175



植民意識と島内現実への凝視を喚起する使命とした。その中で、劉捷は「臺灣文學今日の機運が決して臺灣の經濟社會や政治と無関係ではない」²¹⁹と提起し、資本主義經濟及びブルジョア階級の植民者との対抗を文芸理念とした。そして、張文環は台湾文芸連盟の発行した機関誌の『台灣文藝』に随筆「自分の悪口」(1935.5)を寄稿し、「自己批判」をもって「臺灣精神文化の一兵卒」²²⁰を担うと述べ、連盟理念を認めた。その上で、1936年5月にまた随筆「強ひられた題目」を寄稿し、資本主義への対抗のために始まった初期ファシズム²²¹への觀察として、「ファッションの流行は弱小民族の、民族自覚を捉ながした一つの契機になつてゐるには違ひない。臺灣の古年(注：年寄り)が社會に歡心を持ち一般の生活もかう云つたやうな現象に拍車をかけられて、生活程度が段々高めつゝあることも疑ふことの出来ない一つの事實である。しかし社會經濟や家庭に出来る斯う云つたことは必ずしも頼もしいとは言へないだらうと思ふのである」²²²と述べている。その論述の内容は、連盟の社会改革の趣旨と合致する一方、初期ファシズムの意義を民族自覚の動向を提起しながら、生活水準の高まるブルジョア社会に轉換していく中で、物質文明にばかり心をとらわれ、被植民の問題を思考しなくなる台湾植民地社会の現象を憂慮し、植民が資本主義の浪に乗じてきたことへの認識を表している。「過重」に提起されている父権の不在をもっと精確に言えば、近代化の資本主義の潮流に奪われた植民地父権社会の主体性である。その主体性の喪失によって、健の価値観の選択が功利主義と物質文明の価値観を中心とした近代教育、帝国のもたらした国民国家統合とそれに伴った近代化によって導かれていたのである。

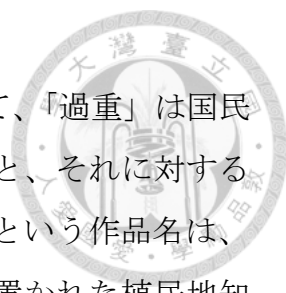
經濟略奪された母のを見た健が、文明憧憬と立身出世願望の幻滅、担い

²¹⁹劉捷「續臺灣文學鳥瞰」(『台灣文藝』2卷3号, 1935.05(台湾文芸連盟))『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001, P116-121

²²⁰張文環「自分の悪口」(『台灣文藝』2-3, 1935.05(台湾文芸連盟))陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

²²¹「ファシズム」は今では「独裁主義」「全体主義」の意味として捉えられてきたが、実際にその初心は資本主義に圧迫される労働者や一般民衆の利益の向上を目標とした。資本主義と社会主義を超える「第三の道」として求められていた。ここで張文環は社会改良の意味としてファシズムの発生を取り上げているのである。

²²²張文環「強ひられた題目」(『台灣文藝』3-6, 1936.05.29)陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011



でいた農作物のバナナに急に重きを感じた。その表現を通して、「過重」は国民国家統合のもとで知識人に対する資本主義・父権制度の支配と、それに対する被植民者の目覚めを巧妙に描き出している。「過重」(重荷)という作品名は、まさに帝国主義のもたらした国民国家統合とそれに伴ったに置かれた植民地知識人の重荷を象徴している。そして、「学校の所迄来たときは、もう君の世の合唱は静かな湖水のやうに流れてゐる。——學校に行きたいと、健はもう云ふ元気を失つてしまつた」という作品の最後の描写は、生活の現実につかつた被植民者の憧れの幻滅を通して、国民国家統合とそれに伴った近代化への懐疑を表している。ただ、生活の現実に対して途方を知れなく、ただ母の暖かさに縋りながら道に迷っていた健の姿も、まさに近代化の中で主体性を失い、彷徨いを続けていた植民地知識人のことを象徴している。「過重」は、地方主義文学の題材を通して、日本帝国の国民国家統合に置かれていた台湾植民地の知識人の重荷への自覚を示している。

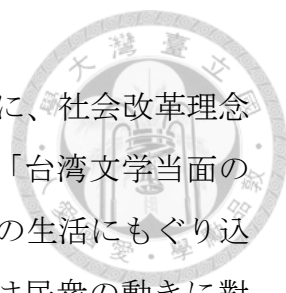
第三節 『山茶花』—国民国家統合に影響されている植民地社会

一、台湾植民地における資本主義・父権体制問題

『山茶花』は 1940. 1. 23~5. 24 の間に、被植民者の台湾人の立場で報道する「台湾新民報」に連載されて、張文環が 1936 年の転向風潮、1937 年の日本主義の台頭、1938 年の帰台を経て創作した作品である。文明開化と近代教育の環境で育った賢と娟が、性別と進学の実験の違いによって、半封建社会の中で異なる運命を送り、最後に娟に対する賢の幻滅で、賢が娟を残して東京へ進学するという内容を物語っている。

藤野雄士は張文環の育ちの環境に照らし合わせて、『山茶花』を張文環の「半生の自叙傳」²²³と捉え、張文薫、柳書琴はさらに張文環の生まれ故郷の嘉義梅山

²²³藤野雄士「張文環と『山茶花』についての覚え書」(『臺灣藝術』第 1 卷第 3 号 1940. 05)



郷と作品の関連性²²⁴を考察した。張文環は、1936年6月7日に、「社会改革理念と「文芸大衆化」を図る「臺灣文藝聯盟東京支部」の開いた「台湾文学当面の諸問題：文聯東京支部座談会」に参加し、「作家が現代の民衆の生活にもぐり込んで、その生活的要求を容れてやるのが大事です」、「作家は民衆の動きに対して常に敏感でなければならない筈です」²²⁵と発言し、植民地の人間を觀照する姿勢を示した。張文環が自分の成長経験を題材にしたと認識されてきた『山茶花』は、「過重」以来、地方主義文学の動向に対する関心のほかに、台湾文壇の「文芸大衆化」の潮流と深く関連していると伺える。柳書琴は『山茶花』の主人公の名前、「賢」の読み方が「過重」の「健」と同じであり、植民地の知識人への造形に類縁性がある²²⁶と指摘している。『山茶花』は確かに近代学校に進学する子どものことを描き、「過重」と同じく文明開化の都市と山郷の問題を取り扱っている。一方、主人公が青年に成長していく過程も描き、「過重」の後身だと言える一方、短編の「過重」に比べて植民地の世界をより克明に描き出している。

まず、『山茶花』は賢の父の楊徳義の商売について描き、誠実な楊徳義に対して、山中の農民を搾取して山の物産で儲かるずるい町の商人の存在²²⁷（「交流（一）」）を提起している。町の商人の経済略奪は、「都市一田舎」という近代化の広まりの過程において、山郷に侵入した資本主義を象徴している。そして、作品はさらに賢の幼馴染の錦雲と娟という両姉妹の運命への描写を通して、資

中島利郎, 河原功, 下村作次郎編『日本統治期台湾文学・文芸評論集第三卷』緑蔭書房, 2001, P293-294

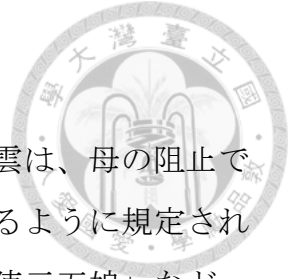
²²⁴柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』（聯經, 2009, P361-384）、張文薰「「故郷」記往與想像的敘事學 論張文環文學之梅山地區書寫」（『臺灣文學研究集刊』2010）

柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館, 2011, P339-364

²²⁵台湾文芸連盟「台湾文学当面の諸問題：文聯東京支部座談会」（『台湾文藝』7, 8 卷 1936. 8. 28）
陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

²²⁶柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』（聯經, 2009）は、「「賢」、「源」、「健」等讀音酷似(ken 或 gen)的青少年們似乎是異名同體的」というように、『山茶花』、「論語と鶏」、「過重」の主人公の関係性を捉えている。実際に、「過重」は文明開化、実利社会のみ取り扱い、『山茶花』は文明開化、封建思想、実利社会の問題を描き、「論語と鶏」は旧習迷信、実利主義、文明開化を描いていることから見られるように、些かな違いがある。

²²⁷張文環『山茶花』（1940. 1. 23～5. 24 「台湾新民報」）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011。（電子資料であり、ページ数が記されていない、本節におけるテキストの引用はすべて同じ資料。）

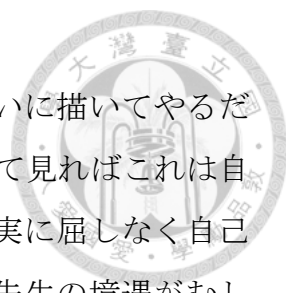


本主義の問題と絡む植民地の父権体制の問題を描いている。

父親から漢文の血筋を受け、古典美人として期待された錦雲は、母の阻止で新式学校に通うことができなく、父母から婚姻に人生を捧げるように規定されている。それで、彼女は「陳杏元和番、孟姜女、山伯英台や陳三五娘」など、恋愛中心の女性の読み物で描かれる「昔の秀才がお姫様に戀されて、惨々と苦勞し、飛躍して世の中に出た喜びの話し」（「村の娘」（二））を通して、自己陶醉をすることしかできなかった。そして、父権体制のもとで、錦雲に対する母親の支配は、「子どもを愛する愛情まで算盤をはじき乍ら、愛情を施してゐる」（「残されるもの」（三））という妹の娟の観察のように、歪んでいき、錦雲は時々親孝行を強いられるように家事の手伝いに酷使されていた。その上で、誠実な簡家との縁談に結果が出なかった結果、親の言いなりに好きでない物持ちの葉家に嫁ぐ運命を迎えなければならなかった。錦雲は女に生まれた自分と、男に生まれた賢の運命の違い²²⁸をしみじみに感じ（「村の娘」（四））、「父が言うてゐるやうに、おんなは種子と同じだ。いゝ菜葉に植えたいと思ったところでうまい具合にその土にぶつかかなければどうしようもないではないか、凡て天命にまかしたほうがいゝ」（「巢立ち」（一））、「詰まらないわね、女に産まれてきて」（「未亡人」（三））と、父権体制に支配される運命への諦観を示した。錦雲の結婚は、万物が凋落し始める秋を背景とした。「人間は植物に例へられてゐ乍ら植物よりも不幸になってゐる」（「未亡人」（八））という娟の観察のように、『山茶花』は封建父権の蒙昧な環境に囚われた女性の悲運を色濃く表現している。物持ちと結婚した錦雲は、その後「金の腕環や金の指環、耳飾から化粧までけばけばして」（「未亡人」（六））、「物質の展示を通して自分の幸福を暗示する軽薄な女性に変化し、賢と妹の娟に嫌がられた上で、姑の苛めと家庭を顧ない夫のギャンブルへの夢中といった家庭の不幸に遭ってしまった。

一方、「大胆で決断力ある」妹の娟は、「いつまでも草の蔭に掩いかぶせられ

²²⁸「賢が姑丈に連れられてR市の中學校に入學に行く日も錦雲の家へ挨拶にきたが母と娟だけみて、錦雲は洗濯に行つてゐなかつた。そして錦雲は遂残されるものと飛立って行くものが時が立つに従つて分別がつかなければならぬ侘しさと儂さを感じるのである。」という描写がある。



てゐる野菊を大きく高く描いてゐるだけだ。助けてやる見たいに描いてやるだけだ。」(「残されるもの」(一))という遠足で描いた「娟にして見ればこれは自分の心の繪」から見られるように、か弱い錦雲と違って、現実に屈しなく自己主張の強い現代的な女性であった。娟は「大學生と東京へ行く先生の境遇がむしろ羨ましかった」(「残されるもの」(六))と述べたように、島内よりもっと自由で文明を象徴する中心地である東京に行く野心を抱き、封建父権の環境を脱する意志を示している。しかし、父に卒業旅行を禁止された後、両親に反抗して自尊心を守るため、賢からの進学を聞き入れなく、進学の道から外れ、自己の運命を再び「家」の中、すなわち親権至上の半封建社会に閉じ込めてしまった。そういう娟は、純真で優しく姉に愛着していたが、近代化の象徴である村の乗り合いバスが開通してから、「都会的モダンボーイ」に憧れた結果、賢との恋愛関係の亀裂を招いてしまった。その後、娟の病気で二人の関係は一度回復したが、父親同士の阻止で賢に心中願望を打ち明けてしまった結果、雑貨屋の誠実な息子との結婚を勧められ、賢に裏切られたような結末を迎えた。娟の聞いた山の中の女の泣き声は、錦雲の不幸な結婚を暗示するだけでなく、植民地社会の近代化と父権体制に左右される自由恋愛の悲劇を暗示している。

柳書琴は進退両難を植民地青年の普遍的な難題とし、同じ難題も張文環の作品において取り扱われ、「山茶花」(注：椿、のちで説明する)、ゆり、梅、菜種のように憐れで、封建家庭、利益の結婚、俗世の功名、投機や宿命思想に翻弄される植民地の女性たちが描かれている²²⁹と、『山茶花』の描き出した世界を捉えている。『山茶花』は確かにそういうように「現代の民衆の生活」で、近代化の中の台湾植民地社会の実態を表現している。ただその一方、資本主義に侵入された山郷への描写と錦雲と娟の運命への描写を通して、資本主義のもたらした実利主義と父権体制との結合でもたらされた人間支配の現実、及び父権体制における封建思想の根深さも示し、それを捉える知識人の賢の視線のあり方も理解しなければならない。

²²⁹柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』聯經，2009，P383 原文：「進退失據是植民地青年的普遍難題。同様の難題也顯現在張文環筆下，如山茶花、百合花、梅花、菜籽一般，不堪封建家庭、交換婚姻、庸俗功名、投機或宿命思想撥弄的殖民地女性們。」



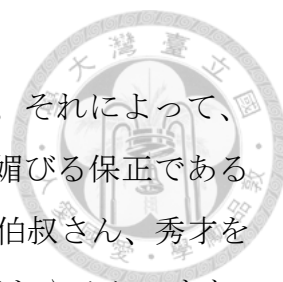
二、国民国家統合に抵抗する田舎恋着と脱ロマン性

張文薫は『山茶花』における反近代の特質を主人公の賢の「田舎憧憬」で提起し、その「田舎憧憬」の投射の内容を「娟+昔+RK 庄」に見出すことによって、知識人の賢の伝統回帰の傾向があると指摘した一方、「山の奥、資本主義に侵入されず、心の原風景が守られる所」のRK 庄は結局、賢の「概念化されたどこかある場所」²³⁰だと指摘した。その指摘は『山茶花』への理解には重要であるが、「田舎憧憬」は果たして賢の伝統回帰の傾向なのかという疑問がある。ここで、田舎恋着という言葉に書き換えて、賢の田舎恋着の形成の原因と結果を論じながら、『山茶花』に表現されている知識人の賢の視線のあり方を見出していきたいと考えられる。

小学生だった賢は、「鋭敏な、そして理知的なひらめき」、「村の文化の開拓者」である女教師の啓蒙的役割に恋憧れ、「文明と幸福の空気」を吸いながら、満州軍歌、「金色夜叉」のテーマソング、卒業式の「蛍の歌」を口ずさんで面白がっていた。（「映雪」(二)）隣家のお姉さんの錦雲も、女性労働力を動員するための義務教育の普及の中で、「先生のサーベルや金モールの肩章に憧れてゐる」（「残されるもの」(六)）ように、教師による立身出世に魅せられ、女教師になろうとした。賢の恋と錦雲の夢は、国民国家統合を背景に、被植民者が植民者を啓蒙の使者と見なす文明進歩観と功利主義観が見られる。『山茶花』は、まさに山郷の近代化、子どもと女性の価値観を通して、啓蒙と功利思潮を代表する近代学校を文明統制の機関として照らし出している上で、子どもの歌っている満州植民地の軍歌を通して、未開化の植民地から「忠君愛国」の戦力を作り出す帝国主義の支配を示している。

そしてその中で、賢は文明憧憬の寄託の対象である女教師とその恋人の大学生が一緒に歩いているのを見て、強い失望と失恋感覚を心に生じたのち、「開眼」

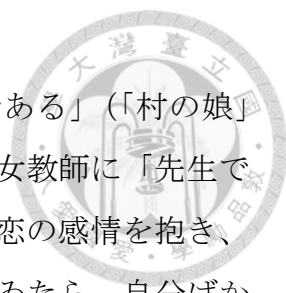
²³⁰張文薫『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』（2005）「第四章 価値回帰の道」を参照。



の一章において都会の物質文明に対する失望が描かれている。それによって、近代化に対する賢の現実認識が明確になっていく。為政者に媚びる保正である嬋の父に連れられて中学校の入試を受けに行く場面で、「保正伯叔さん、秀才をひと群つれて、考教に行くのだね。狀元に合格したら婿選びをやるんですな」（「別離」(八)）という村民たちの軽い冗談と保正の期待の視線を受けて、神経質で真面目な賢は憤った。賢の憤りは、婿選びの伝統と日本新式近代学校の立身出世主義の融合という、植民地における功利主義的価値観の広まりへの怒りである。その後、賢は高等学校の文科に受かったことで、親戚たちに医科でないと「出世がまはりくどい」、将来金借りてくるという理由で疎遠されていった。その中で、賢は父の教育で女学校に行つて「ますます貴族的な態度で村の娘達に臨」むようになった嬋から離れる傾向を示している。近代教育や近代化社会で形成しつつある物質文明、功利主義的価値観に対する賢の反感は、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する一種の反動であると伺える。

そして、その反動の遠因は、賢を生み育てた父の薫陶に見られる。父の楊徳義は、息子の学ぶ新知識をあまり知らなく、時代の潮流に任せて息子に進学させ、三国誌などの古書に夢中して山の中の農夫や取引の客たちと英雄伝を講じる古風な趣味を持つ旧社会の人間の生ぬるい一面はあるが、実利思想の形成していく社会の中で、卸売商の栄利を経営する商人として、山中の農民を搾取して山の物産で儲かる都会のずるい同業たちの敵視を恐れず、山郷の農民たちと共生できるように、誠実な商売を一貫の原則として単純な山郷育ちの鷹揚な性格を持っている。近代文明に対して違和感を感じた賢は、学校の休みの間、都市から RK 庄に帰った時に、「お父さん、僕は昔僕達が邊鄙な部落で暮らしたと同じやうにやりなほしてもいいのです」（「復活」(三)）、「お母さん、僕は都会に居れば居るほど、性格が還されて、かへて田舎にみたくなるのですが」（「復活」(四)）と言ひ、両親に自分の田舎回帰の願望を語りかけた。そういう父の存在が代表する生まれ故郷の人心への愛着が、賢の田舎恋着の原因である。

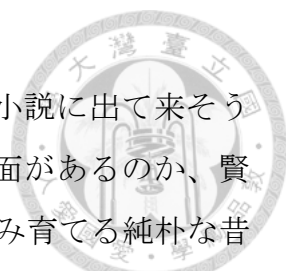
賢の田舎恋着は、その一方で、「花嫁さんが翌朝になつて臺所で甲斐々々しく自分のために働くと思へば、牛を急ぎ立てる青年の聲まで朗らかなものに聞え



る。賢は自分もほんとうは一ばんそれになりたいと思ふのである」(「村の娘」(一)) というように、女性への憧憬と結びつけている。賢は女教師に「先生であると共に姉さんのやうな気がした」(「映雪」(一)) ような初恋の感情を抱き、隣家の優しい姉さんの錦雲に対しても、「もし姉が自分の家にゐたら、自分ばかりではない、姉も非常に幸せだ」(「村の娘」(八)) と憧れていた。いつも弱くて可愛い眼差しを投げてきた嬋のことに對しても、権威に媚びるその父親がいつか落ちこぼれる羽目に遭い、嬋が生活難で石榴売りの娘の陳秀のようになり、善良な性格をずっと保っていくと想像した。賢の恋愛心理には、「優しい娘が好き」(「孟麗君(四)」) という原型が見られ、自分の生まれ育った故郷の純朴な人心に繋がっている。そして、賢は、地主階級の父によって生まれ、田舎の純朴さの中で育ち、近代学校に通って文学趣味を持つ理想の女性(「復活」(四))²³¹ を結婚の対象と想像したが、賢の理想に一致する女性の存在は、本当は作品中のどこにも見当たらず、むしろ田舎の生活に立ち戻ろうとした賢の「自分の花婿の姿」が、鏡像のようにその憧れともっとも一致している。女性への恋に繋がる賢の田舎恋着は、まさに故郷における自己形成への認同の投射であり、純粋な故郷の人間美への恋着の現れである。

作品は後半部に、公学校を退校した幼馴染の娟の伏線が現れてきている。幼馴染の娟は、卒業旅行に行かせない両親の禁止で、公学校から自主退校することによって、近代教育の道から外れ、「尼姑たちの女中にならうときへ考えるのである。尼姑といへば彼女には純真な百合の花のやうに感じて、そんな女になら使われてもいいと考へるのである」(「残されるもの」(六)) というように、純粋だった姉の錦雲に憧れ、山裏に薪拾いに行き、田舎の自然に触れる成長生活を送った。そういう娟との再会で、賢の心境はこのように描かれている。「村

²³¹「賢は自分の戀の対象を何故かいつも田舎娘のやうな気がした。そして自分の花婿の姿も、田舎の見知らぬ花嫁の家の庭に立つて、庭のすみで咲いているカンナの花や茶花の花を眺めている姿であつた。これは賢の幻想であり、夢であつた。田舎の金持の娘が女學校を出て、家で小説に読み耽けてゐるところへ、賢の縁談を持ち込むという安配である。それが自分の理想の妻になるのだった。二人の結婚式は殿様と姫様のやうなものに想像された。妻の里はある部落の物持ちで、庭には先刻述べたやうな花が一杯咲いてゐた。伶俐な妻は田舎の花そのままの純真さで自分を迎える姿は牽牛織女の姿そのままのやうな気がした。」

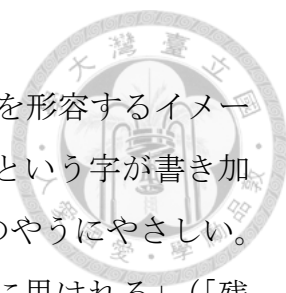


の娘のもち草を摘む姿は遠くに見えて、賢は思はずフランス小説に出て来そうな美しい場面に心を打たれた。自分の村にもこんな美しい場面があるのか、賢は嬉しくなってくるのである。」（「復活」(六)）賢は自分を生み育てる純朴な昔の田舎を、フランス小説²³²に描かれている田園の理想像と捉え、そしてその中における娟の存在を認めていた。賢の視線及び、賢と娟の名前の読み方が同じ（「ケン」）であることが暗示しているように、立身出世の道を歩む賢が故郷回帰の感情を抱いて、田舎の純粹さの中で育った娟の存在に出会ったことは、まさに賢における故郷認同という自己形成の運命的な結合を示している。

問題は、功利主義的価値観と資本主義化への批判精神を抱いた賢の田舎恋着のゆくえである。賢は運命と戦わない錦雲に失望した結果、「姉は女なのだ。だからいつか嫁がなければならぬ」（「巣立ち」(六)）と、諦めの気持ちを抱き、父権体制が植民地の人間を支配している認識に辿り着いた。そして、物質文明の象徴である汽車の運転手さんに近寄る娟の裏切りに激怒したあまり、「日本の教育は、内容を叩き直すよりも、先づ形式を重んずるやうになつてゐるので、かう言つたやうな先走りの女がふえてくるのも無理ではない」（「復活（五）」）と、故郷の理想像とした相手が実際に国民国家統合とそれに伴った近代化でもたらされた物質文明への皮相な追求の気風に染まっていることを認識した。娟の文明憧憬で起した浮気事件を描いた章にアベ・プレヴォーの『マノン・レスコオ』の題名が付けられていた。『マノン・レスコオ』は、「ファミ・ファタール」（男たちを破滅させる運命の女）をテーマとしている。その題名はまさに娟が賢の田舎恋着を破滅させる運命的な存在だと暗示している。

『山茶花』という作品の名前の付け方のイメージとした花が、「山茶花」か、「椿」かについて、森相由美子はすでに作品論において、『山茶花』の花のイメージは、平開し花びらを散らし秋に咲く「山茶花」の品種ではなく、平開しなく花ごとく落ち春に咲く「椿」の品種（「マノン・レスコオ」(三)）であると指摘している。確かに、新聞に連載された作品の挿絵（「残されたもの（三）」と

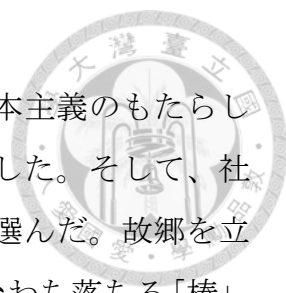
²³²ここで指しているフランスの小説の描いた田園は、『山茶花』の「復活（四）」に提起されているゾラの『居酒屋』と『ナナ』、そして「マノン・レスコオ」の題名に関連するアベ・プレヴォーの『マノン・レスコオ』の描いた田園のイメージである。



「マノン・レスコオ (三)」²³³) から見れば分かるように、娟を形容するイメージとしての花が平開しないように描かれ、その傍らに「春」という字が書き加えられている。そして、「姉は花に例へたら白い椿の花が百合のやうにやさしい。しかし娟はまだ堅い蕾であるが、紅いすこしつこい花のやうに思はれる」(「残されたもの」(三)) という賢の観察はつきりしめしているように、「椿」こそが『山茶花』の使う花のイメージである。田舎娘の娟に連想するこの「椿」イメージを、賢は「この花はいかにも薄命で他の花よりも、果敢ないと云ふよりもこの花は感覚がにぶくて、執念がないやうな気がするのだった」(「マノン・レスコオ」(三)) と捉え、田舎娘の純朴な気立てを堅持できない深い失望を示している。「そんな田舎はどこにあるか賢には分らなかった。そんな部落に女学校を出た娘があるだろうか、賢はやっぱり幻滅の悲哀に打たされ」(「復活」(四)) というように、作品は賢の田舎恋着を崩壊させる方向に導いていると伺える。そして、娟は自分の解釈を聞かなく許してくれなかった賢を激しく恨んだが、賢によって「不埒」「性が悪」「淫弄的な女」だと思われかねないと考え、賢のまへでは美しい女神になる」「乙女の死」(「マノン・レスコオ」(四)) というように、自己形成の崩壊による自殺願望さえ思い浮かび、姉に恋の不毛を吐露して思わず涙を流したのも、純粹だった姉を憧れた彼女の自己形成の崩壊を示している。そのように、『山茶花』はもはや理想郷ではない故郷から反近代の理想像を求める知識人の幻滅を通して、植民地の抱える資本主義の侵入と父権体制における封建思想の残存の問題をさらに浮き彫りにしている。

賢は、最後に父親同士に自由恋愛を阻止された娟に死と駆け落ちで肉迫された時、「僕の場合は、教育問題は別として、僕の複雑な感情生活がやがて君を苦しめることになりはしないか」(「姉帰る」(六)) と拒絶した。賢の態度は無責任の行為として指摘されてきたが、娟を切り捨てた理由は、まさに田舎恋着の崩壊と関連している。賢は、失望の結果、「農園とい云つたやうなのとかのものは到底望めさうもない」(「マノン・レスコオ」(三)) というように故郷への客

²³³張文環『山茶花』(1940. 1. 23～5. 24「台灣新民報」) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

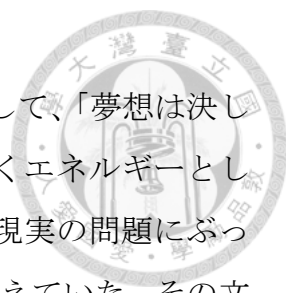


観視を形成し、植民地に残存する父権体制と、功利主義と資本主義のもたらした実利思想と皮相な物質文明への追求という社会問題を意識した。そして、社会環境を改善する答えを求めるために、賢は東京への進出を選んだ。故郷を立つ時に、悲しむ娟を「枝を離れて籬に落ちかゝってゐる花」すなわち落ちる「椿」のように例え、「胸が一杯になって、娟の顔が目には浮かんでくる」（「姉帰る」(二)）のような哀れの心情が生じたのも、賢の田舎恋着の幻滅を示している。社会問題への改善を求める賢の東京進出は、もはや文明をもって伝統を否定するという1920年代の台湾知識人のような思考に基づいた行動ではなく、資本主義と父権体制の問題への解決を求める行動、国民国家統合に伴った近代化に対する反動を示しているのである。

『フォルモサ』の発言者である吳坤煌は、「臺灣の郷土文學を論ず」一文で、「現實の臺灣は最早昔日の面影一もない廿世紀の社會相を以て吾々に肉迫してゐる。かゝる故郷にどうして尚過去のローマンスが藏されてゐるでせうか？」²³⁴と、近代化の中の台湾植民地社会の現実への凝視を提示している。そして、「若し臺灣人の生活を描写して其の作品に民族的動向がなく、地方的色彩が香ふてゐなかつたならば、今まで主張されてゐる郷土文學ともならない」と提示し、当時流行っていた自然主義理論を「退嬰的なものであり、過去の反趨による反動的文學にしかならない」と捉えて、1930年代島内の郷土文学論を批判し、「世界の新興資本主義國家」、「資本主義社會、官僚社會の壓迫」と闘える、階級問題の加えたリアリズムの文芸思想を要請している²³⁵。それで、1933-1934年の短い間で発刊した『フォルモサ』は、プロレタリア文学への指向性として、文学の社会性を重んじ、自然主義の写実性を参考しつつその「地方色」描写における退嬰的ロマン性を消去させ、島内文壇の直面していた父権体制問題と資本主義問題に加えてブルジョア社会への階級批判を文芸的課題としていた。そして、『フォルモサ』に加わっていた張文環は、『台灣文藝』を脱退しロマンシズム

²³⁴吳坤煌「臺灣の郷土文學を論ず」（『フォルモサ 2』1933）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房，2001，P265

²³⁵注 234 と同じ資料，P262-273



を通して社会改革の主体的意識²³⁶を求める楊逵の呼び声に対して、「夢想は決して現実から隔離して走るものではなく、現実を支持して行くエネルギーとして夢想をすれば、……しかしこれを云々するよりも、台湾の現実の問題にぶつかったとき、そこに作家の意欲があるのではないか」²³⁷と答えていた。その文芸理念の表明は、実際にリアリズムを重視する『フォルモサ』の脱ロマン性にも関連している。故郷の理想像の崩壊を描き出した『山茶花』は、まさに植民地の人間の生活を描写する創作理念に基づいた上で、資本主義と父権体制の問題を批判していた『フォルモサ』の理念も継承し、被植民者を支配する近代化社会の問題を照らし出し、社会問題の改善を求める主人公の意図によって、国民国家統合とそれに伴った近代化への批判を示している。

第四節 「閩雞」—資本主義と父権体制への反抗に隠されている国民国家批判

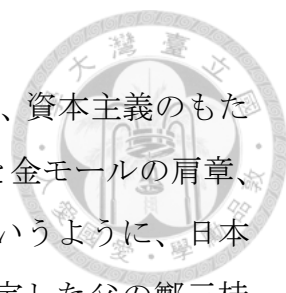
一、資本主義と父権体制の環境への反抗

張文環の「閩雞」は1942.7.11に「台湾文学」2巻3号に刊行されている作品である。箱入り娘の月里が父の林清標の利益交換で、鄭三桂の息子、臆病で病弱な阿勇に嫁がせられ散々苦勞をし、情欲本能の展示をもって自分を見離れた父兄に復讐しようとし、最後に出稼ぎ先の阿凜との恋愛が芽生え、村人の罵りに耐えた結果、体の不自由な阿凜を背負って碧潭に身を投じて心中して、夫の阿勇を一人に残したことを物語っている。

「閩雞」は、「TR庄とSS庄とのあひだに製糖會社の鐵道が敷かれて、SS庄の

²³⁶楊逵「台湾文壇の近情」((1935)『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001, P201)は、「台湾文芸には自然主義の如き暗黒面の綿密な描写に終始する文学は要求されず、“光を求める精神”“希望を呼び起こす力”が最大の関心事となって居る。広い意味でのロマンの精神である」「ロマンを盛る文学は、何より現実の科学的觀察を必要とするものであり、表現に於いても最高のリアリズムが必要である。」と述べている。

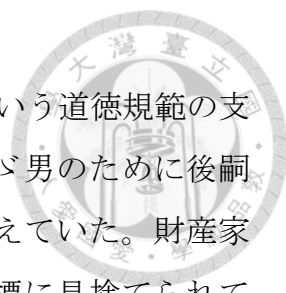
²³⁷張文環「強ひられた題目」(『台灣文藝』3-6, 1936. 05. 29) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011



産業が、大いに振興した」²³⁸という社会背景への描写を通して、資本主義のもたらした物質文明の発展を示している。その中で、「金筋の帽子と金モールの肩章、それからサーベルさげて、公学校に行き、恩給をもらふ」というように、日本帝国のもたらした近代教育の立身出世の道を息子の阿勇に規定した父の鄭三桂は、国民国家統合に従属した主体性喪失の台湾植民地の父権像として現れている。一方、「閑の折々に家庭の女として守るべき婦徳を言いさとす」林清標と、「女の血縁は里にあるけれど、しかしそれは女の運命に何の関わりもない。女の運命は婚家と同じである」と聞かされた娘の月里との親子関係に示されているように、台湾植民地の近代化社会は、道德規範による父権体制の支配性の問題が残されている。さらに、林清標は遠い親戚の鄭三桂の薬屋を手に入れるために、その投資慾と人格の不評につけこんで、娘の月里を三桂の息子の阿勇に嫁がせることを利益交換の条件にしたことが描かれている。息子と娘で利益交換をした林清標と鄭三桂の行為は、資本主義のもたらされた実利主義と父権体制に残存した道德規範の結合という近代化社会の深刻な問題を示している。

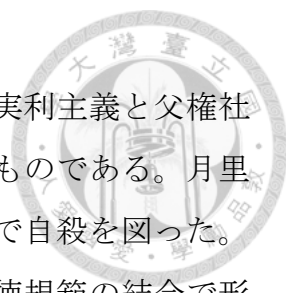
阿勇は公学校に行く立身出世の機会を逃し、父の投資が村中の評判をもらったことで恩師の紹介で村の役場に入ったが、汽車路線の延長と不動産の値上げへの見込み違いで借金を負い病気と苦悶による鄭三桂の死と一族の没落とともに、職場の有閑階級と付き合えなくなり、仕事の情熱と意欲をなくした。鄭三桂の薬屋にある木製の「閩雞」が、村の知識人によって「去勢はすなわち虚栄をつくり、虚栄は即ち基礎をもたない」と指摘されたその意味は、まさに阿勇の一家の運命を示している。その中にも、国民国家統合のための近代教育の価値観に従属し、知識人の道を決めさせた父権体制の根深い問題が顕れている。そして、清標の利欲心で阿勇に嫁いた妻の月里は、結局失意のあまりマラリアに患った夫を抱えながら、豚を養って出稼ぎしたりして、貧困な生活を過ごす運命に陥った。阿勇と月里の運命は、まさに台湾植民地の近代化社会における資本主義の発展と父権体制の残存の結合による人間支配を反映している。

²³⁸張文環「閩雞」(1942.7.11『台湾文学』2巻3号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011(電子資料であり、ページ数が記されていない、本節におけるテキストの引用はすべて同じ資料。)



それに対して、「女の運命は菜種子とおなじやうなもの」という道德規範の支配を教えられ、嫁に出される前に月里には、すでに「女はたゞ男のために後嗣をつくる機械でしかないだらうか」という懷疑の自覚が芽生えていた。財産家と関係を結ぼうとして没落の三桂とかかわりたくない父の清標に見捨てられてから、さらに「名望家を目指してる両親の犠牲になった」恨みを孕み、「両親の腹腸をさらけ出してやる」ように、両親の虚偽と利慾心に深い憎しみを抱いていた。その上で、月里は「雨に羽をたたきおとされた惨めな鶏」と軽蔑された夫に付着される自分の価値の下がりやを恐れ、自信を取戻すために化粧から慰藉を求めようとしたが、病気の夫を抱える女の化粧を禁止する村のしきたりに制限されるのを感じ、「自分は女ではないか。何故化粧していけないのだらう。誰もしてはいけないと云はなかつた筈なのに、月里は心の中で問答をはじめるのである」「寂しさが一どにこみあげてきて、胸が潰れてしまひさうであった」、「途方に暮れる思ひに苦しまれる」と孤独と負い目に苛まれていた。その果てに、とうとう「私は一人の男に愛され、そして愛してはいけないのだらうか。」かうして彼女は思はず自分の眩きにおどろく時もあった」というように、夫以外の男を愛することで父権体制の道德規範の支配を破る意志が形成した。そして、月里は結局父権体制に対する反抗を実行した。そのきっかけを与えたのは、「弄車鼓の車鼓姪」の出演である。客家歌仔戯から影響をうけ、女役が女性によって演じられるようになり、漢文の文言を台湾語に改良した大正十三年の台湾歌仔戯の出演で、月里は多くの観客の前で艶めかしい踊りを展示した。その結果、兄に顔を打たれて侮辱を受けて、「男を見くびり、放埒になった」行為を取り、父の利慾心と自分の尊厳を落とした父権社会の環境に対する反抗が激した。

「村の人達はこの女背徳者を、さかりのついた雌犬みたいと陰口で叩いて非難した。村の人々はやはり、亭主の阿勇に同情し、不埒な妻に攻撃の矢を向けた。」そのように、父権社会の道德觀念に追い詰められていた中で、月里は「環境から飛び出さうとして、光つてる目が、そばから見れば、片輪に見えるのかな」という身体の不自由な阿凜の一句で、精神的啓蒙を感じたように恋に落ちた。「彼の真実の吐露は即ち自分の真実に触れるのと同じである」と思う月里の



恋は、まさに阿凜の身体の不自由に、資本主義のもたらした実利主義と父権社会の不自由な道德規範に縛られた自己投射によって形成したものである。月里は最後に身体の不自由な阿凜を背負って碧潭に身を投げ込んで自殺を図った。月里の自殺は、近代化社会における資本主義と父権体制の道德規範の結合で形成した人間支配に対する反抗を示している。

「若し月里に代っていへるなら、そんなおせつかいな道德的規準を決めるのなら、何故この一組の男女をこゝまで追ひ込んで来なければならない事件に民衆の目は向かないのだろうか。」作品は冒頭から月里の姦通と残される夫の阿勇の不幸を暗示しながら、月里の姦通心理を「道德の規律」の視点で解説することを要請している。語り手がわざと顔を出して提起した「道德の規律」という言葉は、作品の最後に月里の死で木製の「闍雞」を抱えて一人に残され、自己の主体性を喪失し社会環境を打破できない知識人の茫漠を象徴している阿勇のことに関連し、実際に父権体制を指す以外の意味が込められている。それについて、次に「闍雞」の創作背景で提示していく。

二、国民国家批判に繋がる自然主義風のリアリズム

「闍雞」の発表の機関誌である『台湾文学』（1941.05 に創刊）は、実際にリアリズム描写をもって、エキゾチシズムを唱え皇民文学に転じた西川満の『文芸台湾』と対抗するために成立した文芸雑誌である。張文環は随筆「雑誌『台湾文学』の誕生」において、台北帝国大学教授で友人の工藤好美の立場をこのように述べた。「『文芸台湾』と『台湾文学』は対立した。『文芸台湾』は誌上で私を除名する広告をした。台湾大学や高等学校では『台湾文学』に味方する教授と『文芸台湾』に味方する教授が、あたかも二派に別れているかのように見えた。ことに工藤好美教授などは、自分の台湾人弟子に面と向って、文学をやるなら『台湾文学』の連中に学べと言ったので、そばにいた私は、それを聞いて胸がドキドキしたぐらいだった。」²³⁹当時『文芸台湾』と『台湾文学』の対立の

²³⁹張文環「雑誌『台湾文学』の誕生」（1979. 8. 30『台湾近現代史研究』第2号）陳萬益編



一端が伺える。

そして、工藤好美は、皇民奉公会第一回台湾文化賞文学奨「臺灣文化賞と臺灣文學—特には濱田・西川・張文環の三氏について」で、『台湾文学』に発表した張文環の「夜猿」と「閩雞」を論じるに当って、「張文環氏のリアリズムは決して正確に自然主義と同じものではない。たとへば田山花袋の安易さにくらべていちじるしく苦渋であり、その點正宗白鳥に近いものであるが、白鳥のシニシズムはなく、もつとまともで、しんぼうづよい」、「氏のリアリズムは、例へば、すべての自然主義がさうであるやうに、一種の環境的リアリズムである」²⁴⁰と評価した。工藤の評価に基づいて、張文環に私淑した井東襄は「閩雞」を論じるに当たって、「張文環は常に社会の矛盾と対決した作家である」、「張はある事柄を、社会学的（自然主義的）に観察し、そこに問題点を発見し、素材を決定し、人道主義の目でそれを作品化し、具象化した」²⁴¹と評価した。陳芳明の「殖民地傷痕及其終結」一文でも、張文環文学におけるその「自然主義の傾向」、リアリズムの批判精神を取り立てた²⁴²。また多くの張文環研究も工藤の評価を引用して張文環の自然主義風に言及してきた。しかし実際に、工藤の評価は単に自然主義風の提起に留まっていない。工藤は「閩雞」の主人公の月里の行動について、「平面的な自然主義から立體的・劇的なリアリズムの方へ近づけてみる」²⁴³と張文環の描写を評価した上で、さらに歴史的題材に手がけた濱田と西川の方向を取り上げ、「張文環氏はそのリアリズムをさらに深く掘りさげ、リアルを世界の底にある歴史的なるものゝ把握に進むべきではなからうか」、「張文環氏が歴史的立場に高まりあるひは深まることのできるならば、さうすることによつて氏は自然主義的なすべての制限から解放され」というように、リアリズム性を重んじる張文環に建言した。工藤は明言していなかったが、『文芸台湾』と『台湾文学』の対置から推測すれば、彼の望んでいたリアリズムの手法と歴

『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011

²⁴⁰工藤好美「臺灣文化賞と臺灣文學—特には濱田・西川・張文環の三氏について」（『台湾時報』1943.03）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第四卷』綠蔭書房，2001，P412-413

²⁴¹井東襄『大戦中に於ける台湾の文学』近代文藝社，1993，P139、141

²⁴²陳芳明「殖民地傷痕及其終結」『聯合文学』191期，聯合報，1999，P124-127

²⁴³注240と同じ，P413



史観の結合は、皇民文学と対抗できる歴史観を持つリアリズムの文学である可能性が見られる。

日本帝国の国民国家統合に対抗できるような歴史観を持つリアリズムの文学は、実際に1920年代より自然主義の導入として台湾文壇においてすでに模索されていた。有識者の張我軍が『台湾民報』において自然主義を紹介している²⁴⁴ところから見れば、自然主義は1926年頃より台湾文壇によって認識されていた。自然主義は「現実」、「真」、「無技巧」、「客観的」、「生物学原理」、「醜悪」という概念で紹介されていた。台湾文壇では、生物学の原理に基づき人間を生理的に観察するゾライズムと、現実暴露且つ無技巧を主張する日本自然主義の両方からの摂取が見られる。そして、1930年頃、帝政批判が検挙される中で、帝政批判は資本主義と父権体制への批判に転じ、台湾文壇では郷土文学の風潮を巻き起こしていた。当時の最大の漢文雑誌『南音』では、1932年に「社会改造與文學青年」²⁴⁵（社会の改造と文学青年）と題し、文芸を新社会の創造者と旧社会の改造者とした主張が出て、社会の現実を見詰める文芸の姿勢を唱えていた。同雑誌において「文藝上の酥穢描寫」（文芸としての汚い描写）と題した寄稿は「封建遺毒與近代暗病」²⁴⁶（封建の残る弊害と近代化の闇）というように、旧道徳と実利主義、生存競争の現象を批判し、自然主義理論を借りて、未開化の封建社会と生存競争論のもたらした物質慾の暗黒さと戦おうとした。その動向に繋がり、張文環が編集を担当し合法路線を採り、台湾郷土藝術の整理研究²⁴⁷を主眼とした『フォルモサ』は、民族意識の喚起に努力した一方、吳坤煌「臺灣の郷土文學を論ず」の唱えたように、自然主義のロマン性の消去²⁴⁸を求め、写

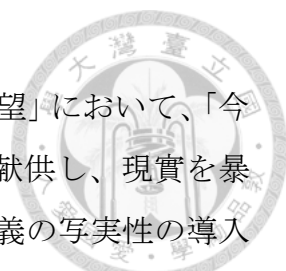
²⁴⁴張我軍「文藝上の諸主義（續）」（『台湾民報』87-88, 1926）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房, 2001, P98-100

²⁴⁵芥舟「社会改造與文學青年」（『南音』1(11)1932. 07. 20）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房, 2001, P207

²⁴⁶KS生「文藝上の酥穢描寫」（『南音』1(8)1932. 05. 22）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房, 2001, P181-186

²⁴⁷劉捷「臺灣文學の鳥瞰」（『台湾文藝』1卷1934（台湾文芸連盟）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房, 2001, P309-314）は、「消極的には従来微弱な文藝作品や現に民間に膾炙する歌謠及び傳説等の郷土藝術を整理研究、積極的には吾人の全精神を以て真の臺灣純文藝を創作する決心である」と述べている。

²⁴⁸吳坤煌「臺灣の郷土文學を論ず」（『フォルモサ2』）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第



実の側面を重視していた。楊行東も同誌の「臺灣文藝界への待望」において、「今の臺灣文藝界は自然主義的な動向のもとに思ひ切つて自己を献供し、現實を暴露してよい」²⁴⁹という評価を述べた。台湾文壇における自然主義の写実性の導入は、近代化社会への観察と結びつけるためのものであり、そして自然主義の写実性による封建性と実利主義への批判は、植民地の父権体制、近代化によってもたらされた資本主義への批判であり、植民地への支配を強めた帝国主義の国民国家統合への批判でもある。

しかし、台湾人を大戦に動員する 1941 年の「大東亜戦争」に向かっていく中で、「今日建設せらるべき新日本文化は、新體制の下に立つ新しき文化であり、然もそれは當然日本的文化でなくてはならぬのである。この事は、云ふまでもなく在来の資本主義文化の否定である事は論を俟たぬ處である」²⁵⁰という「皇民奉公會臺北州支部娛樂指導班」の方針に示したように、資本主義のもたらした実利主義が個人主義の傾向を生じさせることを防ぐために、天皇中心の家族国家観がより強く唱導されていた。『フォルモサ』の階級批判の傾向どころか、父権体制への批判の描写も制限されていたはずである。序章の先行研究の回顧でも取り挙げたが、『台湾文学』に発表された張文環の作品の中で、例えば短編小説の「頓悟」、「地方生活」など、皇民化政策に合わせた文学が見られる。そして、「閩雞」が張文環の「父の要求」、「過重」などの初期作品のように植民者への批判の視線を描けなくなり、自然主義の風格に制限されるようになったのも、大戦に当たり、当局からのプレッシャーがあったと伺える。それでも、自然主義風に染まり、家族体制の壊滅、父権体制の道徳的支配への反抗まで描きいた「閩雞」は、1930 年頃の台湾文壇の近代化批判の精神と帝政批判の意図を継承していると伺える。それは、天皇のために志願兵として死に赴く家族国家観を唱えていた時代風潮の中で、登載禁止に遭わされかねない危うい試みであった。「道

一卷』緑蔭書房，2001，P265

²⁴⁹楊行東「臺灣文藝界への待望」（『フォルモサ』1号1933）『日本統治期台湾文學・文芸評論集第一卷』緑蔭書房，2001，P261

²⁵⁰皇民奉公會臺北州支部娛樂指導班「臺北州下に青年演劇挺身隊の根本理念に就て」（『台湾文学』2巻3号1942）中島利郎，河原功，下村作次郎編『日本統治期台湾文學・文芸評論集第四卷』緑蔭書房，2001，P183



徳の規律」という視点で父権体制批判の解説を要請し、知識人の主体性の喪失を訴えた「閩雞」は、日本帝国の国民国家統合に対する抵抗を暗示する意図が十分に見られる。

1941年7月の「皇民奉公會臺北州支部娛樂指導班」の成立のあと、台湾新劇の皇民化の傾向と対抗するために、張文環、王井泉、中山郁らは8月に「台湾郷土演劇研究会」を成立していたが、長く続けられなかった。その後、1943年に『台湾文学』の同人を主要なメンバーとした「厚生演劇会」²⁵¹の成立に際して、張文環は「閩雞」を劇本に書き換え、9月3日に台北永楽座で上演し観劇者に感動を呼び起こした。劇会の成立と劇の上演の目的は、当時台湾劇界の最高指導者の松井桃楼の書いた皇民劇に表現されたファシズムへの対抗であった。張文環における「閩雞」の創作と改作はまさに、反植民意識を示している上で、父権体制の親権思想を以て国家資本主義による植民地統制を隠蔽する国民国家統合とそれに伴った近代化への不満の極点に達した結果である。

第五節 結び

本章は反植民意識に繋がる張文環の近代化批判を指摘した先行研究を踏まえながら、張文環を取り囲む時代背景と文壇からの影響を考察し、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する張文環の批判と文芸思想の本質を論じてきた。

東京留学の経験を題材にした「父の要求」は、張文環が温和派プロレタリア路線を採った『フォルモサ』の挫折ののち、台湾文芸連盟の『台湾文芸』に発表した作品であり、日本帝国のもたらした国民国家統合に従属した台湾植民地の父権体制の問題を描いている。そして、辛亥革命に関心を向けた台湾文壇の帝政批判と封建批判の動向に繋がり、「階級と親子間との間の問題」に対する主人公の思考を通して、資本主義の発展と日本の家族国家観に従属した父権体制

²⁵¹石婉舜「厚生演劇研究會初探」(『台灣史研究』第七卷第二期、中央研究院台灣史研究籌備處, 2001. 06) を参照



の支配への批判を示している。

地方主義文学に反植民意識を隠す『台湾新文学』の動向に繋がる「過重」は、近代教育の立身出世と物質主義の価値観に憧れ、経済略奪をされた植民地の農婦の母への凝視で近代化への憧憬が崩壊した植民地の子どもへの描写を通して、資本主義に呑み込まれ植民地の父権体制の主体性喪失の問題を浮き彫りにし、国民国家統合とそれに伴った近代化に置かれた知識人の重荷を提示している。

「過重」の後ろ身であり、文芸大衆化を背景とし、植民地の人間を凝視する創作方針に基づいた『山茶花』は、資本主義と父権体制の環境に支配されていた植民地人間の生活を表現している中で、近代教育や軍歌を通して日本帝国の押し進んでいた国民国家統合とそれに伴った近代化の存在を仄めかしている。そして、賢の田舎恋着によって国民国家統合への反動精神を描き出している一方、田舎恋着の崩壊、社会環境を改善するための主人公の東京進出を描いて、国民国家統合とそれに伴った近代化と向き合う姿勢を示し、自然主義のロマン性を打破しリアリズムをもって台湾植民地の直面した近代化の問題を見つめる『フォルモサ』の方針に繋がっていることを示している。

皇民文学の『文芸台湾』と対抗するために創刊された『台湾文学』に発表された「閩雞」は、その自然主義風のリアリズムが、帝国の支配下の近代化問題を批判する1930年代台湾文壇の動向、及び階級打破を掲げ台湾植民地の現実問題を見詰めようとした『フォルモサ』の創作理念と関連している。「閩雞」において、台湾植民地社会における資本主義と父権体制の問題、特に父権体制の中の道徳に支配されていた月里の自覚と反抗が描きだされたのは、国家資本主義で植民地を支配する事実を隠蔽して家族国家観をもって大戦へ向かう国民国家統合を図る日本帝国に対する批判と文芸上の反動である。

台湾植民地時代を生きた張文環は、台湾人の生活現実への凝視という創作方向で、近代化社会の反映を自らの文芸的課題とした。かつて大戦中に戦争協力の文芸を書かされたが、反植民意識を仄めかしている作品も創作し、その中で国民国家統合とそれに伴った近代化に対する批判を示している。張文環の批判は同時代の文芸的課題を意識した上でのものであるが、日本文学に接触してい

たことがどれほどその批判意識に関連しているかが興味深い。次章において、漱石との文芸思想の接点を中心に提起していきたいと考えられる。





第四章 夏目漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の接点

張文環は「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会において、「本当に好きなのは長塚節の『土』です。日本の作品で本当に二回も三回も読み返したのは『土』だけです。その他永井荷風、島崎藤村、丹羽文雄、島木健作、大谷藤子、国木田独歩などです。」²⁵²と述べている。長塚節の『土』序を書いたのは漱石である。序の中で漱石は『土』の文学的価値を提起している。そして、本研究の第二章でも提起したように、漱石は藤村の『破戒』に対して特に感銘を示している。その上で、張文環は自分の尊敬したプロレタリア作家の平林彪吾への弔辞の中で、特に平林彪吾の読んでいた『漱石全集』に言及している。漱石に対する張文環の意識、そして漱石と張文環における共通な文芸的関心は、果たして彼らの近代化批判と文芸思想の本質とどのような繋がりを持っているか、本章はそれ探求する上で、漱石と張文環の近代化批判と文芸思想の接点を提示していきたいと考えられる。

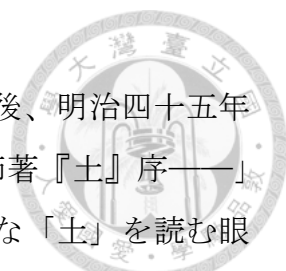
第一節 国家資本主義への批判で繋がる『土』への関心

漱石は、植民地大連の視察の結果を『満韓ところどころ』(明治 42. 10. 21~12. 30)で傍観的、余裕的に書いたことで、「佐渡が島」の美しい人間描写²⁵³で賛美²⁵⁴し

²⁵²台湾文芸連盟「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会(1941. 11. 01、『台湾藝術』第3巻第1号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

²⁵³長塚節「佐渡が島」(明治 40. 11. 1「ホトトギス」第十一巻第二号)『長塚節全集 第二巻』春陽堂書店, 1929, P443)では、「博勞が遭うた其日から懇切であるのも宿屋で出掛に必ず草鞋を一足くれるのも小木の宿屋の美人が洗濯をしておいてくれたのも皆此の優しい心の發動でなければならぬ。佐渡といふと昔は罪人の集合所であつたやうに思つて居たのであるが清潔なる島の空氣は彼等の感化のためには穢れなかつたと見えるのである。」という描写がある。

²⁵⁴夏目漱石「釣鐘の好きな人」(大正 4. 3. 1『俳味』)『漱石全集第三十四巻』岩波書店, 1957, P263)は、「長塚節君と私とを結び付けたものは『ホトトギス』に出た君の佐渡の紀行文であった。私はそれを見て面白いと思った。それで私が朝日の文藝方面を擔任して居た際、君に長編小説の寄稿を頼んだ。」「佐渡が島」を通して、長塚節を選んだのは、単に「佐渡が島」が写生文の技巧を使った紀行文が原因ではない。「長塚君はカラツとした、氣



ていた長塚節から不真面目だという批判を受けていた。その後、明治四十五年五月に『土』の出版に際して書いた『『土』に就て——長塚節著『土』序——』において、漱石は「君から軽佻の疑を受けた余にも、真面目な「土」を読む眼はあるのである」²⁵⁵と、自己反省を述べた。そして、鬼怒川の貧農の悲惨な生活を描いて「朝日新聞」の購読者の間で評判が悪かった『土』の文学的価値をこのように提示した。「斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んで居るといふ悲惨な事実を、ひしと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等の是から先の人生観の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの参考として利益を与えはしまいかと聞きたい。余はとくに歡樂に憧憬する若い男や若い女が、読み苦しいのを我慢して、此「土」を読む勇気を鼓舞する事を希望するのである。」²⁵⁶漱石の見出した『土』の文学的価値は、農民たちの悲惨な生活への凝視を通して、近代化の都市に相対する農村の貧困化の問題を正視する視線である。そして、漱石は「参考の為だから、世間を知る為だから、知って己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる為だから我慢して読めと忠告したいと思つて居る。何も考えずに暖かく成長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心や宗教心は、皆此暗い影の奥から射して来るのだと余は固く信じて居るからである。」²⁵⁷というように、「帝都」に住み急激な近代化に憧憬する都会の人間に、人道的視線をもって貧農の苦しみを理解することを要請している。

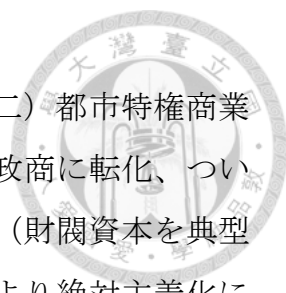
漱石の『満韓ところどころ』と長塚節の『土』の創作は、植民地への進出、及び明治社会の近代化でもたらした都市の繁栄と農村貧困化という社会背景を反映している。中村哲の『世界資本主義と明治維新』ではこのように、その社会背景の形成の原因を指摘している。「(一) 幕藩領主が自己をブルジョア的に

安い、そして真摯な、美しい人であった」というように、長塚節の真摯な姿勢が「佐渡が島」の美しい人間描写に現れ、「憐れ」の人間美を追求する『草枕』、同情の心を追求する『それから』の作者の漱石を魅せたのだと推測できる。

²⁵⁵夏目漱石『『土』に就て——長塚節著『土』序——』長塚節『土』日本近代文学館、1970、P13

²⁵⁶注 255 と同じ資料、P10-11

²⁵⁷注 255 と同じ資料、P10-11



改造しつつ、上からの資本主義化を強行してゆく（中略）、（二）都市特権商業資本は、明治国家の原蓄政策、上からの資本主義政策により政商に転化、ついで特権的巨額産業資本（および商業・銀行資本）に転化する（財閥資本を典型とする）、（三）国家権力については、幕藩封建権力が権力により絶対主義化に転化し、ついでそれが近代的修正を行なって外見的立憲制に移行する（基本的には近代国家の一類型たる君主制官僚国家）、（四）国内的に人民を抑圧する上からの改良的コースは、対外的にも人民の力に依拠できない。欧米列強への従属とアジアへの軍事的進出が基本とならざるをえない。」²⁵⁸つまり、植民地への進出も農村の貧困化も、国家資本主義の発展と国家権力の全体主義化と深く関連しているのである。

第二章ですでに提示したが、漱石は明治三十四年の断片で、「自由主義は秩序を壊亂せる事」、「無學不徳義にても金あれば世に勢力を有するに至る事を事實に示したる故國民は窮窟なる徳義を棄て只金をとりて威張らんとするに至りし事」²⁵⁹、「今ノ文化ハ金デ買ヘル文化ナリ金デ買ヘル文化ガ最モヨキ文化ナルカ若シ然ラズンバ日本ガ萬事ニ於テ西洋ヲ崇拜スルハ愚カナリ」²⁶⁰と述べ、自由主義経済から発展した資本主義のもたらした実利主義の問題を危惧し、国家資本主義を推し進めた明治の近代化方針を批判した。それに加えて、明治三十年代の社会主義運動の風潮の中で、漱石は明治三十九年八月頃より電車会社の値上げに対する社会主義者の抗議運動を観察し、深田康算当ての書簡で、「電車の値上には行列に加らざるも賛成なれば一向差し支え無之候。小生もある點に於て社界(ママ)主義故堺枯川氏と同列に加はりと新聞に出ても毫も驚ろく事無之候。」²⁶¹と述べ、国家資本主義に反対した自分を社会主義者の堺利彦に比した。また、『草枕』の連載中に、短編小説の「二百十日」（「中央公論」明治 39. 10）において、「仏国の革命なんてえのも当然の現象さ。あんなに金持ちや貴族が乱

²⁵⁸中村哲『世界資本主義と明治維新』青木書店、1978、P48-49

²⁵⁹夏目漱石「明治 34 年 4 月頃以降の断片」『漱石全集第二十四卷』岩波書店、1957、P64

²⁶⁰注 259 と同じ資料、P69

²⁶¹夏目漱石「明治 39 年 8 月 12 日深田康三宛書簡」『漱石全集第二十八卷』岩波書店、1957、P76



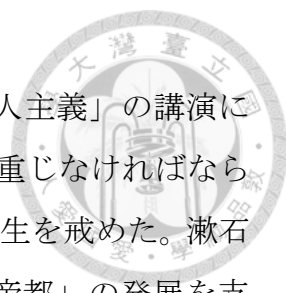
暴をすりゃ、ああなるのは自然の理窟だからね」²⁶²と、階級の視点を含めて国家資本主義を発展させる明治帝国に対する批判を示している。

国家資本主義に対する漱石のそういう実利主義への危惧と階級批判の視点は、近代化社会に広まった社会思想の問題への思考に基づいている。「現代日本の開化」において、漱石は「開化と云うものがいかに進歩しても、案外その開化の賜物として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらいらしなければならぬ心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変りはなさそうである」²⁶³と、明治社会の近代化を批判した。その批判の中には、明治の近代化で流行っていたスペンサーの功利思想の生存競争観をもとにした福沢流の文明論への懐疑を示している。『それから』においても、代助の不安はブルジョア階級の父との衝突による経済的支援の断絶に由来している一方、「生存競争の形見」という資本主義が高度に発展した社会に呑み込まれる恐れに関する描写が見られる。資本主義の発展は実利主義の形成を伴い、そして明治社会の導入した生存競争観と合流し、下層階級や一般の国民に圧迫と苦しみを与えてしまう、というのが漱石の批判の着眼点である。

それによって、漱石は『草枕』において、資本主義の発展と日清戦争を背景として社会小説の『不如帰』と『金色夜叉』の題材を提起し、実利主義に染まった両親に運命を握られた那美の不幸と、日清戦争後の国内の不況の問題を解消するために「忠君愛国」の名義で踏み出した日露戦争で徴兵された久一の不幸を描いている。そして、『三四郎』において、上京知識人の都市体験を通して、資本主義のもたらした物質文明の発展を示した一方、日露戦争後の社会不況でもたらした社会の絶望、人間の死を描き、作中人物による軍国主義への批判、「新しき西洋」という物質文明に憧憬する近代化社会の問題を提起している。さらに、『それから』において、ブルジョアに転換していく幕藩領主の築いた政商関係、国家資本主義の展開とその全体主義の傾向に反抗する近代人の意識を描き出している。その上で、明治末年の社会情景を描いた『こゝろ』の創作を通し

²⁶²夏目漱石『二百十日・野分』新潮文庫，2007，P58

²⁶³夏目漱石「現代日本の開化」『夏目漱石全集 10』（第10刷）ちくま文庫，2009，P559



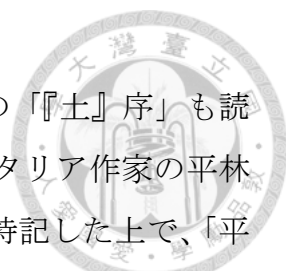
て、思想面で資本主義の発展の問題を批判し、また「私の個人主義」の講演において、「自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重じなければならない」²⁶⁴と、講演の聞き手であるブルジョア階級の学習院の学生を戒めた。漱石が『土』序において、農民階級への視線を込めながら、「帝都」の発展を支える農村の貧困化を描いた『土』の文学的価値を提起したのは、まさに明治社会の国民国家統合に伴った近代化における国家資本主義の発展の問題を批判する文芸思想に根源している文芸的関心の現れである。

一方、張文環は、皇民奉公の始まった頃に、西川満、龍瑛宗、濱田隼雄に伴い、日本に赴いて参加した第一回「大東亜文学者大会」、「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会で、「本当に好きなのは長塚節の「土」です。日本の作品で本当に二回も三回も読み返したのは「土」だけです」と述べた。張文環は言論取調べの厳しい環境の中で、つい『土』の愛読の詳しい原因を述べなかったが、張文環が大会で写実性の強い『土』を挙げたのは、明らかにエキゾチシズムで皇民文学に転じていた『文芸台湾』に対する『台湾文学』のリアリズム創作の堅持という対抗意識が見られる。『土』は今日になって日本の郷土文学、リアリズム性の強い作品として、「広義の写実主義に包摂された写生文」²⁶⁵として認識されてきたが、漱石の『土』序はすでに、『土』のリアリズムの特徴をこのように示していた。「篇中の人物の心なり行なりが、ただ圧迫と不安と苦痛を読者に与える丈で、毫も神の作ってくれた幸福な人間であるという刺戟と安慰を与え得ないからである。悲劇は恐しいに違ない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの償いがあるので、読者は涙の犠牲を喜ぶのである。が、「土」に至っては涙さえ出されない苦しさである。雨の降らない代りに生涯照りっこない天気と同じ苦痛である。ただ土の下へ心が沈む丈で、人情から云っても道義心から云っても、殆んど此圧迫の賠償として何物も与えられていない。ただ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行く丈である。」²⁶⁶日本文学に接触し日本語

²⁶⁴夏目漱石「私の個人主義」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫、2009、P636

²⁶⁵高橋春雄「写生文と自然主義—『俳諧師』と『続俳諧師』まで—」『解釈と鑑賞』33(11)、至文堂、1968.09、P114

²⁶⁶夏目漱石「『土』に就て—長塚節著『土』序—」長塚節『土』日本近代文学館、1970、



で創作する張文環が、春陽堂版の『土』を読んだのは、漱石の『土』序も読んでいたことを示している。そして張文環は、かつてプロレタリア作家の平林彪吾への弔辞の中で、平林彪吾が『漱石全集』を読んでいたと特記した上で、「平林彪吾は厳格なリアリズムを追って、時にはその整肅さは文學としての整形美を歪めたことさへあつたと云ふのは私も同感である。なんだか平林さんの現實の生活がぎしぎしと作品に現はれすぎてゐるやうな氣がしてならないのである。かうして平林さんの全集を手にとつてみると、その作品は殆んど私の讀んだものばかりであるが、胸が静まるまでもう一度讀みたいのである」²⁶⁷とプロレタリア作家でリアリズムを重んじていた友人への尊敬を表した。『平林彪吾全集』への評価に『漱石全集』を並べて提起したことから、平林彪吾の文學精神と作品の重要性が漱石に比するものであるという考えを表明するその意図が伺える。『土』への愛読は、まさに漱石の文芸的関心に対する意識の現れであると同える。

周知の通り、張文環は大戦期において「風俗作家」と呼ばれていた。漱石は『土』序の中で、このように、『土』の「地方色」を提起している。「『土』の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。」「彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、あり／＼と眼に映るやうに描寫したのが『土』である。」²⁶⁸、「畔に立つ榛の木、蛙の声、鳥の音、苟くも彼の郷土に存在する自然なら、一点一画の微に至る迄悉く其地方の特色を具えて叙述の筆に上っている。だから何処に何う出て来ても必ず独特である。其独特な点を、普通の作家の手に成った自然の描写の平凡なのに比べて、余は誰も及ばないというのである。」²⁶⁹張文環の「落蕾」、

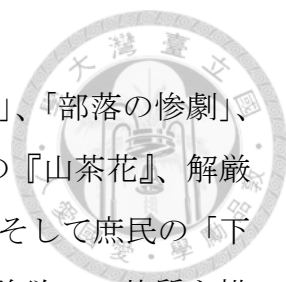
P9

²⁶⁷張文環「平林彪吾の思い出」（1940. 04. 13 台湾日日新報）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011

²⁶⁸夏目漱石『土』に就て——長塚節著『土』序——長塚節『土』日本近代文學館，1970，

P6

²⁶⁹注 268 と同じ資料， P7



「過重」、「部落の元老」、「豚のお産」、「辣蕪の壺」、「藝姐の家」、「部落の惨劇」、「論語と鶏」、「夜猿」、「闖雞」などの短編作品と、長編作品の『山茶花』、解嚴後の作品の『地に這うもの』には、台湾の慣習、風土と自然、そして庶民の「下卑で、淺薄で、迷信が強く、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲」の特質を描きだす形跡が見られる。その文芸的表現は、郷土文学の潮流の影響、『土』への真似が考えられるほかに、植民地の生活現実への描写が近代化の問題に関連する以上、「帝都」の近代化と対置する農村の問題を意識した漱石の『土』序の視線も関わっていると伺える。

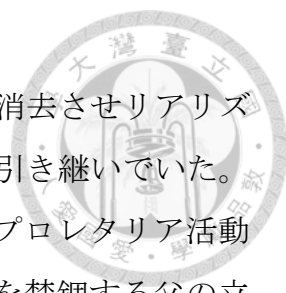
それは、張文環にとって文学のリアリズムの重要性が、近代化の中の植民地の生活現実を表現する意図とかけ離れないためである。功利主義の生存競争観を中心とした国家資本主義の発展は、明治の国民国家統合の中で、すでに全体主義と結合し帝国主義として台湾植民地の支配に踏み出していた。それによって、1930年頃、台湾島内の最大の漢文雑誌『南音』は、自然主義のリアリズムによる近代化社会の問題への暴露、実利主義、生存競争の現象への批判²⁷⁰が掲げられ、『フォルモサ』の発言者である吳坤煌も、階級問題を加えるリアリズムの文芸思想を要請し、「世界の新興資本主義國家」、「資本主義社會、官僚社會の壓迫」²⁷¹との闘いを目的とした。また、『フォルモサ』同人の鼓舞を受けて、リアリズムの文芸思想で反植民意識と島内現実への凝視を喚起することを使命とした台湾文芸連盟においても、劉捷は「臺灣文學今日の機運が決して臺灣の經濟社會や政治と無関係ではない」²⁷²と提起し、資本主義經濟及びブルジョア階級の植民者との対抗を文芸理念とした。そして、『フォルモサ』と台湾文芸連盟の同人である張文環は、そういう文壇の思潮から影響を受けて、植民が資本主義の浪に乗じてきたことへの憂慮²⁷³を表し、近代化社会の問題の暴露によって文

²⁷⁰KS 生「文藝上の酥穢描寫」(『南音』1(8)1932.05.22)『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第一卷』綠蔭書房, 2001, P181-186

²⁷¹吳坤煌「臺灣の郷土文學を論ず」(『フォルモサ』2号1933)『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第一卷』綠蔭書房, 2001, P262-273

²⁷²劉捷「續臺灣文學鳥瞰」(『台灣文藝』2卷3号, 1935.05(台湾文芸連盟))『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001, P116-121

²⁷³張文環「強ひられた題目」(『台灣文藝』3-6, 1936.05.29) 陳萬益編『張文環日本語作品



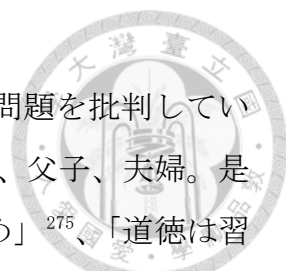
学の社会性²⁷⁴を築く台湾文壇の理念、自然主義のロマン性を消去させリアリズム側面を保ち階級批判に繋ごうとする『フォルモサ』の理念を引き継いでいた。それで、作品の「父の要求」において、子の立身出世を望みプロレタリア活動を阻止する父と、親に順応するように勧誘する植民者側、子を禁錮する父の立てた「洋館」の暗示を描き出すことを通して、植民側の国民国家統合に従属した父権体制社会の取り入れていた資本主義の問題を提示している。「過重」において、地方主義文学の方針のもとで、植民者側に経済略奪を遭わされた農婦への描写と、物質文明を中心とした立身出世観からの子どもの目覚めを通して、植民によってもたらされた資本主義の階級的支配で植民地知識人の重荷を提示している。そして、『山茶花』において、植民者のもたらした国民国家統合とそれに伴った近代化を背景とし、山郷における資本主義の侵入、実利思想に染まる人心の変化と人間支配の問題を描き出している。さらに、「閩雞」において、植民地に侵入した国家資本主義の発展、実利主義による人間支配の深刻さとそれに対する反抗を表現している。

『土』に対する漱石と張文環の共通な文芸的関心は、それぞれ、日本帝国によって展開した国家資本主義に批判的で社会主義の傾向を持つ漱石の近代化批判と文芸思想の本質、日本の国家資本主義の発展で植民地とされた台湾の社会の現実を描こうとした張文環の近代化批判と文芸思想の本質に繋がっている。そして、近代化社会の現実を描こうとした張文環の創作意識が漱石の近代化批判への意識に繋がっているところから、漱石と張文環の文芸思想の接点、そして国民国家統合とそれに伴った近代化に対する文芸上の闘いが、明治社会と台湾植民地社会に跨っている傾向を観察できる。

第二節 父権体制と国民国家統合への批判で繋がる藤村文学への関心

及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011

²⁷⁴芥舟「社會改造與文學青年」（『南音』1(11)1932. 07. 20）『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第一卷』綠蔭書房，2001，P207



明治三十四年の断片の中で、漱石はこのように封建階級の問題を批判している。「日本ノ昔ノ道德は subordination がヨク出来て居る君臣、父子、夫婦。是は社会を統一シテ器械的に働かす為に尤も必要である今はだめ」²⁷⁵、「道德は習慣だ強者の都合よきものが道德の形にあらはれる孝は親の権力の強き處忠は君の権力の強き處貞は男子の権力の強き處にあらはれる。」²⁷⁶漱石の批判した封建旧習の問題は、明治社会の父権体制と深く関連していると伺える。のち、『破戒』を読んだ漱石は、森田米松宛の書簡で「僕は多く小説を讀まず。然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ」²⁷⁷と大いに評価した。島崎藤村の『破戒』は、四民平等を掲げる明治社会に残存した階級問題を暴いている一方、階級の告白が父権体制によって制限されることも描いている。漱石は、鈴木三重吉宛の書簡で、「吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでもイヤなものでも一切避けぬ否進んで其の内へ飛び込まなければ何にも出来ぬといふ事である」と述べ、自分の創作意欲を「維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい」²⁷⁸と提起した。「維新の革命は政治の現象界に於て旧習を打破したること、万目の公認するところなり」²⁷⁹という北村透谷の提起のように、明治維新は封建旧習を打破する啓蒙精神を意味した。それを文学的精神とした漱石は、のち父権体制の封建性と国家の関連性を自分の文学的課題とした。

それで、藤村の『破戒』への評価を示していた同じ時期に、漱石は日清戦争、資本主義の発展した近代化社会における男女の悲恋と旧家族の軋轢を書いた社会小説の題材を取り入れた『草枕』を通して、「親」、「恋」、「忠君愛国」、「我利私欲」に対する画工の批判を提起し、実利主義の両親の親権思想で結婚を決められた那美と日露戦争に徴兵された久一の悲運を描き出している。『草枕』における国民国家統合の傾向への批判から分かるように、漱石の批判しようとした

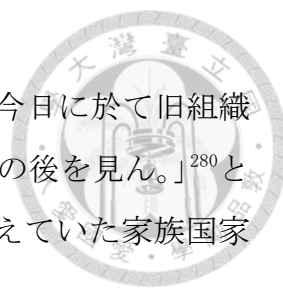
²⁷⁵夏目漱石「明治34年4月頃以降の断片」『漱石全集第二十四卷』岩波書店、1957、P73

²⁷⁶夏目漱石「明治34年4月頃以降の断片」『漱石全集第二十四卷』岩波書店、1957、P71

²⁷⁷夏目漱石「明治39年4月3日森田米松宛書簡」『漱石全集第二十八卷』岩波書店、1957、P36-37

²⁷⁸夏目漱石「明治39年10月26日鈴木三重吉宛書簡」『漱石全集第二十八卷』岩波書店、1957、P123

²⁷⁹北村透谷「明治文学の管見」『現代日本文学大系6 北村透谷・山路愛山集』筑摩書房、1969、P133

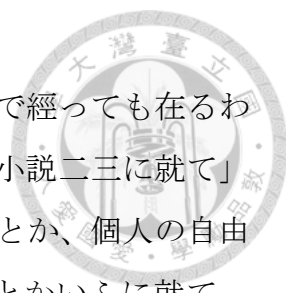


明治社会の問題は、封建性を残存した父権体制である上で、「今日に於て旧組織の遺物なる忠君愛国などの岐路に迷ふ学者、請ふ刮目して百年の後を見ん。」²⁸⁰という透谷の批判のように、父権体制に基づいて国粹主義を唱えていた家族国家観のことでもある。

『草枕』の結末において、このような内容が示されている。「文明は個人に自由を与えて虎のごとく猛からしめたる後、これを檻奔の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら——世はめっちゃめっちゃになる。第二の仏蘭西革命はこの時に起るのであろう。個人の革命は今すでに日夜に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態についてつぶさにその例証を吾人に与えた。」²⁸¹明治社会の近代化は、資本主義経済を取り入れたのみならず、明治維新の掲げた啓蒙精神、四民平等の理想の提唱とともに個人主義の精神も取り入れていた。しかし、国民国家統合を図るために、国粹主義の形成によって個人主義の発展が抑圧されるようになった。「檻奔」が指すのはまさに明治の父権体制に基づいた家族国家観のことであり、そして漱石は専制を打倒する「第二の仏蘭西革命」を期待し、「個人の革命」すなわち個人自身における思想上の革命を描き出した文学として、イブセンを取り上げて評価した。イブセンは社会の通俗道徳に挑戦するスキャンダラスな劇をたくさん書いている作家であり、「問題的文藝」を代表する社会劇の父として明治文壇によって認識されていた。『三四郎』を創作する前に、漱石は談話の「近作小説二三に就て」（明治 41. 6）において、イブセン文学を提起していた。その中で、イブセンに「道徳の情操化」が欠けていると論じていたことによって、今まで通俗道徳の作家として誤解されてきたが、漱石の指す「情操化」の意味は、むしろ「美學的價値」の有無で、「美學的價値」とはすなわち他人に対する「同情の念」の発生であり、通俗道徳に対する賞賛ではない。漱石は「夏目漱石氏文學談」（明治 39. 8）で「問題的文藝」がイブセンの死によって

²⁸⁰注 279 と同じ。

²⁸¹夏目漱石『草枕』新潮文庫，2011，P175

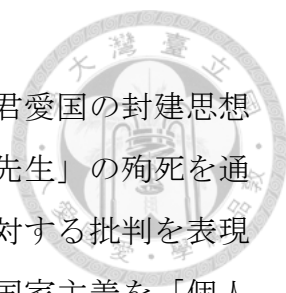


「下火」になると提起したが、「問題的文藝そのものは何時まで経っても在るわけでしょう」²⁸²と「問題的文藝」の存在を認めた。そして、「近作小説二三に就て」でもこのようにイプセンの良さを評価している。「夫婦の関係とか、個人の自由は此點まで行かねばならぬとか、約束的道德は打破して宜いかいふに就て、考へを持つて居る。その考へが骨子になつて戯曲が出来て居る。」「思索上の道德といふのは、今の世の中は斯ういふ弊があるから、斯う改むべきのだと先覺者が考へた結果、案出した道德である。結構なものには違ひない」²⁸³イプセンへのその評価かえあ分かるように、個人の自由を求め、自覚的な道德心に着目し、人間の自由を支配する制度上の道德を批判するのが漱石の道德意識の実質である。そして、『草枕』に表明されているイプセンのような文学への期待は、明治社会の家族国家観に繋がる父権体制という制度上の道德を打破する文芸思想の現れである。

漱石は、また旧父権社会と上京知識人の自意識を描いた明治四十年代の自然主義から影響を受けた『三四郎』において、三四郎の日露戦争の勝利への賛美を批判した広田先生を造形し、「古き日本」すなわち父権体制と家族国家観の中で形成した三四郎の立身出世観の崩壊を描き出している。『それから』においてはさらに、「維新前の武士に固有な道義本位の教育」を続け自らの利己心に無自覚で政商関係で息子の結婚を決めさせる長井得という父権像を裏切った代助の姦通を描き、国家による近代化の推進の問題を伺わせる時事の取り入れて、国民国家統合の問題を提示している上で、資本主義と父権体制の結合を象徴する父の存在に反抗する代助の姦通心理の不安を、『七刑人』における政治的支配の不安に繋がらせ、国民国家統合からの離反を示している。のちに創作された『彼岸過迄』と『行人』に描かれている旧家族の問題も、旧家問題を探求する明治四十年代の自然主義の影響がある一方、父権体制に対する探求の延長として観察できる。さらに、大正3年に、漱石は近代化の明治社会を観察する到達点としての『こゝろ』を創作した。『こゝろ』は、資本主義と父権体制の社会で彷徨

²⁸²夏目漱石「問題的文藝」(明治41.6)『漱石全集第三十四巻』岩波書店, 1957, P77

²⁸³夏目漱石「近作小説二三に就て」(明治41.6)『漱石全集第三十四巻』岩波書店, 1957, P149



いを感じる中で「先生」の思想を尊敬した青年の語りと、忠君愛国の封建思想を打破する啓蒙精神という意義を持つ「明治の精神」への「先生」の殉死を通して、国民国家統合を推進してきた明治時代の終焉とそれに対する批判を表現している。そして、その内容は、国粹主義への嫌悪を述べ、国家主義を「個人主義」の下位に置いた漱石の独自の「個人主義」の概念に関連している。イブセンへの文芸的関心と一連の創作の模索と思想上の展開は、明治社会に残存した父権体制の封建性に対する漱石自身の思考、父権体制の問題を描いている『破戒』の文芸的課題への継承に繋がっていると伺える。

一方、封建打破、帝政打倒を掲げていた辛亥革命は、中国の動向に注目していた台湾植民地の知識人にとって、日本帝国の家族国家観の支配に従属した父権体制への内部批判の意義をもたらしていた。中国の新進作家の雷石瑜は「台湾文聯東京支部第一回茶話會」で、『台湾文藝』という雑誌の掲げる思想性について、「封建思想を打破して初めて民衆のものたり得る」²⁸⁴と、辛亥革命の発生した中国との連携を提起した。台湾知識人の劉捷も「續臺灣文學鳥瞰」において、政治的挫折を背負う1930年代の台湾文壇で、辛亥革命は封建打破、立憲政治の意義がある²⁸⁵と言及した。そして台湾植民地の最大の漢文雑誌『南音』においては、1932年に「社會改造與文學青年」²⁸⁶（社会の改造と文学青年）と題し、文芸を新社会の創造者と旧社会の改造者として主張する言論が出て、社会の現実を見詰める文芸姿勢を唱えていた。その上で、同雑誌において「文藝上の酥穢描寫」（文芸としての汚い描写）と題した寄稿は、「封建遺毒與近代暗病」²⁸⁷（封建の残る弊害と近代化の闇）で、自然主義理論を借りて実利主義、生存競争の現象を批判した上では、未開化の封建社会の暗黒と戦おうとした。

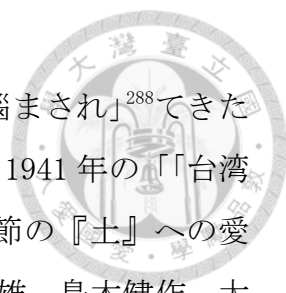
台湾文壇の思潮から影響を受けた張文環は「台湾文学の自己批判」において、

²⁸⁴台湾文芸連盟「台湾文聯東京支部第一回茶話會」（『台湾文藝』2巻4号，1935. 4. 1）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011

²⁸⁵劉捷「續臺灣文學鳥瞰」（『台湾文藝』2巻3号，1935. 05（台湾文芸連盟））『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第二巻』綠蔭書房，2001，P116-121

²⁸⁶芥舟「社會改造與文學青年」（『南音』1(11)1932. 07. 20）『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第一巻』綠蔭書房，2001，P207

²⁸⁷KS生「文藝上の酥穢描寫」（『南音』1(8)1932. 05. 22）『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第一巻』綠蔭書房，2001，P181-186



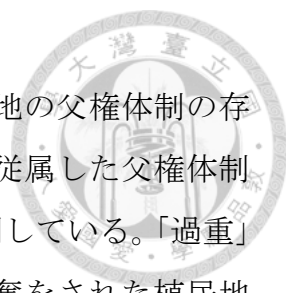
「本島人の青年は封建的家庭と個人主義的な社會の雰圍氣に悩まされ」²⁸⁸てきたと、自身の直面していた文芸的問題を述べている。その上で、1941年の「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会」において、張文環は長塚節の『土』への愛読を述べているほかに、「その他永井荷風、島崎藤村、丹羽文雄、島木健作、大谷藤子、国木田独歩などです」²⁸⁹と述べている。永井荷風はゾライズムに接触して耽美派に転じた作家であり、島崎藤村と国木田独歩は自然主義作家である。丹羽文雄は自然主義の牙城だった早稲田文学の「新正統派」の作家で、戦時に主に風俗小説を書いている。社会主義に接触した島木健作は転向風潮以降、転向作家として活躍していた。フェミニズムや社会主義にも接触していた大谷藤子は女流作家として、女性のことをテーマで創作していた。張文環の読んでいた作家の特徴と彼自身の創作からみれば、「父の要求」における「転向」の題材は転向作家の島木健作の創作に参考し、そして永井荷風と大谷藤子への関心はそれぞれ、『山茶花』で提起されていた『居酒屋』、『ナナ』などのゾラの作品に対する意識との関連があると伺える。それから、植民地の台湾人の現実生活への描写は、長塚節の『土』のほかに、日本自然主義を取り入れようとした台湾文壇の文芸潮流を受けた上で、「地方色」を表現する明治時代の島崎藤村と国木田独歩の作品に学んでいることが分かる。「新正統派」の風俗作家の丹羽文雄への関心と交友も、自然主義への関心の表れである。その中で、特に階級問題、「家」と個人内面の苦悩、衝突を中心テーマとして表現している『破戒』を書いた島崎藤村の文芸的課題が、「階級と親子間との間の問題」を提起した張文環の「父の要求」と深く関連していると伺える。

父権体制の問題を描いた島崎藤村の文学に関心を持っていた張文環は、父権体制への批判を創作の課題としていた一方、反植民意識との結びつきで、日本帝国の家族国家観という国民国家統合の価値観を批判する展開を見せている。

「父の要求」は、「階級と親子間との間の問題」に関する主人公の思考を通して、

²⁸⁸張文環「台湾文学の自己批判」（『新文化』8月号早稲田大学1941. 8.1）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011

²⁸⁹台湾文芸連盟「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会（1941. 11.01、『台灣藝術』第3巻第1号）陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心，2011



日本帝国のもたらした近代教育の価値観に従属した台湾植民地の父権体制の存在を描いている上で、資本主義の発展と日本の家族国家観に従属した父権体制の束縛への批判を提示することによって、国民国家統合を批判している。「過重」は、近代教育の立身出世と物質主義の価値観に憧れ、経済略奪をされた植民地の農婦の母への凝視で近代化への憧憬が崩壊した植民地の子どもへの描写を通して、立身出世の価値観をもたらした日本の家族国家観のもとで、資本主義に呑み込まれ、主体性を失った植民地の父権体制という社会の現実を浮き彫りにして、知識人の重荷を提示した。『山茶花』は、近代教育や軍歌を通して日本帝国の押し進んでいた国民国家統合の問題を仄めかしながら、近代化の台湾植民地社会の中で封建思想に支配されている女性の悲運と、父権体制の社会環境に悲観しそれを改善しようとする知識人の成長と心境の転換を描きだし、自然主義のロマン性を脱してそのリアリズムを取り入れた『フォルモサ』の文芸方向を引き継いでいる。皇民文学の『文芸台湾』と対抗するために創刊された『台湾文学』に発表された「閩雞」は、その自然主義風のリアリズムが、帝国の支配下の近代化問題を批判する1930年代台湾文壇の動向、及び階級打破を掲げ台湾植民地の現実問題を見詰めようとした『フォルモサ』の創作理念と関連している上で、父権体制の中の道徳に支配されていた月里の自覚と反抗を描き出すことによって、国家資本主義で植民地を支配する事実を隠蔽して家族国家観をもって大戦に向かうように国民国家統合を図る日本帝国に対する文芸上の反動を示している。

明治社会における父権体制の問題を探求する島崎藤村の文芸的課題に対する漱石と張文環の関心は、家族国家観のもとで封建性を残存させた父権体制への批判、及び明治社会と台湾植民地社会に影響を与えた国民国家統合とそれに伴った近代化への批判という文芸思想の本質に繋がり、文芸思想の接点を伺わせている。


第三節 結び



国民国家統合は近代化を伴い、「欧化主義と国粹主義が交互に現れる」現象は、まさに明治社会と台湾植民地社会における国家資本主義の発展と家族国家観の支配を示している。

漱石は、国家資本主義を批判する中で、国家資本主義の展開でもたらした海外への軍事的進出、軍事的進出による外債でもたらした社会の不況、全体主義に繋がる政商関係、実利主義の形成による人間支配の発生に対する危惧を表している。それによって、彼は社会主義運動に関心を示し、「帝都」の発展と対置する農村の貧困化の問題を提起した長塚節の『土』を評価した。漱石の評価した『土』はのち、文学の社会性に繋がるリアリズムを唱える台湾文壇の影響を受け、台湾人の現実生活への凝視で台湾植民地の近代化の問題を描く張文環によって読まれていた。漱石の「『土』序」で提起した『土』のリアリズムと人間描写、自然描写は、張文環の作品の風格にも見られる。張文環は、日本国家資本主義の発展でもたらした台湾人への植民者の経済階級の支配、資本主義と実利主義を追求する台湾人の盲目、及び実利主義のもたらした人間支配の問題に対して批判を表している。漱石に対する関心を特に言及していないにも関わらず、プロレタリア作家で『漱石全集』を読んでいた平林彪吾のリアリズムに関心した張文環は、確かに漱石の近代化批判の着眼点を意識していると伺える。

一方、明治社会の階級問題と父権体制の問題を提起した島崎藤村の『破戒』から時代批判の感銘を受けた漱石は、明治維新のもたらした啓蒙精神に誇りを持ちながら、明治社会の父権体制に残存した封建性に対して批判的であった。その展開として、制度上の道義主義への打破を掲げたイブセンの文芸思想を評価し、作品の表現や講演を通して、家族国家観を唱える国粹主義に対する批判も示し、国民国家統合への批判に繋がらせている。そして、辛亥革命に感心し帝政批判と封建批判を行なっていた 1930 年代の台湾文壇から影響を受け、日本文学の摂取で日本自然主義作家に接触し、島崎藤村の文学にも関心を示している張文環も、藤村文学に追究されている父権体制における階級と封建性の問題



を文芸上の主な課題として取扱っていた。さらに、作品における植民地社会の父権体制の問題への探究を通して、日本帝国の家族国家観とそれに従属した植民地の父権体制への批判を反映している。

長塚節の『土』に描かれている農村の貧困化と、島崎藤村の探求する旧家族の問題に対する漱石と張文環の関心は、ただの共通点ではなく、文学の社会性とリアリズムへの重視を含めて、国家資本主義と父権体制を批判する文芸思想の表れなのである。そして、その共通な関心に見られる両作家の文芸思想は、接点を伺わせている。

第五章 結論

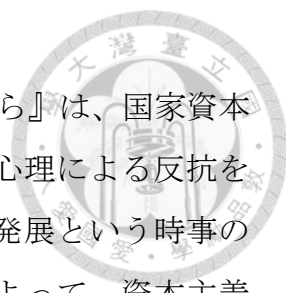


本研究は、明治社会と台湾植民地社会に影響を与えた国民国家統合とそれに伴った近代化に批判的な時代思潮の一端を示すために、明治社会と台湾植民地社会に影響を与えた国民国家統合とそれに伴った近代化に対する漱石と張文環の批判と文芸思想の本質を探求し、両作家の文芸思想の接点を提示してきた。以下、本研究の解明を纏める上で、これからの課題を提示していきたいと考えられる。

一、社会と作者の繋がりから作品に体现される文芸思想を読み取る

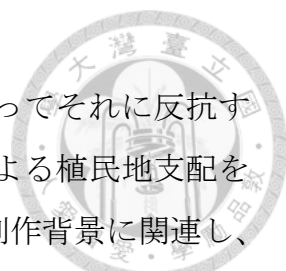
日本帝国による国民国家統合は、明治社会にとって植民地にされないために上から国内の自由民権を抑制され統制を図られた近代化の歴史である一方、台湾植民地社会にとって、民族意識と関連するため、自由民権の抑制の上で、略奪、統制、アイデンティティの混乱をもたらした悲惨な歴史である。そういう植民と被植民の立場の違いが事実として横たわっているながら、社会の激変に息づく人々の生活が事実として存在し、その中から国民国家統合とそれに伴った近代化を批判する思想が生れている。

今までの漱石研究は、漱石の近代化批判と父権体制への提起に触れているが、漱石がなぜ資本主義と父権体制の問題を探求し、独自の「個人主義」に辿り着いたか、その関連性を明示していない。実際に『草枕』は、日露戦争の直前を時代背景とし、日清戦争後の社会小説の流れを汲み、画工の理想への追求と現実の認識を通して、資本主義と父権体制への批判を国粹主義への批判に関連させている。『三四郎』は、急激な近代化でもたらした都市化と物質文明の発展、及び日露戦争後の社会情景、知識人の文明憧憬の崩壊への描写を通して、資本主義の発展でもたらされた物質文明を示す「新しき西洋」と、父権体制と家族国家観の結合を示す「古き日本」の概念を提示し、国民国家統合に伴った近代



化を発展した明治社会の思想的問題を探求している。『それから』は、国家資本主義の発展と関わる父権体制に対する批判を示し、子の姦通心理による反抗を描き出した上で、国家権力によって握られていた資本主義の発展という時事の要素と、政治的不安を反映する文学的要素と結びつくことによって、資本主義と父権体制の結合で推し進められている国民国家統合とそれに伴った近代化の全体主義の傾向を批判している。『こゝろ』は、手記と遺書を構成として、資本主義と父権体制に閉じ込められた青年の「現代思想の問題」に関する問いと、明治維新の啓蒙精神に根源し社会体制の束縛を打破しようとする「明治の精神」への「先生」の殉死による答えを描くことを通して、国民国家統合とそれに伴った近代化に対する漱石の作品表現による批判の到達点を示し、そして資本主義の発展と関わるブルジョア階級に金力の使用を戒め、国粹主義の封建性に対する批判を示した漱石の「個人主義」に繋がっている。

張文環研究は、張文環の作品における近代化問題の反映をその反植民意識に繋げてきたが、植民地の生活現実を描いている非戦争協力の作品に関して、国民国家統合の視点で切り込む体系的な研究が見られない。「父の要求」は、「転向文学」の題材を借りて、「階級と親子間との間の問題」に対する主人公の思考を描き出し、それによって、資本主義と物質文明を中心とした日本帝国の国民国家統合の中の近代教育の価値観、及び家族国家観に従属した父権体制の問題を照らし出している。「過重」は、地方主義文学の発展を背景として、近代学校の掲げた物質文明と立身出世の価値観に憧憬した子供が、植民者の経済略奪に遭わされた農婦の母のことは見詰めて立身出世の価値観が崩壊し、父の喪失の現実に意識したことを描き出すことを通して、資本主義と日本帝国による国民国家統合の価値観に呑み込まれ、主体性を喪失した台湾植民地社会の現実を照らしている。『山茶花』は、植民地の人間の生活現実を反映する張文環の文芸理念に基づき、台湾植民地社会における国民国家統合の傾向を反映しながら、資本主義の侵入と父権体制の残存といった社会環境の問題を描き出し、そこに安住できない知識人の東京進出によって反動の可能性を仄めかしている。「闖雛」は、資本主義もたらした実利主義と父権体制の封建性の残存が結合して人間



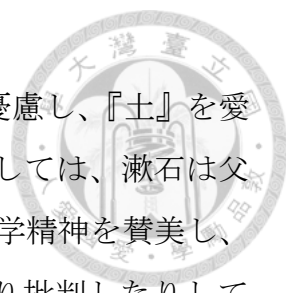
に対する支配性が形成した社会環境と、道德規範の打破をもってそれに反抗する主人公の闘いと苦痛を描き出すことによって、資本主義による植民地支配を隠蔽しようとし、家族国家観を唱える皇民化の価値観という創作背景に関連し、国民国家統合に対する反抗意識を仄めかしている。「本島人の青年は封建的家庭と個人主義的な社会の雰囲気にも悩まされ」と述べて張文環の考えていた「個人主義」の意義は、単に資本主義で喚起した利己主義ではなく、むしろ国民国家統合と被植民者の間の問題と結びついている。

漱石と張文環は、近代化社会の問題を見詰めながら、リアリズムの手法を確立していくとともに、明治社会と台湾植民地社会に横たわる国民国家統合とそれに伴った近代化の時代性をもっとも敏感に文学作品に反映している。本研究は、資本主義の発展と父権体制の残存を典型的な事象として国民国家統合とそれに伴った近代化から抽出している。研究対象とした漱石と張文環はまさにその典型的な事象を批判する思想形成の典型として観察できる。この観察で生まれる課題は、おそらく同様な事象に繋がるほかの作家の文学や思想家の共時的と通時的の研究であると考えられる。

二、「読者」を繋げる作品、作品で繋がる作者の思想

文学社会学は、作者の見つめる社会問題がいかに関係する文芸作品に反映するかを探求する一方、作品がどのように一定の時空の読者によって受け入れられるかも観察する。本研究は大衆読者と作品市場の関係を観察する文学社会学の研究上の展開と異なり、研究対象となった漱石と張文環がいかに関係する「読者」として、長塚節の『土』と島崎藤村の文学に対する文芸的関心を示し、その文芸思想と関連していくかを観察してきた。

漱石は国家資本主義を中心とした明治社会の近代化を憂慮した上で、都市の繁栄と農村の貧困の対比を意識し、長塚節の『土』の文学的価値を認めていた。そして、漱石の文学だけでなく、近代化批判意識を表した『土』序の内容も、



日本の国家資本主義の発展で呑み込まれた台湾植民地社会を憂慮し、『土』を愛読した張文環によって意識されていた。島崎藤村の文学に関しては、漱石は父権体制の封建思想の問題に直面した『破戒』のリアリズムの文学精神を賛美し、のちの創作でも父権体制の残存と国粹主義の問題を提起したり批判したりして、独自の「個人主義」に辿り着いた。一方、藤村文学への張文環の関心は、帝政批判に繋がる封建階級への批判意識と、作品によく取り上げている父権体制への批判に繋がっている。漱石と張文環のそういう共通な文芸的関心は、人道主義の同情深い視線を流露し、それぞれ国民国家統合とそれに伴った近代化を批判する文芸思想の展開に繋がることによって、両作家の文芸思想の接点を示している。

漱石は、心理学と社会学の理論を応用した『文学論』の中で、文学社会学の発端となったスタール夫人の交友圏で形成した「時代思潮 (Zeitgeist)」という言葉で「通語」として「社会進化の一時期における F」で指し示し、それが個人の「一刻の意識における F」の集合によって形成されていると説明している²⁹⁰。その理論を借りて例えれば、国民国家統合に対する漱石と張文環のそれぞれの批判を個人の「一刻の意識における F」だとしたら、長塚節の『土』と島崎藤村の文学への関心のほかに、明治三十年代に流行していた社会小説の流れを汲み、制度上の道徳を打破するイプセンを賞賛し、ロシア革命に同情的な文学者アンドレーエフの文学に関心していた漱石と、帝政批判のプロレタリア活動に参加し、『フォルモサ』の階級批判の理念を引き継ぎ、植民地の現実を描き出す地方主義文学と近代化の現実を自然主義の手法で暴露する台湾文壇の文芸表現の流れを汲んだ張文環の繋がりには、まさに「社会進化の一時期における F」、すなわち国民国家統合とそれに伴った近代化に抵抗する「時代思潮 (Zeitgeist)」の一端をなしている。

そのほかの文学者や知識人を取り入れ、共時的や通時的に時代思潮の形成を論じる可能性もあるでしょう。国民国家統合に対する批判意識に止まらず、時代思潮は実際にいろんな要素を含んでいる。よい研究対象が見つければ、ぜひ

²⁹⁰ 夏目漱石『文学論 (上)』岩波書店, 2011, P37-39

その課題で研究の範囲を広めていきたいと考えられる。





参考文献

一、テキスト

(一)、夏目漱石

1. 夏目漱石『それから』新潮文庫, 2002
2. 夏目漱石『三四郎』新潮文庫, 2006
3. 夏目漱石『こゝろ』新潮文庫, 2006
4. 夏目漱石『二百十日・野分』新潮文庫, 2007
5. 夏目漱石『夏目漱石全集 10』ちくま文庫, 2009
6. 夏目漱石『草枕』新潮文庫, 2011
7. 夏目漱石『文学論 (上)』岩波書店, 2011

(二)、張文環

1. 「父の要求」(1935. 9. 24『台灣文藝』2 卷 10 号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
2. 張文環「過重」(1935. 12. 28『台灣新文學』創刊号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2001
3. 張文環『山茶花』(1940. 1. 23~5. 24「台灣新民報」) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
4. 張文環「頓悟」(『台灣文學』2 卷 2 号 1942. 3. 30) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心
5. 張文環「地方生活」(『台湾文学』2 卷 4 号 1942. 10. 19) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
6. 張文環「閩雞」(1942. 7. 11『台湾文学』2 卷 3 号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
7. 張文環「迷児」(『台湾文学』3 卷 3 号 1943. 7. 31、陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
8. 張文環「媳婦」(『台湾文学集』1943. 11. 17) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
9. 張文環「雲の中」(『台灣文藝』1 卷 5 号 1944. 11. 1) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011

二、単行本



(一)、文学研究

1. 相馬庸郎『日本自然主義再考』八木書店，1981
2. 瀬沼茂樹『夏目漱石』（第13刷）東京大学出版会，1987
3. 秋山公男『漱石文学論考—後期作品の方法と構造—』桜楓社，1987
4. 吉田精一『島崎藤村』桜楓社，1988
5. Robert Escarpit『文學社會學』葉淑燕訳，遠流出版，1990
6. 三好行雄編『夏目漱石事典』（二版）学燈社，1992
7. 平川祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘—』（第2刷）講談社，1993
8. 井東襄『大戦中に於ける台湾の文学』近代文藝社，1993
9. 范淑文『漱石研究「草枕」その究極』凱倫，2002
10. 三好行雄編『講座夏目漱石 第5巻（漱石の知的空間）』有斐閣，2004.09
11. 柳書琴『荊棘之道臺灣旅日青年的文學活動與文化抗爭』聯經，2009
12. 游勝冠『殖民主義與文化抗爭·日據時期臺灣解殖文學』群學，2012.04


(二)、歴史・思想・文化史研究

1. 福沢諭吉『福沢諭吉全集第三巻』岩波書店，1958
2. 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』勁草書房，1971
3. 飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』晶文社，1970.10
4. 中村哲『世界資本主義と明治維新』青木書店，1978
5. 色川大吉『明治の文化』（第9刷）岩波書店，1979.03
6. 李會園『日據時期臺灣師範教育制度』南天，1997
7. 許佩賢『殖民地臺灣的近代學校』遠流出版，2005
8. 周婉窈『台灣歷史圖說』聯經，2009
9. 陳芳明『殖民地摩登：現代性與台灣史觀』麥田，2011

三、刊行論文

(一)、漱石研究

1. 安部能成『『こゝろ』を讀みて』（「思想」1935.11）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991
2. 小宮豊隆『『心』』（「漱石の芸術」1942.12）『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991


- 
3. 中村光夫「文明開化の性格」(「文学界」1944)『日本文学研究資料叢書 I 夏目漱石』有精堂, 1990
 4. 吉田孝次郎「漱石三部作の世界」(「文学」1945)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社, 1995
 5. 亀井勝一郎「長井代助—現代文学にあらはれた智識人の肖像—」(「群像」6巻2号, 1951, 02)『漱石作品論集成第六卷それから』1995. 04
 6. 吉田孝次郎「漱石三部作の世界」(「文学」1954. 05)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社, 1995
 7. 猪野謙二『『それから』の思想と方法』(『岩波講座文学の創造と鑑賞』一卷, 1954. 11)『漱石作品論集成第六卷それから』1995. 04
 8. 瀬沼茂樹『『行人』』(『夏目漱石』1962. 03)『漱石作品論集成第九巻 行人』桜楓社, 1991
 9. 三浦泰生「漱石の「心」における一つの問題」(『日本文学』13巻5号1964. 05)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社, 1991
 10. 畑有三「心」(「国文学」10巻10号1965. 08)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社, 1991, P65
 11. 遠藤祐「漱石の反自然主義をめぐって—『虞美人草』の周辺—」(『日本近代文学』3集1965. 11)『漱石作品論集成第三巻 虞美人草・野分』桜楓社, 1991. 07
 12. 山田晃「夏目漱石における倫理観私見」『駒澤大學文學部研究紀要』24号, 駒澤大學文學部, 1966-03
 13. 稲垣吾郎「Xさんへの手紙」(『漱石全集』14巻月報13, 1966. 12)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社, 1991
 14. 山田晃「夏目漱石における倫理観補論」『駒澤大學文學部研究紀要』25号, 駒澤大學文學部, 1967-03
 15. 高橋春雄「写生文と自然主義—『俳諧師』と『続俳諧師』まで—」『解釈と鑑賞』33(11), 至文堂, 1968. 09
 16. 丸谷才一「徴兵忌避者としての夏目漱石」(「展望」1969. 06)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社, 1991
 17. 小泉浩一郎「漱石「心」の根底—「明治の終焉」」(「文学・語学」53号1969. 09)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社, 1991
 18. 駒尺喜美「「行人」論—到着点と出発点と—」(『漱石 その自己本位と連帯と』1970. 05)『漱石作品論集成第九巻 行人』桜楓社, 1991
 19. 内田道雄『『三四郎』論—上京する青年—」(「国文学言語と芸術」1971. 03)『漱石作品論集成第五巻三四郎』桜楓社, 1995
 20. 前田愛「明治四十年代の青年像—『三四郎』論—」(「国文学」16. 12臨時号



1971. 03) 『漱石作品論集成第五卷三四郎』 桜楓社, 1995
21. 越智治雄「『三四郎』の青春」(『漱石私論』1971. 06) 『漱石作品論集成第五卷三四郎』 桜楓社, 1995
22. 越智治雄「こゝろ」(『漱石私論』1971.06) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』 桜楓社, 1991
23. 西垣勤「『こゝろ』覚書」(『日本文学』20 卷 9 号 1971.09) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』 桜楓社, 1991
24. 荒正人「『こゝろ』」(『漱石文学全集 6 卷』解説 1971. 12) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』 桜楓社, 1991
25. 安藤靖彦「「草枕」論」(『国語と国文学』1972. 04) 『漱石作品論集成第二卷 坊ちゃん・草枕』 桜楓社, 1990. 12
26. 佐藤勝「「草枕」論」(『国語と国文学』1972. 04) 『漱石作品論集成第二卷 坊ちゃん・草枕』 桜楓社, 1990. 12
27. 野崎守英「漱石における自己—『こゝろ』を中心に—」(『実存主義』60 号 1972. 06) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』 桜楓社, 1991
28. 重松泰雄「夏目漱石一起点としての「それから」を中心に—」(『日本近代文学』17 集, 1972. 10) 『漱石作品論集成第六卷それから』 1995. 04
29. 小泉浩一郎「「草枕」論—画題成立の過程を中心に—」(『国文学言語と文芸』1973. 02) 『漱石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』 桜楓社, 1990. 12
30. 熊坂敦子「『虞美人草』—文明の功罪—」(『夏目漱石の研究』1973. 03) 『漱石作品論集成第三卷 虞美人草・野分』 桜楓社, 1991. 07
31. 熊坂敦子「『それから』—自然への回帰—」(『日本近代文学』10 集, 1973. 03) 『漱石作品論集成第六卷それから』 1995. 04
32. 大岡昇平「『こゝろ』の構造」(『文学界』1973. 09) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』 桜楓社, 1991
33. 清水孝純「「草枕」の問題—特に「ラオコーン」との関連において—」(『文学論輯』21, 1974. 03) 『漱石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』 桜楓社, 1990. 12
34. 桑田和夫「『道草』論」(『作品』2 号 1974. 05)、『漱石作品論集成第十一卷 行人』 桜楓社, 1991. 06
35. ジェイ・ルービン「『三四郎』—幻滅への序曲—」(『季刊芸術』30, 1974. 07) 『漱石作品論集成第五卷三四郎』 桜楓社, 1995
36. 熊坂敦子「反近代・日本の漱石」『解釈と鑑賞』40 (2) 学燈社, 1975. 02
吉田熙生「『草枕』序説」(初出記されず 1976) 『漱石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』 桜楓社, 1990. 12
37. 平岡敏夫「「虞美人草」論」(『漱石序説』1976) 『漱石作品論集成第三卷虞




- 美人草・野分』桜楓社，1991. 07
38. 大久保典夫「『虞美人草』論ノオト」(『作品論夏目漱石』1976)『漱石作品論集成第三卷虞美人草・野分』桜楓社，1991. 07
39. 萬田務「『三四郎』への一視点：その文明批評的側面」『大阪城南女子短期大学研究紀要』11，1976. 11
40. 磯田光一「『虞美人草』の文脈」(『ユリイカ』9巻12号1977)『漱石作品論集成第三卷虞美人草・野分』桜楓社，1991. 07
41. 秋山公男「『三四郎』小考—「露悪家」美禰子とその結婚の意味—」(『日本近代文学』24，1977. 10)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社，1995
42. 高橋和己「知識人の苦悩」(『高橋和己全集』13巻1978. 05河出書房)『漱石作品論集成第六卷それから』1995. 04
43. 角田旅人「『三四郎』覚書き—美禰子と三四郎—」(『文学年誌』4，1978. 12)『漱石作品論集成第五卷三四郎』桜楓社，1995
44. 平岡敏夫「『こゝろ』と明治の終焉」『解釈と教材の研究』26(13)，1980
45. 片岡良一「『行人』と『こゝろ』の実験」(『片岡良一著作集』9，1980. 02)『漱石作品論集成第九巻 行人』桜楓社，1991
46. 赤井恵子「『草枕』小考」『近代文学試論』(19)広島大学近代文学研究会1980. 11
47. 重松泰雄「Kの意味—その変貌をめぐって—」(『国文学』26巻13号1981. 10)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991
48. 東郷克美「『草枕』水・眠り・死」(『別冊国文学夏目漱石必携』1982. 02)『漱石作品論集成第二巻坊ちゃん・草枕』桜楓社，1990. 12
49. 中山和子「『三四郎』—片付けられた結末—」(『別冊国文学 14 夏目漱石必携 II』1982. 05)『漱石作品論集成第五巻三四郎』桜楓社，1995
50. 斉藤英雄「『真珠の指輪』の意味と役割—『それから』の世界—」(『日本近代文学』29集，1982. 10)『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04
51. 浜野京子「『自然の愛』の両儀性—『それから』における『花』の問題—」(フェリス女子学院大学『玉藻』19号，1983. 06)『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04
52. 酒井英行「『自然の昔—『それから』論—」(『国文学研究』82集，1984. 03)『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04
53. 三好行雄「『こゝろ』鑑賞」(『鑑賞日本現代文学 5 夏目漱石』1984. 03)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991
54. 猪野謙二「『心』における自我の問題」(『世界』36号1984. 12)『こゝろ漱石作品論集成第十巻』桜楓社，1991
55. 前田愛「世紀末と桃源郷—『草枕』をめぐって—」(『理想』1985. 03)『漱

- 
- 石作品論集成第二卷坊ちゃん・草枕』桜楓社，1990. 12
56. 藤井省三「『彼岸過迄』—「自我」の探求とアンドレーエフ文学」(『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』平凡社、第三章「漱石とアンドレーエフ」より、1985.04) 『漱石作品集第八卷』桜楓社，1991. 08. 10
57. 西成彦「鷗外と漱石—乃木希典の「殉死」をめぐる二つの文学—」(「比較文学」28号1986.03) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社，1991
58. 松本寛「『こゝろ』論—<自分の世界>と<他人の世界>のはざままで—」(『夏目漱石—現代人の原像』1986.06) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社，1991
59. 佐藤泰正「『こゝろ』—<命根>を求めて—」(『夏目漱石論』1986.11) 『こゝろ漱石作品論集成第十卷』桜楓社，1991
60. 石原千秋「反=家族小説としての「それから」」(「東横国文学」19号，1987.03) 『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04
61. 大岡昇平「姦通の記号学—『それから』『門』をめぐる—」(『小説家夏目漱石』1988.05) 『漱石作品論集成第六巻それから』1995. 04
62. 浅野洋「三四郎の眠りと父の消息」(「立教大学日本文学」(60)1988.07) 『漱石作品論集成第五巻三四郎』桜楓社，1995. 04
63. 勝又浩「明治文学と父の消去、父の復権」(「国語と国文学」1988.08) 『夏目漱石反転するテキスト』有精堂，1990. 04
64. 鈴木保昭「漱石のオフエリア夢想～草枕の中のシェークスピア」(「立正大学文学部論叢」89，1989，P1-38)
65. 押野武志「静に「声」はあるのか—『こゝろ』における抑圧の構造—」『文学』第三巻4号，1992
66. 酒井英行「広田先生の夢—『三四郎』から『それから』へ—」(『漱石その陰翳』1990.04) 『漱石作品論集成第五巻三四郎』桜楓社，1995
67. 小泉浩一郎「人生」『夏目漱石事典』三好行雄編『夏目漱石事典』(二版)学燈社，1992
68. 萩原桂子「『草枕』論：浮遊する魂」『九州女子大学紀要. 人文・社会科学編』34(3)，1998
69. 佐藤泉「変動する漱石」『文学季刊』1(2)，2000
70. 佐藤泰正「漱石探究：『こゝろ』から何が見えて来るか」『日本文学研究』38，2003-02
71. 平川祐弘「汽車の走らぬ世界—漱石にとってのピトロクリ—」『講座夏目漱石 第5巻 (漱石の知的空間)』有斐閣，2004.09



(二)、張文環研究

1. 葉石濤「論張文環的《在地上爬的人》」(「民衆日報」1978) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館, 2011
2. 張恆豪「張文環的思想與精神」(『臺灣文藝』81 期 1983) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館, 2011
3. 施淑「簡析〈辣蕪罐〉」(『中國現代短篇小說選析』第 2 卷, 1984、柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館, 2011
4. 野間信幸「張文環の「父の要求」について」東洋大学中国哲学文学学科紀要 (3), 1995
5. 陳萬益「一個殖民地少年的啟蒙之旅—析論張文環小說〈重荷〉」(「中央日報」19 版 1996) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011
6. 森相由美子『日据時代文学 張文環「山茶花」作品論』中國文化大學日本研究所 (1998)
7. 江寶釵「張文環〈閩雞〉中的民俗與性別意識」『中國學術年刊』第二十一期, 2000. 03
8. 張文薰「派遣作家としての張文環—「雲の中」に語られたもの」藤井省三、黃英哲、垂水千惠編『台湾の「大東亞戦争」: 文学. メディア. 文化』東京大学出版会, 2002
9. 吳麗櫻「張文環小說中女性題材之研究」中興大學中國文學系碩士在職專班, 2004
10. 陳建忠「一個殖民地作家的自畫像 論張文環小說中的成長主題」(『日據時期臺灣作家論: 現代性·本土性·殖民性』2004. 08) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011
11. 野間信幸「《福爾摩沙》創刊前的張文環」(『東洋大学中国哲学文学学科紀要』13 号 2005. 03) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011
12. 張文薰『植民地プロレタリア青年の文芸再生—張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学—』東京大学大学院人文社会系研究科, 2005
13. 王萬睿「跨不過語言的一代」(『殖民差異與認同: 張文環與鍾理和鄉土主體的繼承』2005) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館 2011
14. 中島利郎「日本統治期台湾文学研究「台湾文芸家協会」の成立と『文芸台湾』—西川満の「南方の烽火」から」岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編 45, 2006-02

- 
15. 鍾惠芬「張文環的文學活動及其小說主題意涵研究」屏東教育大學中國語文學系, 2007
 16. 張文薰「「故鄉」記往與想像的敘事學 論張文環文學之梅山地區書寫」(2010『臺灣文學研究集刊』) 柳書琴、張文薰編『臺灣當代作家研究資料彙編 06 張文環』國立臺灣文學館, 2011

(三)、漱石と張文環の比較研究

1. 李郁蕙「「未亡人」の家—日本語文学と漱石の『こゝろ』」『日本研究』31集, 2005. 10
2. 曾秋桂「試圖與日本近代文學接軌, 反思國族論述下的張文環文學活動」『台灣文學學報』第十二期, 2008. 06
3. 蕭幸君「<知>の覇権へのまなざし—漱石『虞美人草』と張文環『芸姐の家』を中心に—」『越境する漱石文学』思文閣, 2011. 03

(四)、歴史・文化史研究

1. 加藤二郎「<自然>と<法>—漱石と国家—」『夏目漱石反転するテキスト』有精堂 1990
2. 周婉窈「實學教育、郷土愛與國家認同」『臺灣史研究』第四期第二卷, 1997
3. 野村明宏「植民地における近代的統治に関する社会学—後藤新平の台湾統治をめぐって」『京都社会学年報』第七号, 1999
4. 西川長夫「日本型国民国家の形成—比較史的観点から—」西川長夫・松宮秀治『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社, 1999. 02
5. 陳芳明「殖民地傷痕及其終結」『聯合文学』191期, 聯合報, 1999
6. 佐藤俊樹「社の庭—招魂社-靖国神社をめぐる眼差しの政治」(『社會科學研究』57 (3/4) 東京大学総合文化研究科 2006-03
7. 鳥井正晴「「明治の精神」—その典拠と、漱石の認識」『明治国家の精神史的研究—<明治の精神>をめぐって』以文社, 2008
8. 嘉戸一将「「忠君」と「愛国」—明治憲法体制における「明治の精神」」『明治国家の精神史的研究—<明治の精神>をめぐって』以文社, 2008
9. 石婉舜「厚生演劇研究會初探」(『臺灣史研究』第七卷第二期、中央研究院台灣史研究籌備處, 2001. 06)




(五)、方法論研究

1. 濱崎一敏「経験的文学社会学の基本原理と問題点」『長崎大学教養部紀要(人文学篇)』第21巻第2号, 1981.01

四、評論、資料

(一)、夏目漱石に関して

1. 「商科大学問題の運動」『朝日新聞縮刷版』1909年4月20日(朝日新聞記事データベース)
2. 「日糖事件(大石正巳氏の談)」『朝日新聞縮刷版』1909年4月20日(朝日新聞記事データベース)
3. 「大隈伯爵建部博士高商学生評」『朝日新聞縮刷版』1909年5月20日(朝日新聞記事データベース)
4. 長塚節「佐渡が島」(明治40. 11.1「ホトトギス」第十一巻第二号)『長塚節全集 第二巻』春陽堂書店, 1929
5. 島崎藤村「融和問題と文芸」『融和時報』中央融和事業協会 1928. 3. 1
6. 夏目漱石『漱石全集第二十四巻』岩波書店, 1957
7. 夏目漱石『漱石全集第二十五巻』岩波書店, 1957
8. 夏目漱石『漱石全集第二十六巻』岩波書店, 1957
9. 夏目漱石『漱石全集第二十八巻』岩波書店, 1957
10. 夏目漱石「明治34年4月頃以降の断片」『漱石全集第二十四巻』岩波書店, 1957
11. 夏目漱石「明治38.39断片」『漱石全集第二十四巻』岩波書店, 1957
夏目漱石「明治39年断片」『漱石全集第二十四巻』岩波書店, 1957
12. 夏目漱石「明治39年4月3日森田米松宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店, 1957
13. 夏目漱石「明治39年8月7日芥舟先生宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店, 1957
14. 夏目漱石「明治39年8月12日深田康三宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店, 1957
15. 夏目漱石「明治39年10月26日鈴木三重吉宛書簡」『漱石全集第二十八巻』岩波書店, 1957
16. 夏目漱石「『坑夫』の作意と自然派傳奇派の交渉」『漱石全集第三十四巻』岩波書店, 1957


- 
17. 夏目漱石「明治 41 年初夏以降の断片」『漱石全集第二十五卷』岩波文庫, 1957
 18. 夏目漱石「問題的文艺」(明治 41.6)『漱石全集第三十四卷』岩波書店, 1957
 19. 夏目漱石「明治四十二年三月十二日、三月十八日、三月十九日、三月二十三日、三月二十八日、四月二日日記」『漱石全集第二十五卷』岩波書店, 1957
 20. 夏目漱石「明治 42 年 4 月 16 日日記」『漱石全集第二十五卷』岩波書店, 1957
 21. 夏目漱石「明治 42 年 4 月 25 日日記」『漱石全集第二十五卷』岩波書店, 1957
 - 夏目漱石「明治 42 年 5 月 24 日日記」『漱石全集第二十五卷』岩波書店, 1957
 22. 夏目漱石「明治 44 年 11 月 11 日日記」『漱石全集第二十六卷』岩波書店, 1957
 23. 夏目漱石「釣鐘の好きな人」(大正 4. 3.1 『俳味』)『漱石全集第三十四卷』岩波書店, 1957
 24. 夏目漱石「大正 4 年 12 月頃より大正 5 年 7 月 27 日までの断片」『漱石全集第二十六卷』岩波書店, 1957
 25. 北村透谷「明治文学管見」『現代日本文学大系 6 北村透谷・山路愛山集』筑摩書房, 1969
 26. 夏目漱石「『土』に就て——長塚節著『土』序——」長塚節『土』日本近代文学館, 1970
 27. 夏目漱石「文艺の哲学的基礎」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫, 2009
 - 夏目漱石「文艺と道德」『夏目漱石全集 10』ちくま文庫, 2009
 28. 夏目漱石「現代日本の開化」『夏目漱石全集 10』(第 10 刷)ちくま文庫, 2009
 29. 夏目漱石「私の個人主義」『夏目漱石全集 10』(第 10 刷)ちくま文庫, 2009

(二)、張文環に関して

1. 張我軍「文艺上の諸主義(續)」(『台湾民報』87-88, 1926)『日本統治期台湾文学・文艺評論集第一卷』緑蔭書房, 2001
2. KS 生「文艺上の酥穢描寫」(『南音』1(8)1932.05.22)『日本統治期台湾文学・文艺評論集第一卷』緑蔭書房, 2001
3. 芥舟「社会改造与文学青年」(『南音』1(11)1932.07.20)『日本統治期台湾文学・文艺評論集第一卷』緑蔭書房, 2001
4. 滝澤鐵也「主题の積極性」(『台湾文学』6月号8~9, 1932)『日本統治期台湾文学・文艺評論集第一卷』緑蔭書房, 2001
5. 楊行東「台湾文艺界への待望」(『フォルモサ』1号1933)『日本統治期台湾文学・文艺評論集第一卷』緑蔭書房, 2001
6. 吳坤煌「台湾の郷土文学を論ず」(『フォルモサ』2号1933)『日本統治期台



- 湾文學. 文芸評論集第一卷』綠蔭書房, 2001
7. 劉捷「臺灣文學の鳥瞰」(『台灣文藝』1 卷 1934 (台灣文芸連盟)) (『日本統治期台灣文學. 文芸評論集第一卷』綠蔭書房, 2001
 8. 楊達「臺灣の文學運動」(『文学案内』1935. 01. 04) (『日本統治期台灣文學・文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001
 9. 台灣文芸連盟「台灣文聯東京支部第一回茶話會」(『台灣文藝』2 卷 4 号, 1935. 04. 01) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
 10. 劉捷「續臺灣文學鳥瞰」(『台灣文藝』2 卷 3 号, 1935. 05 (台灣文芸連盟)) (『日本統治期台灣文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001
 11. 張文環「自分の悪口」(『台灣文藝』2 卷 3 号, 1935. 05 (台灣文芸連盟)) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
 12. 張文環「謝る」(『台灣文藝』2 卷 5 号, 1935. 05. 05) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
 13. 楊達「台湾文壇の近情」(1935) (『日本統治期台灣文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房, 2001
 14. 台灣新文學社「臺灣の新文學に所望する事」(『台灣新文學』1, 1935. 12. 28) (『日本統治期台灣文學. 文芸評論集第二卷』綠蔭書房
 15. 張文環「強ひられた題目」(『台灣文藝』3 卷 6 号, 1936. 05. 29) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
 16. 張文環「明信片」(1936. 04. 01 (『台灣新文學』)) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2001
 17. 台灣文芸連盟「台湾文学当面の諸問題: 文聯東京支部座談会」(『台灣文藝』7、8 卷 1936. 8. 28) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心
 18. 張文環「平林彪吾の思い出」(1940. 04. 13 台湾日日新報) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
 19. 藤野雄士「張文環と“山茶花”についての覚え書」(『臺灣藝術』第 1 卷第 3 号 1940. 05) 中島利郎, 河原功, 下村作次郎編『日本統治期台灣文學. 文芸評論集第三卷』綠蔭書房, 2001
 20. 張文環「台湾文学の自己批判」(『新文化』8 月号早稲田大学 1941. 08. 01) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
 21. 台灣文芸連盟「「台湾代表的作家の文芸を語る」座談会」(1941. 11. 01 (『台灣藝術』第三卷一号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2001
 22. 藤野雄士「「夜猿」その他・雑談」(「台湾文学」2 卷 3 号 1942) 中島利郎,

- 
- 河原功, 下村作次郎編『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第四卷』緑蔭書房, 2001
23. 皇民奉公會臺北州支部娛樂指導班「臺北州下に青年演劇挺身隊の根本理念に就て」(「台湾文学」2 卷 3 号 1942) 中島利郎, 河原功, 下村作次郎編『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第四卷』緑蔭書房, 2001
24. 工藤好美「臺灣文化賞と臺灣文學—特には濱田・西川・張文環の三氏について」(『台湾時報』1943.03)『日本統治期台湾文學. 文芸評論集第四卷』緑蔭書房, 2001
25. 張文環「雑誌『台湾文学』の誕生」(1979. 8. 30『台湾近現代史研究』第2号) 陳萬益編『張文環日本語作品及び草稿全編』台中縣立文化中心, 2011
26. 柳書琴編張文環年表、陳萬益編『張文環全集第八卷』中縣文化, 2002